中等教育

明治三十五年五月十三日第三種郵便物認可

第拾號

明治三十六年一月十日發行
（每月一回十日發行）

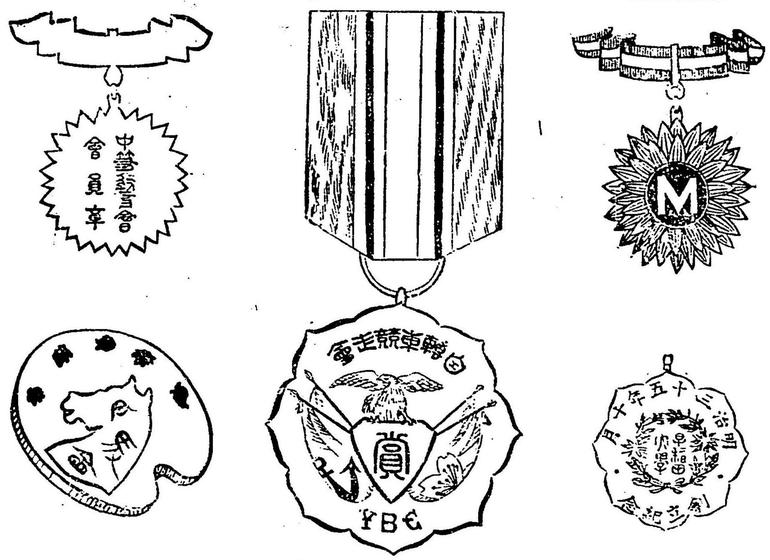
早稲田大學祝典行進歌
我が旅路
目白臺
日章旗
晨の鐘
西洋武士の魂
武士道の標本池田市郎兵衛
滿足の詩
笑の説
幼い爭と雀の雛
筆のまに〳〵
懸賞作文
中學日記

大和田建樹
戸川殘花
杉谷代水
森ちつか
松村介石
町田蘇川
永持靜
長田秋濤
河野桐谷
南泉

吉男帝王の幼時
高田屋嘉兵衛
三五日記
蜘蛛の風車
金に就ての話
故人の逸事
ロスチャイルド家
破隊
男らしき行爲
西班牙幼帝と攝政太后
無線電信
二十話
商界の明星（政治村清之助）

森ちつか
町田藍川
村山島遜
大塚幸江
伊藤秋南
池田晃淵
楮鷹峯
大塚幸江
德田秋江
志つか
鳥遜生
小塚空谷
そんよう生

早稲田大學御用徽章類調製所



弊店ハ從前ヨリ斯業ヲ營ミ日進月歩隆盛ニ趣キ候ハ單ニ顧客諸賢ノ賜ト感謝スルノ外無之之レガ恩賜ニ酬ントスルニハ唯勉强ノ二字アルノミ左レハ弊店ハ益〻奮勵シ優美高尚、品質堅牢、意匠新、價格低廉　時日確守ノ五項ヲ主旨トシテ調製致候ニ付倍舊御用命之程謹而奉懇願候
○勳章綬窓掛類凡テ組糸ニ關スル一切ノ裝飾品營業致居候間御注文願上候
追白七寶入徽章ハ弊店ノ特色ニ御座候又御佩用ノ勳章毀損ノ場合ニハ早速御依頼被降度原形ヲ失セズ叮嚀廉價ニ御修繕申上候也

皇國各國勳章綬非ニ略綬　日本赤十字社々員章并ニ略綬
金銀細工七寶入徽章金銀盃木盃

内閣賞勳局御用杉村分店
旭堂長谷川商店
東京市芝區芝口壹丁目貳番地

小英雄　孤島生
ドラ物語　遅島
エミール・ゾラ　竹田元
四十餘夢物語　岳王散士
奇人譚　大塚素江
父と子三美談　C m生
千古の波音（ホレーシヨの武勇譚）　遅幼生
新年の瞑想　芽出度散人
自助論（スマイルズ氏の著書）　白村生
燈筆ファーベル男爵　峯のあらし
音樂本尊　酒井勝軍
馬蹄の響（續千古の波音）　遅幼生
北清の話　高屋吸江

英國軍隊の話　太平洋民
天籟（盲詩聖ミルトン）　村羊
希臘神話梗概（孟閼爾より希臘建國まで）　杉谷代水譯
日用語彙　杉谷代水譯補
數學界の怪物チヤマンチ氏　長田秋濤
會員葉書帖　木堂
人と說話
地方通信　遅幼生
世界日記
眼の不思議な作用
希臘神話梗概（ホーロー流寓よりアケヤベットの東半島まで）　杉谷代水譯補
の半面　新戸部博士

古川常兵衛氏と浅野総一郎氏
希臘神話梗概（メヂサの頭）
山びこ（人の眼に映したる押川師）
新室内遊戯法
フリードリッヒ大王の逸事
詰の種子
非凡豪傑時代の豪傑
アブラハムリンコルンの逸事
曲再馬琴
ナイル河の戦

白鳥九二
杉谷代水
不系子生
多田茂雄
村山鳥経
中島孤島
有本次郎
長田秋濤
平澤木堂
村羊生

早稻田大學祝典行進歌

（四百餘州ノ譜ニテ歌フ）

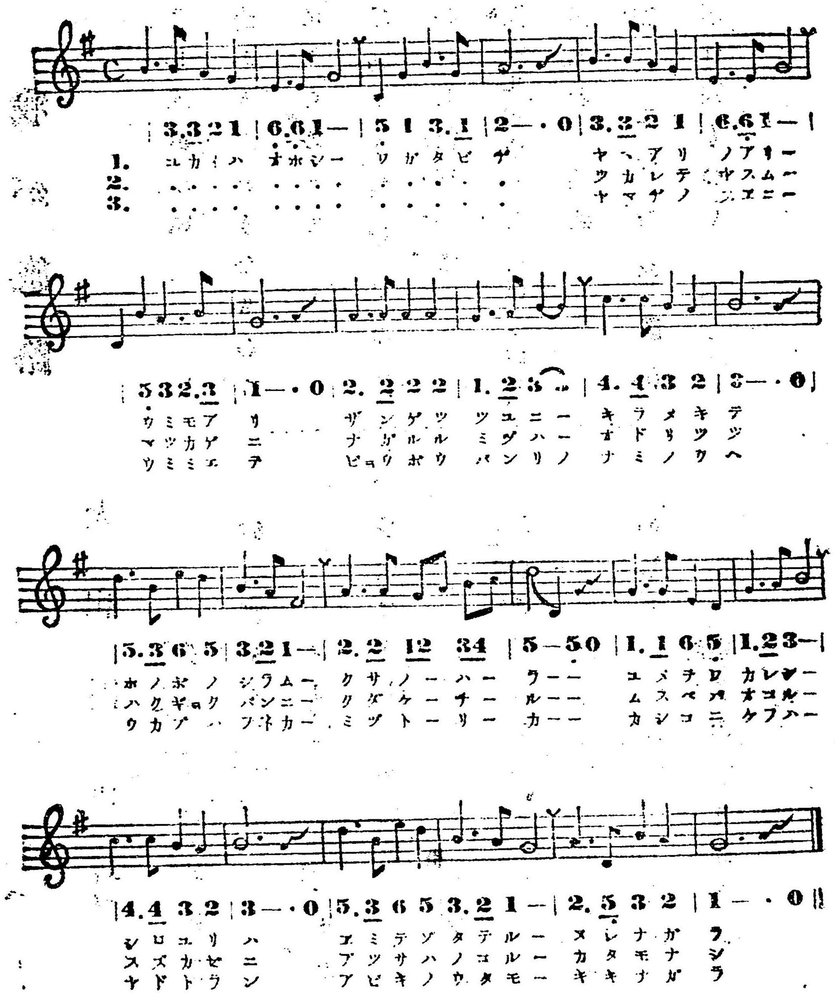
煌々五千の炬火は、城西の天を燬き、
今ぞ立ち出づる、早稻田の健兒隊。
東洋君子の國に、眞個の學徒あり。
學の獨立を、屹然標榜し、
主義は活動進取、學理と應用と、
校氣忽ちに、天下を風靡して、
進む二十の秋を、重ねし心地よさ、
名實備はれり、早稻田の大學と。
（コレニテ「萬歳」ヲ三呼シテ次ノ句ニカヽル）
時は聖代秋は、今正に闌に、
星火天にあり、炬火亦地に滿り。
來れ有爲の徒、理想の火を揭げ、
いざや聲揚げて、世界に呼號せん。

（「萬歳」ヲ三呼ス）

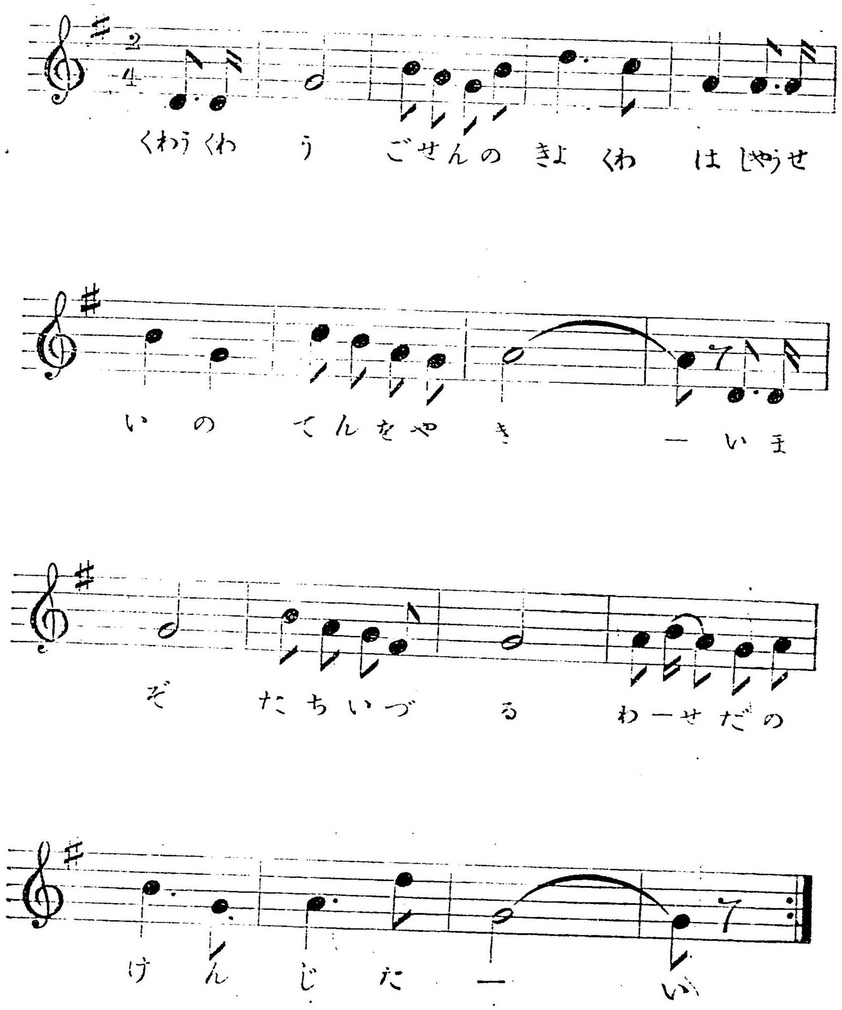
我が旅路

（ニ調四分の四拍子）

愉快ニ　　田村虎藏作曲



早稲田大學祝典行進曲



我が旅路

一、愉快は多し我が旅路
　山あり野あり海もあり
　殘月露にきらめきて
　はの〳〵白む草の原

二、愉快は多し我が旅路
　夢を別かれし白百合は
　笑みてぞ立てる如れながら。
　疲れて休む松蔭に
　流る丶水は躍りつ丶

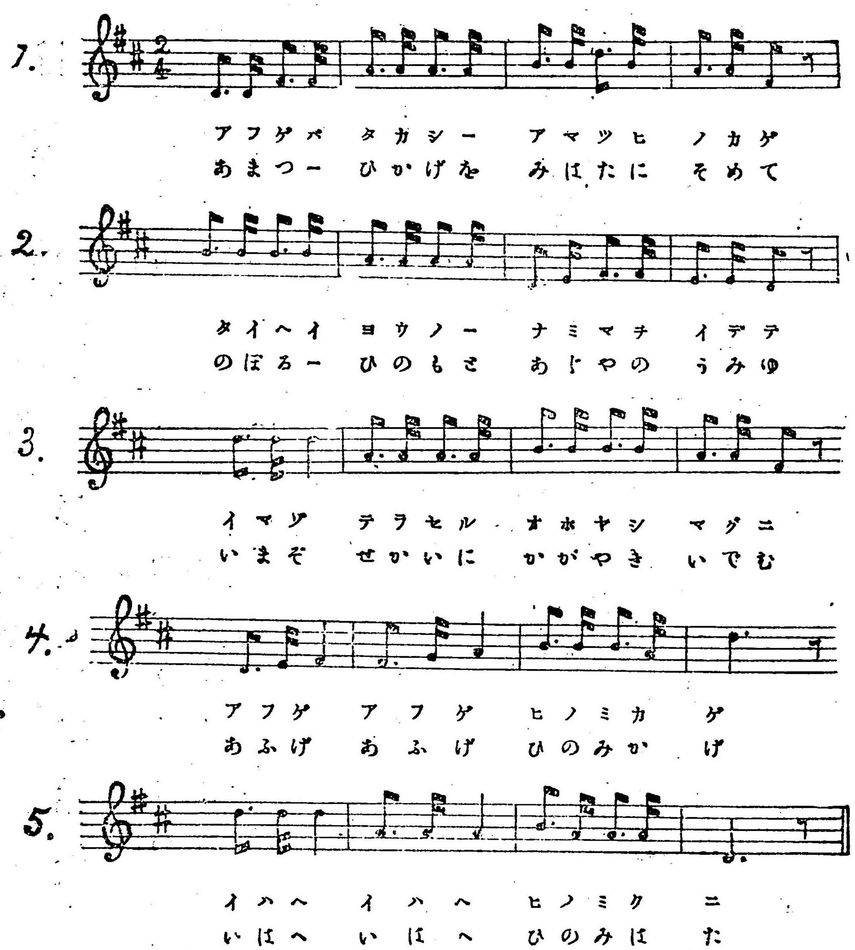
三、愉快は多し我が旅路
　山路の末に海見えて
　渺茫萬里の波の上
　浮ぶは舟か水鳥か
　かしこに今日は宿とらん
　網引の歌も聞きがてら。

大和田建樹

日章旗

(子拍二調に)

快活に　　曲作藏虎村田



日章旗

(一)
仰げは高し、天つ日の影、
太平洋の、波間を出でて、
今ぞ照らせる、大八洲國。
仰げ〳〵日の御影、
祝へ〳〵日の御國。

(二)
天つ日影を、御旗に染めて、
登る日の本、亞細亞の海ゆ、
今ぞ世界に、かがやき出でむ。
仰げ〳〵日の御影、
祝へ〳〵日の御旗。

(三)
くらきを許さぬ、威烈のすがた、
弱きを助くる、恵みの光、
これぞ畏き、天つ日の徳。

(四)
天かぎり無く、地はとこしへに、
榮ゆく萬物、生々の道、
これぞ尊き、皇國の道よ。
仰げ〳〵日の御影、
祝へ〳〵日の御旗。

(五)
いざや光を、世界に布きて、
闇を萬里に、逐ひ却けん、
げにふさはしき、天つ日の旗。
仰げ〳〵日の御影
祝へ〳〵日の御旗

杉谷代水作歌

目白臺

春

目白の臺を見わぐれば
かの疏儀莊もかしこかと
季吟のぬしの面影を
花の樹の間に忍ぶなり

夏

五月雨塚のあたりこそ
翁のめでし處かと
仰げば空に不如歸
今も雲井になのるなり

秋

高田の方をながむれば
赤の手綱もいさましき
武士のはまれと堀部氏を
紅葉の色に忍ぶなり

冬

かゝる野山も大君の
御代の光に白雪の
きらめく甍こゝかしこ
學の校となりにけり

戸川殘花

『殘花曰、北村季吟は元祿二年六十六歳にて歌學所出仕に召され元祿十二年再昌院法印と號すべき台命あり後に疏儀莊といへる別墅をまうけ風月を吟嘯し八十有二にて殘す。芭蕉翁も亦元祿七年五十二にて世を逝れり未だ世に顯れざりし頃水道工事を監督す今の田中子の邸中に其蹟あり堀部氏また赤穗浪人の錚々たる者なり』

晨の鐘

1. かねーならあしたのーかねのね
2. カネーナルアシタノーカネノネ

しゆくせよとのあうたるるいー
アイスベキカナウレシキカネノネ

へいーわのかねのねーよーはー
アシータノウタノネーヤーヒー

あけーはーなーれねつーゆー
キハーチヨロヴートーリー

はははずえにひかりはうみにみなる
ハウタヒヲモーモゴエニオレキ

あーしーたよーしさんはーえめり
カーネーノネーナンレヲーカエテ

かーねさろうれしきかーねのー
アシタノカネヤビフニウーマレー

ねうーれしきかねのねしもはえめーり
ヲタノーレキアシタノウレレキカネノネ

目白臺

戸川殘花　　酒井梅慈

CON ESTRO POETICO.

りじろの　だいた　みあぐーれー　に

かのそぎ　さうも　かしこーいー　さ

きぎんの　ぬーしの　おもかげ　を
(おもかげな)

Ad lib

はなのー　このまに　しのぶーなー　り

晨の鐘

森ふつか

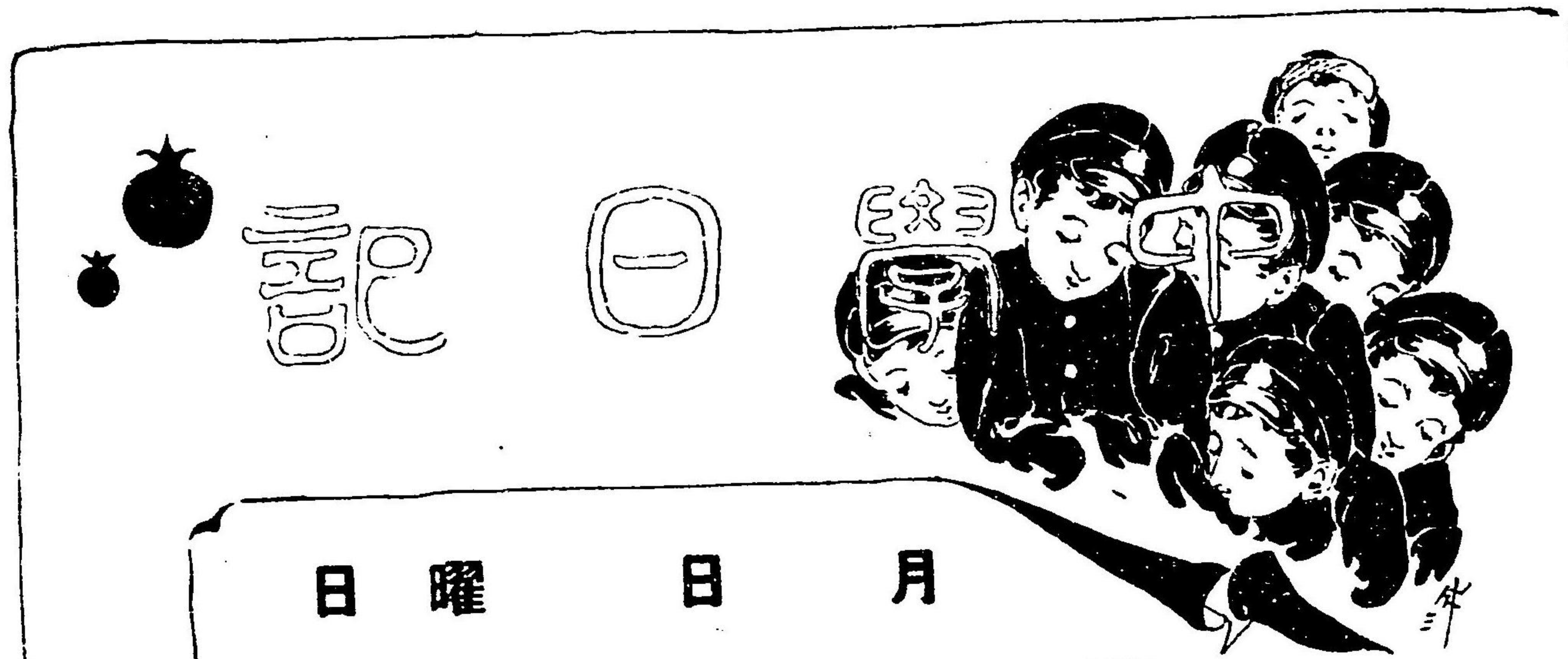
（上）

鐘鳴る、晨の鐘の音、
醒めよ、今日の新たなる日。
平和の鐘の音、夜は明けはなれぬ。
露は葉末に、光は海に、
偉なる晨よ、自然は笑めり。
鐘鳴る、嬉しき鐘の音。
嬉しき鐘の音、今ぞ聞こゆる。

作者附記す。こゝに掲げし唱歌は先つころ第一談話會を開きし折の餘興の一として酒井樹德氏が歌はれし The Bells of Morning と題せる唱歌を大体その意義に從ひ新たに作せるもの。而して裏面に掲げし樂譜は同じ唱歌の樂譜を單音譜に改め、掲げしものなり。

（下）

鐘鳴る、長き鐘の音、
愛すべきかな、嬉しき鐘の音。
長き鐘の音、響きは千尋。
鳥は歌ひぬ、白峰に、
懐しき鐘の音、宴を迎へて。
晨の鐘の音、微風に生れぬ。
樂しき晨の嬉しき鐘の音。



月　日　曜日

學校にて

家庭にて

（和文英譯）……勇悍なるものは武器を擇ばず

（右の英譯）……

A Friend in need is a friend indeed.

（以上の和譯）……

住所

姓名

「中學日記」認め方

日々の日記を其の都度認め置き、他日の備忘に供するとの必要なるは、殊更に云ふまでもなし。吾人は、既に其の必要を感じて日々の日記を認め居らるゝ學生諸君に向かひては、愈々之を勵行せられむことを望むと共に、未た日記を認められしことあらざる諸君に向かひては、一日も早く之を實行せられんことを望むこと切なるが故に、其の奬勵の微意を表せむとして、爰に「中學日記」を募る。其の方法次ぎの如し。

一、この紙の表面に印刷せる「中學日記」欄内には、諸君が日々各自に認めらるゝ日記の中比較的に記憶すべしと認めらるる一日の日記を選び、事實を飾らず、有りのまゝに認められたきこと。

一、和文英譯、英文和譯の問題を添付したれば、日記と共に其の譯文をも認め送られたし。但し、和譯の文体は、雅文、俗文、言文一致などの孰れを取るも隨意たるべきこと。

一、日記及び和英譯文ともに優等なる分をば特に之を本誌に掲ぐべきこと。

一、この「中學日記」用紙は毎號これを添ふべく、而して、十二ヶ月以上繼續して毎月この日記を送られし諸君に對しては、特に、その名譽を表彰すべきこと。

一、應募期限は、來月十日を限りとすること。

一、住所、姓名、及び、月、日、曜日等必ず明瞭に認められたきこと。

一、早稲田大學出版部内中等教育會宛にて送付ありたきこと。

一日記

月　日　曜日

學校にて

家庭にて

A false report rides post.

（以上の和譯）……

（和文英譯……長調に時期を擇ぶことあり）

（右の英譯）……

姓名

住所

「中學日記」認め方

日々の日記を其の都度認め置き、他日の備忘に供するとの必要なるは、殊更に云ふまでもなし。吾人は、既に其の必要を感じて日々の日記を認め居らるゝ學生諸君に向かひては、愈々之を勵行せられむことを望むと共に、未た日記を認められしことあらざる諸君に向かひては、一日も早く之を實行せられんことを望むこと切なるが故に、其の奬勵の微意を表せむとして、爰に「中學日記」を募る。其の方法次ざの如し。

一、この紙の表面に印刷せる「中學日記」欄内には、諸君が日々各自に認めらるゝ日記の中比較的に記憶すべしと認めらるる一日の日記を選び、事實を飾らず、有りのまゝに認められたきこと、

一、和文英譯、英文和譯の問題を添付したれば、日記と共に其の譯文をも認め送られたし。但し、和譯の文体は、雅文、俗文、言文一致などの孰れを取るも隨意たるべきこと。

一、日記及び和英譯文ともに優等なる分は特に之を本誌に掲ぐべきこと。

一、この「中學日記」用紙は毎號これを添ふべく、而して、十二ヶ月以上繼續して毎月この日記を送られし諸君に對しては、特に、その名譽を表彰すべきこと。

一、應募期限は、來月十日を限りとすること。

一、住所、姓名、及び、月、日、曜日等必ず明瞭に認められたきこと、

一、早稻田大學出版部内中等教育會宛にて送付ありたきこと。

讀　叢

西洋武士の魂

（此の講演は松村氏が特に本誌の爲めに述べられたものであります。）

松村介石

我輩が、横濱で學生でありました時に、どうも不思議に考へましたことは、西洋人が、町人でも其の風采が、如何にも士らしく、ステッキを振つて勇ましく歩行く其の面魂、言語擧動は日本の謂はゆる武士に似て、決して、商人とは見えないことでありました。そこで、西洋にも、武士といふものがあるか。如何にして、あの武士らしき人間が出來たかと云ふことを疑ひましたが、所が段々しらべて見るか、日本人が、大和魂とか、日本武士とか云つて此の魂をば自分が獨占して居るように考へて居るが、如何して、西洋では、羅馬希臘時代よりして千數百年の間にこの武士魂を養ひ來たつたのである。こゝに、一つ、古い時代のことであるが、其の武士魂のあらはれて居る一つの話をいたしませう。

今より七百年ばかり前に、英國の王に、エドワルド一世と云ふ人があつた。此の人は、身の丈七尺餘もあつて、力三十人力をかねると云ふ怪力無双の英雄であつた。所が、其の、また、太子で居つた時、亂世の常として、盗賊が四方に徘徊して旅人を脅かし、動々もすれば大名の城をも攻めかねまじき擧動を示して、勢ひ猖獗を極め、諸方に出没して、非常なる亂暴をはたらくことがありました。或る時、此のエドワルド一世は、其の父の命を受けて、此の盗賊を退治に出掛けましたが、盗賊も之をれ聞くと其の山寨より押し出して來て、やがて、兩陣相對することになりました。其の時、あ

る者が、このエドワルドに云ふには、この賊魁は、ゴルドンと云つて、怪力無双のくせもので、其のもとをただせば、初めよりのどろぼうではなく、もとは、一かどの武士であつたが、亂世のことゝてつまらない武士となつて大名の尻について居るのも面白くない、いつそ山賊となつて榮耀榮花を極めたいと云ふ太い了見を出して、つひに山賊となつて居るなり、今は四方に聞こゆる賊の隊長となつて居るのである。其の事を聞くと、エドワルドは、それは面白い。我れは。今日に至るまで。佛國其の他の國々で幾十回となく決闘を試みたが、未だ嘗て敗けたことがない。彼れゴルドン左程の怪力とあるならば、いざ一つ、一騎打を試みでといふところより、其の旨を、賊魁のゴルドンに通じました。臣下は、大にこれを心配し、太子の御身分として、左樣なる冒險を試みらるゝはよろしくないと止むるものも多かつたが、エドワルドはなに、任しておけと云つて、承知しない。さて又、ゴルドンはエドワルドの手紙を見ると、直ちに承知したとあつて、これまた、大劍を提げてやつて來ました。そこで、兩軍相ならんで之れを見物して居る前に、エドワルドとゴルドンとの兩人が、相ならんで七十餘合も戰つたが、勝敗いつかな決しない所から、日本でいふなら打物持つては面倒なり。いざ組まむとあつて、とうとう、馬上で組み打ちをはじめましたが、暫時にして兩人とも馬よりどうと下に落ち、組みつほぐれつ爭つた結果、エドワルドの力やまさりけむ、つひにゴルドンを取り押へてその膝の下にしいてしまつた。ところが、ゴルドンは感心して、如何にも降參仕つた。いざ、いさぎよく首をはねられよと云つて、最早、抵抗する樣子もありません、エドワルドは、之れを見て大に感心し、汝今より泥棒を止めて我れに仕へなば、我れ大に汝を用ゐむと云ふと、ゴルドンも、その德に感じて、如何にも眞實に、もとの武士に戻らむと欲する氣色を示したから、エドワルドは、直

ちに、ゴルドンを扶け起して居城に伴れ歸つた。盜賊の末派等の中にも、其の後好んでエドワルドの臣下に加はつた者があると云ふことであります。どうです。是れ、實に、我が源平時代の武士の擧動に酷似して居るではありませんか。其の勇と云ひ、義と云ひ、謂はゆる昔の武士の魂と云ふものでありませう。

もうひとつ、例を擧ぐれば、是れ、亦英國史中にあることで、かの獅子王リチャードの事であります。此の王は第三十字軍に出陣して、佛帝やゼルマン帝の嫉妬をひいたほどたび〳〵勇敢なる戰をなし勇名を當時の天下に轟かしたものであるが、其の話が面白かつた。彼れがノルマン帝になつて、其の臣下のある大名が反いた時、之れを其の城に圍んで居ると、何處とも知らず矢が飛び來たつて、其の躰をつらぬいた。そこでリチャードは、最早たすからざるものと覺悟していふには、天下の豪傑が、空しく流矢に中たつて死ぬるのは

殘念であるが、しかし、流矢てなく、誰れかねらうて我れを射たものがあるならば、速かに其のものを捕へ來たれ。それまでは、我れ瞑する能はずと云つた。そこで、其の士卒等は、勇を鼓して遂に、敵城を屠り、リチアード王を射たものは無いかと鑿索して見ると、一人の若者があらはれ出て來て、我れこそ眞にねらうてリチアード王を射たものであると云ふ。然らばとありて、直ちにその者を縛り之れをリチアードの前に引いて行くとリチアードは、大に喜び、傷つきながらも、大刀を拔いて之れを斬らうとした。すると、その若者は、莞爾として打ち笑ひ、斬らるゝことはもとよりの覺悟。併しながら、今、汝が我か矢の爲めに、死ぬべく傷つけられたるを見て、實に、從來の憾みをはらし滿足の至りに堪へぬ。汝は記憶せざるべきも、我が父と我が二人の兄弟とは、汝と戰ひて殺されたものである。我れは今首尾よく其の復讐をしたのであるから、最早、世に思ひ殘すことが

ない。速かに我れを首はねよと云つて、更に動ぜず、自若として控へて居ると、リチアードは之れを聞いて如何にも其の武士らしきに感服して、「勇者よ我れ汝を殺すことを恥づ。汝は我を殺して名譽なる復讐を遂げたり。我れ汝が魂を褒むるがために、速かに汝を放免すべし」とわつて、直ちに、之れを放免したるのみならず、臣下に命して、己が紀念まで之れに與へしめ鄭重に之れを歓待せしめたと云ふ。なんと、勇ましい話ではないか。

西洋では、羅馬時代より、かういう、話がいくらもあるのである。かのナポレオンガ愛讀したといふ。プルタークの『偉人傳』を見ると、その中に數十人の傳記が出て居るが、大抵このような話に滿ちて居る。それにストイックと云ふ儒教の様な教を吹き込んだのであるから、今日の歐羅巴人の士族らしくあるのは、決して、不思議なことではない。しからば、謂はゆる西洋の素町人などが、士族風になつて居るのは、どういふわけであるかと云ふに、これには、亦、面白い歴史がある。日本では、封建が破れて、まだ久しくない。夫れ故、たとひ、今日では士族町人百姓混合して居るが、やはり、何處やらに、士族は士族しらく、素町人は素町らしく、百姓は百姓らしい所が殘つて居るが、これから、追々町人、百姓が兵隊即ち士族となつて、戰場に討死して國家の爲めに盡くすと云ふ精神になつて來ると、其の間に町人百姓もおのづと、昔しの武士の様になつて來るでもあらうが、今日では未だそこへはゆかないのである、しかるに、西洋では面白い、今より六百年以前に、封建制度がくづれかゝり、謂はゆる市民が勢力を得て來ると同時に、是れまで、自分等の頭を押へて居た武士と戰をはじめ、屢々戰場に出でて戰つたが、其の結果士族でなくても士族と同しようなはたらきをして居ると、遂には、其の魂も、其の擧動も、全く士族になつてしまつて、遂に、士族と平民との區別がなくなつてしまつた。それ故今日の歐羅巴

人は、百性町人を侮せず、悉く、士族となつて居る。こゝが、我が國の西洋に及ばない所であると思ふ。かく云へばとて、我が輩を西洋崇拜の者と思ひ給ふな。或る一派の人等が、餘り、日本ばかりに武士道があるやうに吹聽して、無闇に大和魂を振り舞はすから、我輩もおのづから西洋の歴史を説きたい氣になるのである。嗚呼、此の武士魂ですぜ。是れが無くなつてしまへば、國家が骨を失うて解体するのである。このあひだ、杜軍のデラリー將軍が、英國將軍メシューエンを、無條件にて放免して、其の義心を示したと云ふのは、なんと、立派ではありませんか。これぞこれ、二三万の兵を率ゐながら、三十万の大軍を惱ます秘密のある所です。男子若し此の魂を失へば、骨なき人間となる。國家、若し此の魂を失へば、即ち支那國のようになるのである。今日、武士時代の美風を解釋して、更に其の氣象を鼓吹せんとする人々の我が國に見ゆるは、まことに賀すべきことである。西洋でも、この武士魂を維持するについては餘程骨折つたものである。かの決闘の如きは、まことに蠻風で、今日は見るに堪へないものであるが然かも、之れをすら、日耳曼で默許して居るのは、又、此の武士魂を維持したいと云ふ所からである。國家元氣の消長に懸念するものは、大に、この邊のことを考へねばなりますまい。

新刊紹介

▲**普通植物**　別項にも記せる通り、松村理學博士の著述であつて、吾人の周圍に蕃殖として聳立して居る有用の喬木、田圃家園に栽培して民用を資ける草木、其の他の普通植物の來歴性質効用等を通俗的に面白く説いたものである、尚ほ此の書籍中へ同博士が書き載せられた一小部分は、植物講話の處へ少しばかり轉載してあるから、此の書籍の何のようなものかは大凡そ分ることであらうと思はれる。

▲**菅公論纂**　重野、星野、井上、三上、萩野諸文學博士其他數十氏の菅公に關する評論を集めたものである、三上博士は「平安

朝時代の紳士としては完全な資格を具へて居られ＝其の人物は方正篤實であつて溫厚だけれどもまた嚴峻なところもある君子」と して官公を評論し、高桑文學士は、政治家として官公は餘まり感心が出來ぬけれど、人物は頗る尊敬すべき人であり、學問もあり詩歌文章にも長十我が國有數の學者であり、且つ德望家である云々と說いて居る、此の他いろ〳〵の評論が載つて居るがこゝには記さぬ。

▲生理學講義　今までの生理書は大抵、骨格から說いてあるが、それでは目に觸れる近い物から教へよと云ふ教育の主意に違ふと思はれるに依つて、私は成るたけ外部にあらはれて居るものから始め、次に觀念に浮び易いものに移り終りに最も想像のつきにくいものを教ふると云ふ順序にしたのであると は著者糸氏が此の書のはしがきの中に二べられた所であるが、糸氏の生理衛生講義は本誌に揭げられて居ることではあり、旁々この書籍の何レ位の價値があるかは、略ぼ諸君の理解さるゝ所であらう。

▲ひな鳩　「僕のお父さんは盆會でなくちや來ぬのかれと云へば姉のお菊は思はず、しやくりあげアゝ左樣よ、フーン……あの……伯母さんが連れて行つたのぢやないか、惡い伯母さんだれね。いゝえ、あの伯母さんは惡い人ではないよ、盆會が濟んだから行つて仕舞つたのさ。と瞞かすに。そうかれ、そんなら盆會ばかりなら善いに、と淚まじりの鼻汁をすゝれば、おさんも歌を止めて淚はら〳〵とこぼし、エス（犬の名）もしよげ返つて、首を縮め尾を

通信を募る

次號『雜錄』欄內には新たに通信の一欄を設け、學生諸君より

一、諸君が在學せる各地學校の情況
二、各學校々友會の情況
三、校友會以外の諸團體の情況
四、各種運動部諸團體の情況

等に關する短信を揭ぐべし、但し右通信は爾後每號揭載すべく其の締切期限は每月二十日限りとす

譚叢

武士道の標本

池田市郎兵衞

町田藍川

世の中の事は何でも流行廢りのありますもので、幕府時代には、男と名が附けば刀脇差を持たない者はありません。百姓町人でも弔ひ脇差と申して葬式の時に挿すやつを一本づつは、屹度用意してありました。それが明治となつて廢刀令が出てから、刀や脇差は實に三文の直打もありません。隨つて、刀屋といふ商賣が全然閑暇になつて、立派な表店を張つて居た者が、急に表店の九尺二間へ引込み、正宗だの村正だのと云つた處が、菜切庖刀か薪割に代用されて、どうも使ひ惡いと叱言を云はれるような仕末でムりました。所が、明治二十七年八年の役、即ち日清戰爭が始まると、今ほで戶棚の隅へ投り込まれて居た、名も知れぬ鈍刀までが急に威張り出して、芝の日蔭町邊で巾を利かせたものです。少し名のある奴は九段の招魂社へ乘り込んで、遊就館の中にピカ〳〵、田舍者の度肝を拔くやうになりました。これが所謂物に盛衰ありで、時世の遷とは云へ、面白いものではありまんか。

弓なども鐵炮が出來てから何の役にも立ちません で、追々世を狹められ、雀嚇しの案山子か揚弓場の姉さんの外は、餘り手にしないようになりましたが、此の五六年以來、大弓と云ふものが流行出して、弓屋は急に商賣があるような譯、今まで傘屋の手傳ひか、提燈屋の下職に身を落とした弓師が、再び昔の商賣に立ち戻るといふ次第。天下は廻り持ちとは申しながら、考へて見ると變挺來なものでムります。

池田市郎兵衞

そこで、武士道と云ふものが頻りに流行するようになりましたが、是れも明治の初め西洋風が入り込んでから、見る影も無い有様でムいました。併し、日本は昔より尚武とか菖蒲とか申しまして、五月のお節句にも軍人を畫いた幟を建て、男の子の祝ひにするくらゐで何事も武張つた國柄、負けず魂、堪我慢で押通したものでムいますから、日清戰爭と共に再び芽を吹き出した武士道。結構な事には相違ありませんが、動ともすれば弊害のあるもので、武士道の眞髓を呑み込んで居ないと却つて利益になりません。例へば、正宗の賓刀も無暗に振り廻されては、兇器と名が變はりますから、心得方が肝要でムります。

前號に、松村介石先生が、舶來の武士道のお講釋がありましたから、私は、和製の武士道の、古い徽の生へた所を一ッお話致しませう。

偖、武士道と申して、活用に就いては種々の方法が有りますが、約まる所は正直の一點でムりませう。何程の勇氣があつても、此の正直の德が一ッ缺ければ、武士たる者の働きにはなりません。そこで、正直の標本になる人物をお目に懸けようと思ひます。

元和慶長の頃、肥前唐津十二万石の領主、寺澤志摩守廣高の家來に、池田市郎兵衛と申す人物がありました。廣高は、織田信長、豊臣秀吉に仕へまして、唐津八萬石を領し、家康の時代となつてから、關原の戰功に依り、天草四萬石を加增されたものでムいますが、上を敬ひ下を恤れむと云ふ結構なお大名。十二万石の領主でありながら、木綿着物に麥飯といふ儉約、それでは自分に相應しないケチな暮らし方だ、土用の鰻も喰はないで、貯金の通帳ばかり睨厄介にして居る人間は、我々の相手にならんと申すお方もありませうが、其の癖、民百姓を大切にして、ソレ飢饉だと云ふ時には、物を吝まず救助の法を立てました。

廣高が右の如く立派な領主樣になつたのも、一つは家來の好いのがあつたからでムいます。上が何程好くつても、下が惡ければ何事も巧くは參りません。先づ、家屋の普請を爲るとして見ても、地固めと土臺石が肝腎でムります。併し、建築が出來上がつた所で、アノ大そう立派な家だナ、五階造りか、高いもンだ、と賞める時、大抵上の方を仰向いて見ます。土臺石へ目を注める人は澤山ありませんが、其の實土臺が堅牢でなければ、忽ち崩れてしまひます。此の寺澤志摩守なども、池田市郎兵衛と云ふ至極手堅い土臺石がありましたから、立派に見上げられる大名になつたのでムいます。

尤も、此の土臺石は廉價で好いのと云ふのは注文がむづかしい。石田三成などは、水口四萬石を領した時に、一萬八千石を以て島左近を召し抱へました。主人と家來が殆んど同し高で、是れには、流石大度量の秀吉も驚いたさうでムります。然るに、寺澤の土臺石となつた池田市郎兵衛は、僅少四百石で召抱へられたと云ひますから、隨分堀う出し物と申すべきもので、柳原の露店を素見して白銅一ッ乘てた心算で買つた眞鍮の烟管が、翌朝見れば純金であッたと同じような譯でムいませう。此の池田市郎兵衛が秀吉北條攻の合戰に、一戰ひ遣ッて自分の陣所へ引き揚げむと、只一騎走り歸る途中、味方の一人と覺しき者、餘程激しく働いたと見えて、滿身血に染まッて打ち倒れ、兜の緒は切れて何處へか振り落とし、鎧の袖も寸斷て、息も絶え〳〵なる有樣、市郎兵衛を見るより手を揚げて摩ねけば、側へ立ち寄り、

市「ヤア、其方は山中幸右衛門、深傷と見ゆるナ、好し〳〵、拙者が助け遣はす、安心せい。

と云ひながら、翩然馬より飛び下り、幸右衛門を抱き起こして鞍に結ひ付け、自分は從歩にて、手綱を取り、庶ぎる敵を切り拂ひ、漸く戰場を遁れ出でました。

其の後、幸右衛門は如何なる仔細あッてか、寺澤

家より暇を乞ひ、傳手を求めて淺野彈正少弼長政に仕へ、馬廻り役に取立られました所が、或る日長政の前にて諸家の勇士の評判を致した折、己れが命の親とも頼む池田の事を思ひ出し、一伍一什の仔細を物語りますと、長政も心の底ら感心しました。

淺野長政が何か用事があッて、志摩守の屋敷へ参り、四方八方の話の序に、

長「時に貴殿の御家來に池田市郎兵衛とか申す士が居ると云ふ話ぢやが、武道巧者との評判で、お羨ましい次第、何と其の者を此の席へ招いては下ださるまいか。

虞「イヤ不束なる手前の家來、さしたるものでもムらぬが、寺澤の家に取ッては、自慢の一ッ、早速召し出して見參に入れませう。コリヤ右内市郎兵衛を召し連れ參れッ」。

と、小笠原右内と申す小姓に申し付けました所、市郎兵衛は、何事かと思ッて、直ちに出頭致しました。

虞「市郎兵衛、早速の出仕大儀ぢや、外でも無いが、彈正殿が其方の事をお聞き及びになッて、拜謁仰せ付かるとの事ぢや。御禮申せッ。

市「はッ恐り入ります。

彈「池田市郎兵衛と申すは其方か、寺澤家に取ッては名代の者ぢやのう。其方は、武勇と云ひ信義と云ひ、一ッとして缺けた所の無い、立派な武士ぢやと云ふ事は、山中幸右衛門が、常に噂を致して居る。北條征伐の時、幸右衛門を助けた覺えがあらう。而も、萬死を出でて一生を得るといふ如き場合に、自分の馬を幸右衛門に與へたる段、實以て信義に厚き取り計らひ、長政感服致した。

市「お詞を頂戴して甚だ赤面至極、其の實を打ち明けて言上仕れば、却て御不興を蒙るような次第で」。

長「それは又如何致して」、

市「彼の時、私は只一騎、敵を切り拔けて、本陣へ引揚げむと存ぜし所、路の邊に横はりし味方の者、助けを乞ふ風情に見えましたが、丁度四邊に味方は見えず、打ち棄て置ても誰れかは知らむ。其のまゝ見ぬ態して立ち退く心、我が身の上こそ肝要なれと、實に、臆病未練の根性も出ましたが、萬一、此の者味方の手に助けられなば、我が身を指して臆病よ腰拔けよと譏らんを必定なり。這は棄て置き難しと、さてこそ助けて退きましたる次第、其の時敵に追ひ詰められて、一生懸命の勇を奮ひ、漸く虎口を脫れましたが、受けたる疵は斯くの如く、右の小鬢に殘つて居ります」。

聞くより廣高は興醒の顏、自慢の一ッと廣言せし口上に對しても、淺野の手前面目無しと、脇の下に冷汗を流し、閻魔が苦蟲を喰ひ潰したる顏色も斯くや思ふばかり、彈正の語如何にと控へたり。

長「何と申す、危ふき場合なれば、助くるつもりも無かりしが、後日の誹謗を恐れて助けたりと申すか」。

市「御意にムります。」

長「併し、其方の心は、其方の外に知る者無し。手柄と云はれなば手柄に仕て置くが好し、何も殊更、自分で人の知らぬ罪を申し立つることも及ぶまい。」

市郎兵衛は斯くと聞くより、長政に打ち向かひ

市「這は近頃笑止千萬なる君のお詞、武士となりては決して貳心を持つまじきものと心得居ります。斯く申す拙者も、武士の端屑なれば、其の時の心中を打ち明けて言上致したる次第。虛言を構へて己れが非を掩ひ、實も無き名譽に誇らむ事、臆病者と云はるゝより一層の苦痛と心得ます。況してや、主公の御前にて、僞り飾りの詞を以て、心にも無き功名を吹聽致す事は、此の市郎兵衛には、如何なる仔細あつても出來申さず、

と素氣無く云ひ放ちて、長政の顔を見上げました。長政は殊更感心の体。

長「武士に二言無しては、兼ねて我々も必懸け居る事なるが、汝の如く金鐵の志を持つ士は、今の世に二人とあるべからず、偖も〳〵」。

と賞讃致しまして、志摩守に打ち向ひ

長「アヽ貴殿には、好い御家來をお持ちなされた、市郎兵衛が今日の一言は、敵の甲首百取りしよりも大功と思はれ、此の長政も老後の教誡肝に答へた。」

と云はれて、廣高は、今更の如く喜んで居りました。

偖、此の事が諸大名に知れ渡りますと、黒田甲斐守長政は志摩守の許へ使者を遣はし、三千石の食祿を以て市郎兵衛を召し抱へたき故、何卒本人にも云ひ聞かせて、拙者方へお譲り下されましとの口上で厶ります。志摩守も市郎兵衛を手放すのは本意でありませんが一應云ひ聞かせなければ義理が濟まないと言ふので、市郎兵衛を呼んで是れ〳〵だとの話。通常の者なら、左樣で厶いますか先方もそれ程に仰るものを無下にお斷り申すのも宜しく厶いませんから、一番牛を馬に乘り換へませう、四百石より三千石のはうが些少得分がありますナ、と算盤珠から割り出した下司張ッた根性になりたがるもので厶いますが其處が昔の武士道で、市郎兵衛は物をも云はず、涙をはら〳〵と流し、突然差添に手をかけて、キラリ引き抜き、あはや腹へ突き立てんと致しますので、廣高も驚いて飛び蒐り、手早く差添を取上げて。

廣「市郎兵衛早まつた事を致すナ、亂心の体であるぞッ」。

市「這はお情なさ主公のお詞、不束ながら、主公の食祿を頂戴せしより、一身は主公へ差上げた心、然るに、私の微忠未だ主公のお氣に召さぬと見えまして、他家へ奉公せよとの仰せ、たとひ、十萬石の墨附を貰ひましても、市郎兵衛の

身体は寺澤家より外へ住かね所存、潔く割腹して、お家を安泰に守ります」。

流石の廣高も、此の詞を聞くや、市郎兵衛の手を取りて押し戴き、

廣「市郎兵衛許して呉れ、其方の忠義は元より存じ居れども、個程までとは過分ぢやぞ、黒田家へは何とか斷るから、長く余を保護して呉れ。」

と、主從互ひに恩義に感じ、暫く抱き合ひ、涙にくれて居ました。併し、黒田家にて三千石に召し抱へんとする武士を、四百石にて差置くは心苦しいと云ふので、廣高も三千石に加増せむと云ひ聞かせましたが、市郎兵衛は頑として聽き入れません、尺寸の功無くして俄かに大祿を受けては、寺澤の家の賞罰が亂れますと、百石の加増も受けず、遂々四百石で身を終はりました。此の市郎兵衛の精神などが、眞の武士道に叶つたものかと思はれますが、皆樣は如何思召します。

今度は、實に夘卒の事で、材料もろ〳〵詮索致

池田市郎兵衛

しませんし、語句も更に整ひませんから、定めてお聞き苦しい事と恐縮仕ります。次ぎには何か埋め合はせに、珍らしい面白いものをお耳に入れる考へで厶ります。

中等教育　毎月一回十日發行

定價　一ヶ月分　金貳拾五錢　五ヶ月分　金壹圓拾五錢
　　十ヶ月分　金貳圓貳拾錢　十五ヶ月分　金參圓參拾錢

注意　（代金はすべて前納のこと◎前金相切候節は、前號の帶に會收切と朱記可致候間御注意被下度候◎小爲替にて御送金の時は東京牛込支局宛に願上候◎郵券代用は謝絕す◎代金領收證は御送り不申紛誌到着を以て證させられたく若し御入用なれば端書又は郵券御封入被下度候）

廣告料

頁	一行
一等金拾五圓	金貳拾六錢
二等金拾圓	金五圓半 金貳拾錢
三等金八圓	金四圓半 金拾八錢

注意　（一等は表紙の三、四◎二等は各色紙廣告の前後◎三等は其他廣告◎一行は五號活字廿四字詰二行にて半頁◎廣告料は一切前金に願上候◎一等二等は半頁以下謝絕す）

明治三十五年六月十日發行
明治三十五年六月十日發行

編纂發行者　高田俊雄　東京牛込區赤城下町二十七番地
印刷者　熊田宜遜　東京神田區錦町三丁目廿五番地
印刷所　熊田活版所
發行所　中等教育會　東京市牛込區早稻田東京專門學校出版部内
廣告取次所　博報堂　東京神田區千代田町
大賣捌所　東海堂　有斐閣　其他　東京　◉東京堂

譚叢

滿足の話

永持靜

「御滿足な輩だ」とか「あれで滿足して居るから可笑しい」などゝは、世間の人々が好く申すことで兎角滿足と云ふことは、鳥渡輕蔑の意味を含くんで居ることが多いのでありまする。そうかと云つて如何なる事物に對しましても、滿足の結果が得られるのは仲々容易なことでは御坐いません。その往時屢々人の口に上りました彼の「月に叢雲、花に風」と申す言の葉を其のまゝ、此の『中等教育』を編輯致す上に就きましても、種々な原因から兎角手違がありばかり多くなりまして、何時も〳〵會員諸子へ滿足を與へることの出來ぬのは、編輯者たる吾等の甚だ殘念に思つて居るところであります。現に當第三號の如き、本會の諸講師がたに悉く御寄發を願ひました結果、講話欄へは豫告以上の種々の講話を載せることの出來ました他、雜錄欄も略ぼ豫告の通りを實行することが出來ましたが、扨て此の譚叢欄へは美しき着色版を幾個も入れた『世界帝王の幼時』と云ふ面白い讀み物を掲げる筈でありましたのに、諸子も御承知の通り、東京は先月の中旬から下旬へかけて日々の雨、爲めに此の着色版が悉く間に合ひかねましたので、據所なく此の記事だけ、お約束に背いて次號へ廻すをになつたのは、編輯者も實に殘念で〳〵たまりません、が、併しながら之れも前に申した通り、事物に滿足な結果を得ることの困難なのは、此の事だけでも諸子がお察しなさるゝことであらうと思ひます。

扨て此のように、事物に滿足な結果を得、滿足な點まで進むのは仲々困難であるのにも關はらず、

彼の小成に安んずる人々は、百のところは五十、二十のところは十、十のところは五まで、否、五ならば、まだ〳〵結構ではあるが、その實、五までにも達せぬ三ぐらいな時分に、はや満足を致して十のことが十まで成し遂げられたように思つて居る人が多い。でありまするから、それ、冒頭に掲げましたるところの「御満足な輩」との誹謗が起こる、即はち満足といふ言葉は輕蔑の意味を含んで來るように思はれる。が、その實、満足といふ言葉は決して輕蔑すべき言葉ではありませんので、反つて斯く満足を致す人々こそ嬉しからぬ心懸けの人々であることは、私が申さずとも、勿論諸子のお解りのことゝ思ひます。

満足を得ることは此の通り困難であり、満足なところまで行くのは仲々容易いことではありませんそれだに依つて、彼様もしたら満足が得られようか、斯様もしたらと種々な工夫をする、扨て彼様に工夫を凝すので、心は自然に活動する、活動すると共に進歩もするのであります。でありますから彼の心の活動が止まる活動が止まるから進歩するをも出來ませぬ、でありますから、彼の「御満足な輩」になつて終ふのであります。

正直に申しますと、編輯者は此の『中等教育』を編輯いたして居りましても、一號、二號、この三號に至りましても勿論左樣あらうと思ひますが、出來上つて見ますと、何時も〳〵不満足な箇處ばかり、彼處が不可、此處が不可と、缺點ばかりが眼についてなりませぬ。既に編輯者ですら此の通りであるから、諸子は定めし種々不満足に思召すことであらうと思ひます。されば諸子、本誌について御不満足のことがあつたら、御遠慮なく申込んで下ださい、左樣いたしますと、編輯者が、それを拜見いたしまして、成るほどこれは御尤もなことであると認めましたら、直ぐに出來ますことならば其の次ぎの號から直ぐに、若しも直ぐに出來

かねることでありましたならば、漸次諸子の御申越し通りに致しましよう、なぞと、少しく餘事に渡りまして、誠に恐れ入りまするが、編輯者は隨分熱心に本誌を編輯して居りまする意でありますに、それでさへも、此の通り毎號いろ〳〵と欠點だらけ、不満足なことだらけ、誠に殘念千萬で御座います。しかし編輯者は、一方には斯く殘念に思ひまするとと共に、一方には斯く殘念にも、永い眼で見て居て下されば、屹度、追々に満足なものを御覽に入れることが出來ようかと思ひます。でありますから、諸子にも何うか其の考へで氣根よく末永く此の『中等教育』を讀んで載きたいのでまりまして、えい、何うも詰らぬ、止めて終へなどと、其樣いふ短氣は起こされぬように、これは呉れも呉れも諸子に願つて置くのであります前段のところで、鳥渡、氣根といふことを申しましたが、此のことに就きましては、此の號の講話欄内に坪内先生のお話しがありますから、こゝには何も申しませんが、若しも編輯者が、毎號満足に本誌を編輯することの出來ぬので、自暴を起こして、えい、面倒なといふ了見になりましたなら

者が此のように申すのではありません、これは眞實のところであります。

編輯者は眞實のところ、此のような考へで毎號本誌を編輯して居るので御座いますから、たとへ現在のところ、諸子を満足させることは出來なくとも、永い眼で見て居て下されば、屹度、追々に満足なものを御覽に入れることが出來ようかと思ひます。でありますから、諸子にも何うか其の考へで氣根よく末永く此の『中等教育』を讀んで載きたいのでまりまして、えい、何うも詰らぬ、止めて終へなどと、其樣いふ短氣は起こされぬように、これは呉れも呉れも諸子に願つて置くのであります前段のところで、鳥渡、氣根といふことを申しましたが、此のことに就きましては、此の號の講話欄内に坪内先生のお話しがありますから、こゝには何も申しませんが、若しも編輯者が、毎號満足に本誌を編輯することの出來ぬので、自暴を起こして、えい、面倒なといふ了見になりましたなら

ば、本誌は果して何ういふ運命に陥ることで御坐いましようか。それに若しまた編輯者が、毎號の本誌に滿足いたして、これならば實に結構、日本全國、否、世界のうち何處へ行つても、此樣な立派なものは無いなぞと、途方もなく滿足いたしましたならば、本誌はまた、何のような運命になることでありましようか。諸子、唯今中等教育の程度にある會員諸子に於ても、若しも俺は到底も英らくなることは出來ぬのだといふような自暴な心になつたり、または、俺の勉強は最早これで充分だといふ「御滿足な心」を起されたならば、諸子の未來は、果して何のようになることでありましようか。

でありまするから、編輯者が本誌の編輯に從事いたします心懸けも、諸子が夫れ〳〵の御勉強をなさる心懸けも、少しも違ひはないのであります。此のような次第でありまするから、諸子。編輯者も將來ます〳〵熱心に、いよ〳〵勉強をいたして本誌の編輯に從事いたしますから、諸子に於ても何うか、それに負けぬといふお意で、充分の勉強をしていたゞきたい。さうすると、本誌が他日、幾年の後充分滿足な、完全なものになる時分には恐らく諸子も立派な方々になられるのは、編輯者の信じて疑はぬところであります。

當號の此の欄は豫告に違つて居る上に、此のような申し譯のようなものばかりで、埋めて置くとは怪しからぬと、定めて諸子からお叱りでありませうが。其の代り、來月發行の第四號から本欄を改めて講話欄の次ぎへ遷して大擴張をいたし、種々面白い有益なることを澤山載せる意でありまするから、諸子よ、萬望、彼の氣根を好くして、次號まで樂しんでお待ち下ださるよう、これは切にお願ひいたして置きまするので。飛んでもない御滿足なお話しをいたしまして、諸子さだめて御迷惑で御坐いましたらうが、次ぎには長田さんの御談がありますからそれで御埋め合せを願ひます。

笑の說

長田秋濤

笑といふをは健康上及び道德上に最も必要なるもので、人間の凡ての官能を活潑ならしめる靈功がある。

笑といふをにも色々な種類があつて、或は高尙に笑ふをもあれば淡泊に笑ふをもあつて、是等は皆健康上の要素となるのである、學者の說に依ても亦醫師の經驗に依ても、此笑といふをは教育上に必要であるし亦社交上に必要であるし、又生活上に必要で、總て此宇宙人間といふものが在る處に缺くべからざるものである。

人間といふものゝ定義なるものは種々ある、或は人間は一の葦の葉の如きものに過ぎない、けれども一の思慮的の葦であるといふをを云うた者がある、又或る者は人間は百般の事物を普及し敷衍せしむる所の官能を有する唯一の存在物であると云つて居る、是等は皆哲學上の議論であつて、最も通俗的でさうして最も正確に人間なるもの〳〵定義を下したならば、『人間といふものは笑ふ所の存在物である。』といふことが言へるであらう。實際笑といふをは人間のみに屬して居る所の官能であつて、恐くは人間の性質として特有なものである、人間以外のものは決して眞似るをは出來ないのである、勿論鸚鵡は能く人語を眞似、猿は種々な擧動を爲す。其他蟻は貯蓄する觀念を有つ事居るし、獵虎の如きは家を建て犬は能く主人を識別する是等の點に於て隨分人間の壘を摩するものがあるようではあるが、併し笑の一事に至ては則ち未矣である。實際氣を附けて見ればわかるが百般の獸能く啼くは種々あるけれども併し何れも笑ふといふをはない、唯人間のみ獨り此世の中に在る自然の滑稽又は洒落、といふをを十分に理解するをが出來て、而して眞面目なるをに反對する所の此滑稽なるをより愉快の笑などといふものを十分に解するをが出來るのである。是に於て此官能は人

間特有のものである事が明かであらう、くどい樣だが一言すれば笑といふものは人間の特有物なりといふ判斷を下すとが出來る。

と云つて此笑といふ官能は他の官能と等しいものである、から之を利用するの途を講じなければならない。人か此の自然の特性なる笑を禁じられたならば、それこそ吾々に對つて一種いふべからざる不快又は尠なからぬ苦痛を與へるとになる、之に反して之を適當なる度に於て人間に許したならば、之が即ち健康を保つ所以の一大原由にもなるのである、笑の官能は先づ赤兒の時分即ち未だ言語を發しない時分から起こるものである。

此赤兒が何ういふとを樂んで笑ふのか、赤兒の如きに在ては恐らく笑といふとに就て十分に外部からの刺擊を受けるだけの官能を有ては居まい、夫が笑ふといふのは甚だ奇なとである、奇ではあるが夫には明かに理由のあるもので、即ち光線などが嬰兒をして喜ばしめ、又清潔な空氣なぞが彼れをして喜ばしめる。之が原となつて自然に笑を洩すのである、で此の笑といふをは小兒には最も必要なとで、醫師も小兒に笑なるものは甚だ必要であることをば證據立てゝ居る。或る醫師が種々經驗上から立論した所に依ると、兩親が不幸の地位悲慘なる境遇に居る場合には、勿論兩親の容貌其他態度に於て自然に苦痛の色が顯はれてくる、即ち世の中の辛苦に堪へねばならぬといふ一種の苦みを表はして居るのである。否曾に兩親のみならず此兩親の傍に居る奉公人に至るまで決して愉快の顏をしては居ない、下つて此兩親の間に生れた小兒の如きは奈何なる有樣にあるかといふと是亦同じく兩親の苦みを別ツて居る即ち此の小兒の爲めには十分に且つ愉快に呼吸すべき空氣が缺乏して居るのである。だから醫者の方でして此の悲慘なる、不愉快なる小兒を病人の中に組入れて之れを一種の病氣と認めて居る。彼の有名なるお伽話を書いた、ポロー氏の言に先づ汝の兒を樂しまし

むべき總ての技術を教へよ』といふとがある。而して鷄の鳴聲までもさせ、又小兒の思ふ如く統壇の上を這はせ、さうして小兒の終局なき、夢の反響のやうな、理由もなき幾千の問題を掛けられた時分には早速之に答へて遣れ。又髯を引かうが耳を弄ばうが之を叱るな。總て小兒を笑はしめ又樂しませしめたならば。小兒は益々健康を保ち十分な發育を爲すに極つてゐる。總て小兒の無邪氣といふをを成るべく面白く愉快に發達せしめなければならないのである。で小兒が此の習慣に慣れて發育し且成長するに從つて、尙は彼れは此習棟したる所の愉快なる官能を捨てないで保つて居る。愈々青年時代になつて來れば、即ち此官能を他に對つて利用し始めるのである、愈々社會にも出て百難に當り世上の風波と戰ふ時分になつて、此の愉快なる官能を利用するの途を十分に知つて居たならば、如何なる難事に出くはさうとも決して容易に倒れるものではない。笑は一種の苦みを癒すの道具となつてよく哀樂の平均を保ち人間を導いて無上の幸福を味はしめるのである。笑が最も人生に必要なものであるといふをも種々の點からして證據立てる事が出來る、人が單獨で居る時分には決して笑ふものではない、笑というても獨笑といふとは甚だ馬鹿らしく見えるのである。

ベルグソンといふ人が笑に就て十分な觀察をした書物がある、其の中に『若し人が單獨孤立といふをを感じると決して滑稽の趣味を解するとが出來ない』と斷言してゐる。蓋し笑は必ず其反響を求めるので、自分が笑ッて、他も笑ッて、夫れで面白く可笑いのである。

笑の結果は奈何。是は明瞭に正確にいふ事は出來ないが或る點より或る點に自然に響きが傳つて行つて然る後に眞の笑といふものが表はれて來るのである。即ち笑を十分に理解する爲めには、先づ笑を個人單獨の働作とは見ず社會と呼ぶ自然人の集合の中に置かなければならないのである。即ち

社會あツて初めて眞の笑がある。社會が人の笑を出して來る、又新聞も出て來るのであつて可笑いとを
してあるに至らしめ、人の快樂をして存在するに を書く作者を呼で滑稽作者とも呼だ、面白い記事
至らしめる。是が即ち社會の役目の中でも最も必 を書く新聞を樂天新聞といッて見たり、又は笑
要な職務である。碎いて云ふと、笑ふ爲めに幾十人 ふ新聞と呼ぶのもある、一度此笑の店を開いた以
の人間が集會をする、勿論こゝに集まつて居る人 上は笑は最も必要なる物品として取扱はれて居る
々は各教育の程度も異ふし性質の奈何に依つて、 のである。
其笑の樣子が變つて居る、そこで此の集まつて居 又た笑といふものも無理に捻へて人を樂ぐるが如
る所で人を笑はしめるのには先づ其中心點になる き笑がある。その種類を茲に述べて見ると色々な
べき所の人間が、何か其集會者の趣好の程度に應 證據を擧けて之を十分に區別することが出來るが
じて一種の滑稽を演ずる、で一人が笑出せば隨て 先づ通常吾々が最も笑の種となるものを二三書い
他の者が笑ふ、即ち一種の瓦斯の如きもので自然 て見れば、その笑の度が判るだらう。例へば椅子が
と蔓延して集會者一同の大笑となるのである。 必ずある事と信じて座つて見ると椅子がない爲め
で笑といふ者も製造しなければならぬ、寧ろ一の にドサリ尻餅を搗く、是等も必然笑の種となる、
興行的物品の如きものであつて、彼の喜劇を演ず 又此容貌などの餘り醜いといふをが笑の種となる
る劇場の如きも、此笑を利用して客を呼寄せる ともある、彼の有名な滑稽劇の中に、或る人物が
所謂喜劇演劇場の如きは笑を賣る所の一の店であ 常に怒つて劍に手を懸けて人を斬らうとするやう
ると言はれて居る。笑といふことに就ての必要か な態度をする、それは何故かといへば、其人の顏
らして自然種々な學者も出て來る、又新聞記者も の中で鼻が餘り大きいが爲めに、見る人が彼れを

嘲る夫れで彼れは怒つて期機な態度をするのであ 段を降りながら外へ出ようとして戸を開けた。戸
る、詰り人が其容貌の奇なるを見て自然に笑ひ始 を開けて又閉てしまつた。で彼れは又寢卷を着替
めるのである。顏の中にも始終泣いて居るやうな へなかつたのを始めて氣が注いた、さうして尙能
顏もあるし、始終笑つて居るやうな顏もある、又 く見ると顏を半分剃り掛て居る、さうして左に帶
始終苦んで居るやうな顏もある。是等が即ち一種 す劍が右に帶してある、ズボンを下に穿いて寢卷
の人をして笑はせる種となる事を吾々が斷言して の襦袢が表に現はれて居るといふ樣な奇妙な姿を
憚らない所である、又或る人が他人の帽子を間違 して居る。又或る時は盲人と鉢合せをして、双方
へて冠ると馬鹿に大きいが爲めに耳は勿論、スポ 共に其處に倒れるといふような慌て者があつた、
りと顏が隱れて仕舞ふ是など無論大笑に相違ない 其他種々人をして笑はしめる所の滑稽がある、是
。又大臣だと思つて叮嚀に話を仕掛けると案外そ 等が即ち皆此のキブロックの種類に入れられるを
れが下らない端た者であつたりなどをする、之れ になつて居る。
が一つの笑の種になる、是等は古來喜劇作者が人 全体奈何なるをが笑の原因になるかといふをは、
を笑はせるが爲めに屢使つた種である、彼のモリ 一々列記するとは出來ない、又其理由などといふ
エールの作つたアヴアールの中に人違をする所が ものを一々說示するなどといふとは出來ないので
ある。斯ういふ間違を呼で一種のキブロックと名 ある、種々な道德家が笑といふとに就て色々な階
づけてあつた、此外尙はキブロックの種類があるが、彼のモリエールの書いたあわて者の中にも一種又面白い人間がある、メナルクといふ者が階子 級を附けて書いて見たけれども皆要領を得て居ない、笑といふとは即ち自然の理窟から割出して來たものであつて、又これと同時に此笑ふ所の機械

の運轉に依るのである。笑ふ機械とは何かといへば、即ち此顏の筋肉の縮伸である。自然の笑といふものは其筋肉の縮伸の最も六ケ敷いものであつて、世の中には隨分笑ふ眞似をする者があるけれども、果してそれが本當の笑になるかといふことはナカ〳〵知ることが出來ない、役者の如き本當に笑ふことの出來るといふものは先づ稀である、寧ろ自然に非ざる所の笑といふものは苦みの原因になるのである、其他笑といふものが愉快でなくつて苦みから來るともある。カーズといふ醫者が或患者の舌の治療をした時分に、此治療が非常に苦痛を感ずる手術であつたが、もう此苦痛に堪へられないといふ時分に彼れは非常なる笑を始めたといふことがあつた。又ロイといふ醫者の說によると、或る熱病患者が非常な苦痛を感ずる際に止め能はざる笑を起して、遂に笑び死だといふことがある。又或る歷史家の說に依ると英吉利のヘンリー八世の夫人アンヌボレーヌが死刑に處せらるゝ時分に

其死刑執行人に對つて熟練であるか否やを問うて將に頭を斬られむとする場合に、彼の女は非常に笑つたといふことである。又グレゴリー十四世が法皇の位に登るといふことを聽いたときに、非常に愚な笑ひ方をしたといふことである。支那人の如きも隨分悲む時分に笑ふそうである。

又トランスヴァールのボーアの人間も、矢張生擒となつて將に悲慘の境遇に陷らうとする時分に非常に笑ひ出したから、通辨が何故に笑ふかと訊くと、話をする丈の勇氣もなく、唯我は貴下を怖く思ふけれども、どうか笑ふことだけはお許し下さいといふたことがある、總て危險の場合には眞面目になるべきものであるのに、却て笑ふなどといふことは奈何なる笑の部類に屬するかといふことは殆ど知ることが出來ない、笑といふものは死を導く所の原因となることも今言ふ通り澤山あつて、彼の有名なる希臘の悲劇者ソホークル又シラキーズの暴王ドニーの如きは、笑ふ病氣に罹つて死だといふこと

である。又法王レオン十世の如きはミラン市から佛蘭西人を放逐したといふことを聽いて、非常に喜んで笑ふてゐる中に死んだといふやうなともある、これは即ち笑狂人といつて本當の笑の部類に這入らないかも知れないが、何しろ笑といふことは事實である。此笑といふことは決して愉快の笑でなくして苦みの笑であるといふことも事實である。

之れに反して笑といふことは既に記した如く健康上最も必要であつて、生活上に於ては最も缺くべからざるものである、即ち笑といふものは身體の機關の總ての狀態を善良にするに就ては一大要素である。人が笑ふと自然に呼吸を活潑にし、又體溫を進め消化を良くするといふのが一般醫師の解決した議論である、醫師抔は種々昔からも笑ふことを頻に慫慂勸告する、笑ふが爲めに病氣が癒つたといふようなともある、酷く笑つた爲めに、或る肺の上に出來て居た腫物を自然に傷り、又血の止まつて居る場所へ血を送り込だといふやうなとの爲めに、其病人が癒つたなどといふ話もある、有名なる十六世紀頃の和蘭の哲學者なるエラスムは最も危險なる腫物患者を治すのに最も滑稽なる本を讀ませて、非常に笑はせる方法に依つて治療したといふことがある、其他又た或る僧正が最早臨終の時に際して居つた時分に、其僧正の飼つて居た猿が美裝して飛んで出で來たのを見て、非常に笑つたが爲めに助かつたといふ話もある。

又一種の奇妙な話がある、ルイ十三世の時分に一人のナープルの人が在て、滑稽劇を作つて巴里で之を興行した、スルト當時有名な或る醫者が憂鬱なる精神病患者には此滑稽劇を一時間づゝ見せるが可いといふことを切りに勸めたのである。此幾千の觀客をして涙に咽ぶまでの滑稽劇を書下した作者といふのは憂鬱患者であつて、或る日其友人の勸告に依つて、醫者の所へ診察を受けに行つた。其醫者は此作者が最も激しき憂鬱病に罹つて居るとを認めたものだから彼れに其滑稽劇を觀に行く

べきことを勸めた、然るに其作者は答へて曰ふにはあの演劇は私が書いたので、あの演劇をするのは私でございますといつた話がある。近世に至つても尚は醫者は人を笑はせる手段を採るので、瘋癲病院などに於ても憂鬱患者に對つては最も此笑ふ方法を講じて居る。或は滑稽劇を演じさせて見たりして或は可笑な話をさせたりなどして、成るべく笑ふことを以て憂鬱患者を治する方法として居るのである、尚は此の外人を笑はせる藥がある其藥はスラトキシードダゾトと稱へて、之を嗅ぐと此笑ふ神經を刺激するものと見えて、誰しも笑ふ。又インドタイマから拵へる藥が、十八世紀頃印度に於て非常に用ゐられて居る、之を飲んだ人は無上の愉快を感じて、非常な笑を發するのである、近來此實驗をして見た所、實際古人の言うた通りであることを證據立られた。そこでツールのモローと呼ぶ大醫は、憂鬱なる精神病患者は笑を以て治すといふことを考へて、屢々此藥を用ゐて見た所、皆成功して居る。殊に其中の一人に於ては九箇月以來沈鬱病に罹つて、僅に一日の中に十言も話す位なものであつたが、此藥を飲んで以來といふものは殆むど一晩饒舌り續け笑ひ通しであつたといふことである、此藥ばかりでなくラムのルトンといふ醫者がリントと裸麥とを以て拵へた藥を飲ませた所、此藥を飲で一時間ばかりも經つと、果然數時間も續けて非常に笑つたといふことである。で漸く笑が少し止んで夫から後も此人は久しく愉快な樂しい容体を保つて居たといふことである。又赤い光が大に愉快な感を惹起すもので、巴里の瘋癲病院で、赤いコップを或る精神病患者に見せると大に笑つた事がある。又之を眠ツて居る人に見せると忽ち微笑を洩すといふような事實が澤山ある。彼の寫眞の原版を拵へるリオン、リミニールケに於ては、工場が一般に赤い硝子で張つてある、だから此中で勞働する職工共は終日笑つたり踊つたり跳ねたりして居る。然るに其工場を綠色の硝子

で張つて仕舞つた。所が皆以前の容態を變へて言語も少くなり、愉快な擧動も失くなつてしまつた此ういふ風で伊太利の或る醫者の如きは、此赤い硝子を憂鬱患者を治療する爲めに、屢用ゐた。先づ第一に數月間も食物を食ふことを望まないような患者を此赤い部屋に入れた。スルト忽ち笑出して、物を食べようといふ念を起した。何しろ笑ふといふとは健康上にも最も必要なものでもあるし、又社會の秩序を維持する上に於て最も缺くべからざるものである。

若し夫れだ、心から笑ふといふとは、彼のヴキクトル、ヒューゴーも其詩の中に之を特記して、笑の眞正の特性を發揮しようと力めたのは爭はれない事實である。笑へばこそ何となく麗しき容子も出て來るし、物質的にも道德的にも十分な平均を保たしむることが出來る。又吾人の官能といふものを好良に發達せしむることも出來るのである。笑へばこそ福が必ず來るといふのは社會の一般の通則であるに違ひない（をはり）

聲き鳴の物動

（其　三）

Kittens	（小　貓）	mew.
Lambs	（小　羊）	baa, bleat.
Larks	（雲　雀）	sing.
Lion	（獅　子）	roar.
Magpies	（鵲）	chatter.
Mice	（鼠）	squeak, squeal.

（參照第一號教育等中）

幼い弟と雀の雛

河野桐谷

僕の幼い弟が、此の頃一羽の雀を飼つた。もと此の雀は僕の家の藁屋根に巣をくつて居たのであつたが、其の親鳥が舳にくはれてしまつてから。弟が幼心に可哀そうに思つて。洗ひ流しの飯などをやつて飼つて居る中に。段々弟に馴れて、しまひには、弟が行くと其の巣の中から可愛らしい嘴をあげて、チヨ〳〵となないて、彼れの來るを迎へる様になつたのである。

弟は、これが愈々可愛らしくなつて、お父さんやお母さんにねだつて、一つの鳥籠を買つて貰ひ、其の中に之れを飼つて置かうとした。そこで、僕は、もう。飛べる様になつたものなら放してやれと云つても頑として聞かないで、彼れは、其の雀は自分に飼はれるのを希つて居るのだと言ひ張つた。

弟は遂に其の雀を飼つた。ソシテ、彼れと其の可

愛らしい雀との間に、何の様な意志の変通が始まつたのか知らないが、弟が朝起きて。オメザを持つて。チーヤ〳〵と其の籠の傍へ行くと、チーヤは其の小さな身体を。籠の出口までチヨコ〳〵と運んで來て。さも何事かを彼れに願ふかの如く。可愛らしい嘴をあいて、チーヨ〳〵と鳴くのである。スルト、弟は、直ぎに其の願を聞き届けて。直ちに籠の入口をあけてやる。如何するのだらうと見て居ると、雀は、やがてヒラ〳〵と籠から飛び出して、朝日の暖かに射して居る東向の椽側から庭へ出て、或は植込の上へかくれたり、塀へ飛び上がつたり或は扉の上に止まつたりして。清い朝の空氣を吸うて、嘻々として囀ごつて居る。

此の時、弟はどんな悦を以て之れを見て居るであらうか。我れこそは此の小鳥の友、此の小鳥の唯一の主、皆んなは大人で豪くつても「チーヤ」は皆んなの云ふをは、きかない、「チーヤ」が云ふことをきくのは。廣い世界に僕許りだと云はぬ計りに

得意の体で「チーヤ」の行く處に餘念なく眼を注いで居るのである。

又、或時は、戰に勝つた王様の様な自信力で、「チーヤ」を庭に放したまゝ、フイと外と遊びに行つて仕舞ふことがある。これは「チーヤ」は約束の時間が來れば、呼ばないでも、又歸つて來て。籠の中から自分を迎へるものと信じて居るからである。併し、さうでない時は、彼れは時間を見計らつて、「チーヤ〳〵」と呼び立てるし。如何して此の聲が雀の耳に這入るのか知らないが。「チーヤ」は其の居る所からチヨイ〳〵と飛んで出て、ヒヨイ〳〵と弟の肩や手の先へ止まる。

また、我等の晩餐の團欒が樂しく開かるゝ時は、「チーヤ」は籠の中から其の物音を聞きつけてチーヨ〳〵と叫ぶ。すると、弟は「チーヤ」も一庶に御飯が食べたいのだと云つて、立て行つて、入口をあけてやると、チーヤは、又、ヒラリと飛んで來て、弟の肩や御膳の上にのつて、弟や皆んなが小

さくむしつた御肴や、ご米粒をやしなつてやると、其の小さな嘴をあけて深紅の喉を現はして、チヨツ〳〵と其れを食べる。

で、此の小動物は、斯くも人間に馴れてしまつて、何時でも我が弟が其の小さい住居を見舞へば、必ず其の小さな嘴を動かして、何事かを彼れに語つて居る様であるが、弟は、又、能く彼れの言語を解して飢えたときには餌を與へ。渇いた時には飲物を與へ。飛ばない時には飛ばしてやると云ふ様に、注意、中々怠りないのであるが、一層不思議なるは弟が「チーヤ」の庭に出て居る時外の雀と「チーヤ」の鳴聲とを能く聞きわけて、ソレ「チーヤ」が家想で啼いて居る、藪へ這入いる、垣根へ止まつたと、皆んなに教へて居ることである。

また、雀も、今は彼れが言になれて、彼れが來いと云へば來たり。彼れが去れと云へば去り、其の愛、其の惠に浴して。寄邊なき身を、此の無心の人に託するの愛らしさ—

嗚呼無心と無心、自然の廣さ宿を棄て、此の幼き人の懐に抱かるゝ一小鳥の運命の不思議さよが。考へて見れば、弟はもう五才だ。彼れはもうだん〳〵人間の言語を習はなければならぬ。彼れは何時迄、雀の言語を解して居るであらうか！

筆のまに〳〵

南泉

一昨年の夏、丁度北清事變の騒がしかつた頃、谷中の果まで、用たしに行つた序に、田圃の景色を眺めて歩くと、俄に閃々たる光、轟々たる響と共に、千萬の瀧を一時に降すような雨、道灌ならぬと、幸ひわつた一軒の草庵を訪へば、少女ならぬ白髪の翁。

「まあお上がりなさい、その中に晴れませうから。」

との懇なる言葉、余も勧めらるゝが儘に、澁茶の饗應に預り、時節柄とて、列國の戰爭談となり、初對面ながらも、時間の經つのを忘れてゐる中に、雨も止み、早、時も既に日暮の里、余は覺えず、露と明け露と暮るゝや草の庵。

と口誦み、我れながら善く出來たわいと、心に自惚れつゝ示せば。

「句づらは一寸面白いけれど、失禮ながら、君はまだ詩人の仲間入りは出來ませんなア。」

と、翁は微笑む。

「それヤ又何うした點から、さうれつしやりますか。」

と、思はず膝を進むれば。

「詩といふものは、其の時に出逢つた樣を寫さねば、天眞爛熳とは言へぬ、然るに、君は驟雨に遇うたのが因緣となつて、先刻から戰爭談に時を移してゐながら、其等の事が胸に浮ばないで、唯だ草庵で日を暮らした事位を言はるゝとは、まだお年がお若いといふのぢや。」

との苦みある答、余も少し勃として、「ぢや一つ御老人にお願ひ申しませう。」と言ふと、「口ほどにも無いのです。」と、すら〳〵と筆を走らせた、その書き樣も見事に、

忽然雷鼓響、鐵馬一聲々鈴のごとく、蚊陣解レ圍テ去、蟻軍亂レ隊テ行誅ニ戮ス、祝融ノ賊一ノ神なり、詩城頓築成、

余は實に感じた、文中雨といふ字が一つも無くて、而も、上手に夕立の樣を寫してある、且つ一句も殘らず軍づくめとは、迚も南泉等の及ぶところで無いと、繰り返し〳〵讀んだ末に、誅戮ニ祝融ノ賊一ヲといふ文字丈は、すこし不穩當でありますまいかと評しければ、翁は莞爾として、「豎子敎ふべし」と言はれた、が悲しいことには、今、其の人は此の世にあらず、詩城果たして何れに築き居らるゝことか。

新刊紹介

▲**社會百面相**　内田魯庵氏の筆が頗る犀利であるとは、既に世間で許して居ることであるが、此の書は同氏が其の犀利の筆を振つて今日の社會各方面の種々な人物と境遇とを畫がいたものを取り集めて此の一册子に纏めたものである。學生、貧書生、時代錯誤の諸篇は讀みやう次第、意味の取り方次第で一種學生を警戒するものがあらうし、「破調」「鐵道國有」「電影」「犬物語」「矮人巨人」の諸篇は面白い讀物とすることが出來よう。

▲**自由結婚**　愛と心、この二つが此の世に於いては、たとへ滿足を得ずとも、死は之れを解釋し、愛をして其の滿足を得しめるものであるといふ意味をば、恐らく著者の根本思想としたらしく生田葵山氏が其の頗る同情に富める筆で此の邊の消息を畫がき併せて新舊思想の衝突、上流社會の弊所を衝がいたものである

▲**萬國幽靈怪話**　「夜陰の鐘がゴーンと鳴ろ、と、笛の音遠く何處かで乙女の器聲が聽こえる、あらと思ふ途端、おどろと髮ふり亂だして蒼い顏が出ろ」といふ發端から、伊太利、英吉利、丁抹、露西亞、端西、希臘、西班牙、埃太利、米國等各地の妖怪談に至るまで都合三十餘篇の集め一册子としたものである

聲き鳴の物動

（其　四）

Monkeys	（尾長猿）	chatter, gibber.
Nitingales	（鶯類）	pipe,wrable.
Owls	（梟）	hoot, screech.
Oxen	（牡牛）	low, bellow.
Parrots	（鸚鵡）	talk.
Peacocks	（孔雀）	scream.
Pigeons	（鴿）	coo.
Pigs	（豕）	grunt, squeak,
Ravens	（鴉）	croak.
Sheep	（羊）	baa, bleat.
Snakes	（蛇）	hiss.
Sparrows	（雀）	chirp,yelp.
Stags	（牡鹿）	bellow, call.
Swallows	（燕）	twitter.
Swans	（白鳥）	cry.

懸賞作文

『歴史上に於ける理想の人物』の課題に對して應募者八十七名、其の理想として擧げられた人物は、菅原道眞、西鄕隆盛、和氣清麿、クリスト、ワシントン、楠正成、釋迦、孔子、ソクラテス、コロムブス、リンコーン、德川家康、ナポーレオン、吉田松陰、井伊直弼、ビスマルク、セシル、ローズ、（以上二人以上二名飛、小野道風、孟子、林子平、加藤清正、冠鐺日親、諸葛亮、アリストートル、二宮尊德、イサベラ、ルーソー、マセラン、豐臣秀吉、上杉謙信、ガーフィールド、山中幸盛、賴山陽、紀國屋文左衛門、太田道灌、グラッドストーン、ジョセフ、ダミエン、顏回、德川光圀、大鹽平八郎、フランクリン、平重盛、木曾義仲、大石良雄、アスター、親鸞上人、島津齊彬、アイヌ人の青年、パスタロッヂ、（以上一人なりき。

審査者は左の三標準により等級を附したり。

一、よく組織されたりや否や

二、辭句整ひたりや否や

三、眞情よく發ばれたりや否や

（審査者しるす）

歴史上に於ける理想の人物

第一等（一人）

ジョセフ、ダミエン

丹波國　佐々井　晃次郎

予は、歴史上に於ける理想の人物として、癩病者の使徒ジョセフ、ダミエンを選びたり。

予は先づ彼れの略歴を述べむ。彼れは西暦紀元千八百四十一年一月三日白耳義國ルーベイ市外の一寒村イルメロに生まれき。彼れの家は赤貧なりしかども其の子の養育のためには烈しき勞働をも厭はぬ善良なる父と、才德を兼ね備へたるやさしき母とを有しき。彼れは此の兩親に養育せられしが、十九歳の時長兄の許に行きて緒を宗教家の列に加へぬ。彼れが非凡の學才と高尚偉大なる品性とは此の時已に彼れに宿りきと云ふ。

其の後、長兄が南洋傳道のために出發せむとせし

際、俄に熱病に襲はれて宿志を果たさざりければ、彼れは長兄に代りて南洋群島に來たり巡り〳〵てハワイに着きぬ。

一日、マウイ島に一寺院の献堂式ありき。彼れも亦之れに臨めり。牧師等相會して談ず。オルバアの僧正語りけるは、「モロカイ島に牧師を送らむと欲すれども癩病者を忌みて一人の行くものなきには困じたり」と。彼れは之れを聞きて痛く感激し、生涯を賭して癩病者の友たらむと決心し、即座に「我れ行かむ！」と叫びぬ。これ、紀元千八百七十三年彼れが三十二歳の時なりき。予は、此の偉大高潔にして而も力ある感激を興せし彼れの品性を高しと感ずるものなり。

世には、悲酸の極に立てる人其の數を知らず、而も最も悲酸を極めたるは、不治の病魔に罹れる人なるべし。されど、其の中にも種類あり。親兄弟に介抱せられ慰められ、知友親戚故舊より同情を寄せらるゝ病者も少なからじ。唯だ茲に悲酸中の最も悲酸なるは癩病患者なり。彼等は肉破れ、躰壊れ、色變じて惡臭殊に甚だしく、生きながら眞人間の外觀を失し、親にも、兄弟姉妹にも又我が生みの子にすらも忌み嫌はれ、親戚故舊には交はりを絶たれ。生前の世捨人となり、死後も尚嫌忌さるゝ人となる。罪なくして侮辱を受け、善心を有しながら虐待せらる。悲酸！是れ程の悲酸は又他にあるべきか。

さて、ダミエンが一癩病患者を伴ひて上陸せしモロカイ島は、憫むべき癩病患者を流謫する島なりき。彼れの上陸せし當時、此の島の有樣は無政府の姿にて病氣と貧困と不潔と、剰さへ不道徳と無宗教とに充ちたりき。

孟子曰はく「恒産なきものは恒心なし」と。今、モロカイ島民は、恒産のみか恒身をも失ひ。社會より侮辱せられ、虐待せられ、嫌忌せられ、遂に此の地獄島に流謫せらるゝ身となりし者、いかでか恒心を存し得べき。堕落に堕落を重ねて風俗は

亂れ、人倫は頽れ人情は紙よりも薄く、彼等は只だ衣食の奴隷となり、肉慾の奴隷となり、其の身の眞人間界を驅逐されたると同時に、心も動物となりたるなり。此の島の住民をして眞人間とならしめ此の島の風俗をして天國のそれと等しからしめむとせしダミエンの勞！あゝ彼れは如何に苦しみ如何に艱みしならむか。予の淺き心には未だ彼れが胸中の萬分の一だも窺ひ得ざるぞ耻づかしき。

彼れは、一身を以て、說敎者となりては憫むべき民に心靈上の慰籍を與へ、信仰を與へ、光明を與へ、講義者となりては人倫道德を辨へしめ、醫師となりては衞生を敎へ藥を施し、又病人を看護し死者を葬りき。かくして、彼れは忌み嫌ふべき癩病患者をば、我が子の如くいつくしみぬ。かく献身的に働くこと十年の後、彼れも亦、癩病患者の一人となりぬ。彼れの豫期せし如く、彼れの身は今や我が子の如く愛せし住民の群に入りぬ。併しながら、彼れは實に偉丈夫なりき。彼れは癩病に罹りても少しの憂ふる所なく、感謝しつゝ働きぬ。偉大なるかな、彼れの品性や。

天は眞面目の人を助く。彼れの癩病に罹りしは、やがて彼れの成功を進むる所以なりけり。彼れの好意は、住民の一般に眞心より感謝せし所なりしが、彼れの患者となる以前は、尚は一點隔意の狀ありき。而も、彼れの患者となりし以後、住民は遂に父よ、吾等の父よと呼ぶに至りぬ。是に至りて、其の感化は始めて行はれぬ。さて、千八百八十九年四月十五日、年四十六にして、癩病者の父は永久の眠りにつきぬ。

彼れ今や亡しと雖、彼れの燃ゆるが如き同情心と金をも辭かすべき熱心と忍耐とは十四年の間に於て、モロカイ島の面目を一新するに至りき。たとひ、癩病治療法は發明し得ざりきと雖も、風俗は改良せられ、人倫は行はれ、眞人間界を去りし住民は、信仰を得、希望を得、慰籍を得ぬ。地獄の觀ありし此の島は一個の樂園と化しぬ。

予が彼れを推して理想の人物とするは、彼れが神々しき品格の人、献身的博愛家なるの點にあり。彼れの性行中予の特に理想的なりとするは、彼れの生涯に一の瑕瑾なきにあり、就中、我れモロカイに行かむと絶叫して人の顧みざる事業の中心に身を躍らし改革の爲めに身を殺し、仁者なるの點にあり。予は、論理上彼れを理想的人物と認定したるにあらずして、感情の上より彼れを理想的人物と信じたるなり。予は彼れの行爲を以て、人の行爲と認めず、寧ろ神の行爲と信ずるものなり。若し、それ基督釋迦孔子ソクラテス等に至りては、予の淺學なる、唯だ其の崇高を感ずるのみ。予が今の理想とする所はダミエンを措きて他にあらず。

第二等

ワシントン

三重縣　間宮雄一

人々の理想は人々の顔が各々異って居るように異ふであらう。予の理想とする所は純良潔白なる君子ジョージ、ワシントンである此處に自分が此の人を選んだ所以は、曾に彼れが亞米利加合衆國と云ふ一大紀念碑を殘して、英名を萬世に輝かした爲めでは無く彼れが他の人々に超越して多くの純美なる德性を具有した事、それが強く自分の心を動かしたからである。彼れの歷史は、實に、一身の光榮を餘所にして公正自ら持する純潔なる獻身的精神と、困難を怖れず、失敗を恐れず、正義のある所こゝに道ありと云ふ語の下に猛進する不屈不撓の意氣とで充たされて居るのである。彼れは或時は重任を負うてカイヨアムスバーグの險を冒した、或時は「胸中策あり何ぞ愁ふるに足らむ」と呼號して、敵の大軍に當った、或時は晝夜馬背にあつて一睡もせぬことがあつた。或時は敵と土蕃とを前後に受けて、內に兵器なく規律なき兵を訓練した。斯くの如きは皆彼れが屈せず撓まざる精神を明にするものでないか。彼れが「今や國家危急存亡の秋なり、議會は既に余を信任して、委ねるにこの重大なる責任を以てせらる。不肖、當に粉骨碎身この職責に仆れて後已まむ」、といひ一身を犧牲にして博愛の爲に赴いたのは彼れが意氣の壯なるを表して餘りあるでないか。さればこそ合衆國の人民は、歡んで彼れを戴き、喜んで大統領にも選擧したのである。英佛殖民地戰爭の起こつた時には殖民地軍の總督に任じ、喜んで國民の生命財產を彼れに委ねたも、畢竟、彼れの性質を能く知つて居たからであらう。然し、最も貴むべき彼の特質は清廉潔白なることである。既に、國が獨立してもはや軍隊の必要を見ないようになつた時、議會は軍隊の論功行賞を放擲して、唯だ〳〵他の問題に熱注して居た。そこで、八年の星霜を戰場で送つて苦辛に苦辛を重ねた將士は、大に怒つて不平の聲が段々高くなり、出來る事なら、ワシントンを擁して兵を擧げ、今の議會を顚覆して、彼れを帝位に就かせようまで云ふものがあつた。併し、彼れが高潔な心は到底之れを聽入るべきでない。彼れは涙を揮つて此の不平將士を諭して曰つた「嗚呼吾等が一身の幸福と生命とを擲つて奮鬪した所以のものは果たして何の爲めであつたぞ」と。之れを聞いた將士は、皆、涙を流して罪を謝し、北米の自由國は何の障りも無く、建設されたのである。さういふ風で、ワシントンは千七百三十二年にポトマック河畔に呱々の聲を揚げてから千七百九十九年マウント、ヴエルノンで此の世を辭した時まで六十有餘年の生涯中一點心に疚しい所の無い實に稀なる君子であつた。英人ブローガム迺、曾て、彼れを賛して「彼れは實に古往今來無雙の俊傑なり」と云つた。一旦戰を交へた敵國の人ですら、此の樣に賞讃した程であるから、如何に德の高い人物であつたかを知ることが出來る又サミユエル、ダービス氏は「ワシントンは偉大なる愛國的事業に堪ふるものなり」と云うて彼れを賞賛した、かの有名なパトリック、ヘンリーは彼れを評して「健全なる腦力を有し天下の望みを負うて立つ如き人物である」と云つたと云ふ事を、ヘンリーの傳記を著はしたワイルトと云ふ人が言つて居る。彼れは英雄としての膽略を有つて居たばかりでなく君子としての仁德をも兼ね、自恃の精神に富んで而して謙遜の資性を具へてあつた。彼れは個人自由の主義を懷いて居たにも拘はらず、常に國家を忘れなかつたのである。彼れは軍人として智勇の將であつた許りでなく政治家としては實に人道の指導者であつた。そして平民としての彼れは博愛公明正大等の諸德を備へて居つた、自分は玆に世界の歷史に於て、神以外最完全に近い人傑を需めてジョージ、ワシントンを得たのである

ベスタロッヂ

岡山縣　尾島義唯

試みに想へ、乞食の兒あり、其の境遇のあはれにはかなきを歎じつゝ職を社會に求め衣食にありつかむと、一日十字街頭に立ちて往來の人に、志を立て得るの道を問ひたりとせむ然、一乞食兒なるの故を以て、往者は足を停めず、來者は擯斥して顧みざる也、彼れはまた同輩について得る所あらむとすと雖もよく謀るに足るもの無く、其の教ふる所は、唯た飯を得る家のみ。かくして、彼れは遂に立派なる乞食となり、そこに安んずるに至れり。よし大鵬の志はありとも、飛ぶに翼なき也、龍たらむとするも、雲なきをば奈何せむ。

今の學生の狀態を見るに、其の不幸や、また此の乞食兒に似たらずや。見よ、多くは校規に羈束せらるゝのあまり、柔順のものさ

懸賞作文

なるを。國籍にして活氣なく、卑屈のものとなるを。教育者は書一的模形に陶冶せむとして、青年奔逸の氣を抑壓し、形式的教育に盲從せしめむとして女らしく活動なきものを歡迎し、或は特待生として之れを賞し、以てかゝるもの、多きを誇る也

學生は、かゝる教育より離れて、就く所を求むるも今日の世甚だ難きなり、教ふる人不熱心にして眞摯なく、唯だ利のために育英の職に當たり、教場一時間の講義終はれば、又關せざる如しさいふにあらずや、而して社會人心の倦怠腐敗亦極まる。世を擧げて智巧を弄し、實利に趨せ、權詐僞善巧利是れ事とす。吁、現社會の繼續者たる青年をしてかゝる教育をうけしむるは、腐敗を助長せしむるものにはあらざるか。青年活氣を失はば、又何をかなしにありてか共に祈り、又、其の求めにより彼等が睡るまで教へたり。其の衣服も、身体も、共に堪へ難き程汚れたれども、余は、兩ながら自ら之れを洗ひ、常に、傳染病の危險を冒せり』と。誰れか彼れが行の中に熱心至誠を見すといふ。

彼れの度々失敗するや、人は皆彼れを嘲りて、ペスタロッヂの頭腦は一種風變りなりと笑へり。然も彼れが熱心は益々熾なりき。其の時彼れはいへり、「余は此の目的なくして生くる能はず、余は恰も始終泳ぎ行かむと焦燥りつゝ、經方なくも、暫し海中の岩に縋ふ人に似たり」と彼れは世の毀譽褒貶を顧みず、飄然貧窮實踐の外に立ちて、誠意事をなしたるものにあらずや。

彼れは度々逆境に沈淪したりき。彼れは罵られつ笑はれつ。されど彼れが意志の堅くして熱心なる、遂に新教育法を研究して之れを實地に應用し、社會に發表し、終に十九世紀教育の師祖となりぬ。

今日の社會人心は、根本より革新せざる可からず。而して根本より革新するはペスタロッヂの如き熱誠なる人の手腕に待たざるべからず。かゝる人にあらずんば何ぞ能たり得べき學生に雲を得むるを得むや。

第三等

三人

基督

東京府 稻葉正英

（一）

痛ましい哉、世は何故にかばかり亂れたる。利の爲め慾の爲め人互に相爭ひ國互に相鬪ふ。濁れる水の流れ溢れて我れは身を置く處だにあらず。あゝそもいづくにか救ひの舟を求め得て、平和と愛とに安心を享くべきか。

げに平和と愛よ、偉いなる哉そはわが理想なり。まして、亂れたる世、迷へる人を見るにつけ、そを望むの感いよ〳〵深からざるを得ざるなり。我れはやがて黄金時代の現はるべきを疑はず。しかも、そは遼遠なるべし。我れは之れに先だつて、先づ我自身を小さき黄金時代の權化たらしめざるべからず、個人の發達はやがて社會の進化なればなり。

さるにても我は何處にその救ひの舟をもとめ得べき。漫に、平和と云ひ愛と云ふも、之れを求むるに容易ならず。寧ろ之れが化身を得て以て理想とするに若かざらむ。

（二）

人文開けて六千載、聖賢の出でたる何ぞ限らむ。しかも何人か能く愛や平和の意を解し得たる。基督曰はく、

『己れを詛ひ己れを責むるもの、爲めに祈れ』と。

あゝ世にかばかり美はしき詞ありしか、左手にコーランを携へて右手に逆ふものを擊つの劍を有ちし人はあり、わが族以外の人を異邦人（ヒゼン）として蔑視せし人はあり、されど何處に人の蛇蝎視する稅吏罪人等が、知らずして神に逆ふ頑愚に涙を注ぎし人の有りしか己れを愛するものを愛す、何人か能くせざらん。己れを詛ひ己れを責むるもの、爲めに神に祈りて、やがては終に十字架上の露と消えたるイエスよ。彼れは偉いなるものなり。

あゝ偉いなるものよ、彼れは眞に愛の化身なり、平和の使者なり暫らく一卷の新約全書を取つて彼れが一代を緬想せよ、その行動その言句、孰れかその大使命の片影ならざる。げにメシヤてふ榮えある名ほいつしかに人より獻けられぬ。滅びたる國を再び建つることはいかに彼れに就いて期待されたりしか。一片の野心なく一塵の物質的心なかりし彼れは終生稅吏、罪人、癩病人等と相雜

聖經を講ぜしめき。食するには馬鈴薯の最もよき所を小兒に與へ自ら最もすたれたる所をとり、而して曰はく『余は乞食に人間らしき生活を教へむがために、自ら乞食の如く住みたり』と。誰れか彼れの行の中に溢るゝ如き同情を見すといふ。

千七百九十八年、佛兵瑞士スタンツを燒き拂ひ老幼流離、途に迷へる兒多かりき。彼れは破れたる尼寺を借り、そこにて、日夜多くの孤兒を看護せり、當時彼れは曰へり『朝より夜に至るまで、余は獨り彼等と共にあり、彼等が肉と鹽との要求は、只だ吾が手一つにて供したり。余は家族もなく、友人もなく、婢僕もなく、只だ彼等と共にあるのみ。覺むるも、睡るも、病むも、健なるも、余は彼等と共にありき。最後に床に就き、最初に床を離れ、臥室にありては共に祈り、又、其の求めにより彼等が睡るまで教へたり。其の衣服も、身体も、共に堪へ難き程汚れたれども、余は、兩ながら自ら之れを洗ひ、常に、傳染病の危險を冒せり』と。誰れか彼れが行の中に熱心至誠を見すといふ。

彼れの度々失敗するや、人は皆彼れを嘲りて、ペスタロッヂの頭腦は一種風變りなりと笑へり。然も彼れが熱心は益々熾なりき。其の時彼れはいへり、「余は此の目的なくして生くる能はず、余は恰も始終泳ぎ行かむと焦燥りつゝ、經方なくも、暫し海中の岩に縋ふ人に似たり」と彼れは世の毀譽褒貶を顧みず、飄然貧窮實踐の外に立ちて、誠意事をなしたるものにあらずや。

彼れは度々逆境に沈淪したりき。彼れは罵られつ笑はれつ。され

りて、終には悲慘の刑に死せざるを得ずなりぬ。あゝげに彼れはかくして、遂に、アレキサンダアたりナポレオンたる能はざりき、しかも、愛の化身として平和の使者として爾來二千載、今に至つて四海の師表たるを得たるにあらずや。

（三）

殊に理想的の行爲として、我れの深く崇敬するは、彼れが最後なり。威嚴犯し難き法庭に、『我は猶太の王なり』と一喝して、遂にヒラトの爲め磔刑を宣せられて刑に行はるべき日なりき。崇敬せる大メシヤの終りを竝に送るべく、集ひ來れる幾萬の老若は、ゴルゴタの原を蔽ひてさながらに堵の如き中、高く十字架上、釘もて打付けられたるイエスは、靜かに共に刑せらるべき罪人の爲めに天國への導きを神に祈りたりしが、フト眼を開けて下瞰したるに幾人の兵卒、己が平常蔽ひ慣れし衣を獲むとし、互みに相爭へりイエスは之れを見て云ひ難き矜恤の情を起こして曰はく、憐れなるものよ、己れを救ふべく降れる人を却りて十字架につけたるさへあるに、更に僅かなる利を爭ひて、いよ〳〵深き罪に陷るを氣附かず、只管に神に遠ざからむとするとは、「神よ願くは罪あるものを許し給へ、そは彼等未だ汝を知らざればなり」と。

何等寛仁の詞ぞや、我れは之れを思ふ毎に思はず流淚滂沱たらざるを得ざるなり、あゝ偉いなる哉イエス、愛の化身よ平和の使者よ、我れは汝を理想として我自身に小さき黄金時代を建設せむと欲するものなり、社會を進歩せしむる事は、少なくとも人類の任務にあらずや。我が勉勵にして暗々裡に、社會進歩の一微原動力たるを得ば、わが望足れり。

釋迦

熊本縣　木庭次雄

嘗て聞く、婦女懷姙中、思ふ所の人あれば、生まるゝ子往々之れに似ることありと。されば、歐米諸邦にては、婦女孕むあれば、必ず、室中に英雄美人の像を掲げて日々之れを見しむといふ。されども是れ獨り產婦のみ然るにあらず。人は、凡て其の居常理想として私淑する人物の性格に類似するに至るもの也。されば、偉人を理想とするものは偉人に似、凡人を理想とするものは凡人に似、善人を理想とするものは善人となり、惡人を理想とするものは惡人となるに至るもの也。素より、初めより理想の人物と相似るにはあられど、居常之れを崇拜するの久しき、知らず〳〵の間遂に之れに似るに至るなり。されば吾人は居常偉大なる人物を想ひて其の高大なる精神に倣ひ念々刻々之れと一致冥合するに至ちむとを期せざるべからず。今吾人が我理想の人物として仰がむとするは今を去る二千五百年の古戞々たる雪山の麓洋々たる恒河の邊りに生れ出でて一切人類を救はむが爲めに一切の幸福を抛ちて堪ふべからざる苦難に堪へ遂に我等の爲めに偉大なる福音を傳へし大聖釋迦牟尼其の人なり。

思ふに、釋迦の如きは歷史ありて以來の第一人と云ふべく其の精

神の莊嚴高大なる、人間として完全圓滿の域に至れる者といふべし。抑人類が此の世に於て最も深く望むものは名財愛の三者にあらずや。人は之れを得るを以て樂みとし失ふを以て悲みとするもの也。然るに釋迦は如何。彼れは一國帝王の皇子にして將に父に代はりて帝位に就くべき身にして其の名譽、財寶、共に人間の最大最高の地にありし人也。之れに加ふるに、容顏花の如き姬妃と可憐玉の如き皇子とを有せし人也。されば人間が此の世に於て享受し得べき名譽と云ふ名譽、財寶と云ふ財寶、愛情と云ふ愛情は皆具備して遺憾なかりし也。あゝ是れ、人が此の世に於て渴望する總べてにして、一たび之れを得ば之れを抛棄し斷念すること能はざらむ。是れ人情の當に然るべき所也。然るに、釋迦は一たび世の無常にして人類の蠢愚なるを見るや、世人の渴望する名譽財寶妻子を蹂履の如く抛ち去りて人々の好まざる困苦の地に猛進せしにあらずや。其の理想の爲めに慾望を制御せし勇氣敬せざるべけむや。而も彼れの之れを爲すや私利私欲の爲めにあらずして、同胞を愛する至情に出でたると云ふに至つては、其の同胞人類を愛する大慈悲心豈尊ばざるべけむや。嗚呼其の大勇至情、實に吾人の敬慕に堪へざる所也。

然れども釋迦の尊ふべき點は素より是に止まらざる也。吾人は更に其大覺を成就せる釋迦を見ざるべからず。大覺を成就して後の釋迦の性情は、猶雲散じて明月を仰ぎ霧露れて旭日を迎ふるか如く、圓融無礙渾然として完全の域に至れるを見る。夫れ完全なる

人物とは如何。是れ智情意の三が圓滿に發達せるを云ふにあらずや。蓋し唯智にのみ長ずるものは狹猜に走り易く唯だ情のみ盛んなるものは偏頗に流れ易く、唯だ意のみ強きものは殘忍に傾き易し。されば智情意の三者等しく圓滿に發達せるもののあらば、之れを以て完全なる人物と稱すべき也。今、夫れ史上有名なる偉人を拉し來りて以上の點より批判を加へ見よ。完全なるべきもの夫果して幾何かある。耶蘇、孔子、鎖克拉底は、人以て古今の大聖となす。吾人、亦之れを疑はざる也。而も、強ひて其の缺點を云へば、耶蘇は其の智力深遠ならず、孔子鎖克拉底は其の愛情博大を缺き、圓滿なる人物として聊か缺憾たるものあり。然るに釋迦を見よ、其の智は以て宇宙人生の大眞理を達觀し、其の情は博大にして一切の人類を愛憐し、其の意は強固にして外圍内心の引難を制御し、其の人格の偉大崇嚴なるたとへば山岳の峨々として聳ゆるが如く日月の皎々として照すが如く之れを見て敬すべく之れを仰いで尊ぶべし。吾人は其の精神を想ふ時、敬慕崇拜の情勃然として起こるを禁ずる能はず、又我が力の小にして精神の薄弱なるを感ぜずんばあらざる也。あゝ上下五千歲、東西幾千里偉人と呼ばれ傑士と稱せらるゝ人、其の數に於て何ぞ限らむ。政治家として、宗教家として、學者として、武士として、後世幾多の人の尊敬を惹くもの、素より夫々敬慕に値する點を有せむ。然れども、吾人が要求する完全圓滿なる人物としては、缺憾たらずんばあらざる也。獨り釋迦や其の人格の崇高圓滿にして、仰いで敬すべく就

いて親むべく、人間として、之れを前にしても之れを後にしても又、此の上に出でむとは吾人が殆ど想像する能はざる所也。されば之れを以て、我が理想の人物として尊敬の意を表し其の偉大なる精神人格を想ひて、我が薄弱なる精神を修練し、我が不完全なる品格を完全にし、念々刻々彼れの人格に接近せむことを求むるは、是れ人類として又國民として大切なる義務たらずんばあらざる也。

西郷南洲

東京　最上愷文

天地正大の氣磅礴鬱積して聖賢偉人を生ず。國之れに由つて興り政之れに由つて立ち、民之れに由つて安んず。東西幾千里、古今何千年、芳名を竹帛に垂れ鴻績を四海に輝かし、者、其の人に乏しからず。而も、余をして最も欽慕措く能はざらしむるものに至つては、唯だ南洲西郷翁其の人あるのみ。

薩州鹿兒島市の西端甲突川の東涯を加治屋町となす。此處に盼乎たる一の邸趾あり。庭荒れ、垣壞れ、廣さ僅に數畝に過ぎず、中に朴素なる石標建てり。題して「西郷隆盛誕生の地」といふ。嗚呼、是れ六十餘年前、天の靈命に感じて生まれし維新中興の元勳、南洲西郷吉之助が始めて呱々の聲を揚げし處なり。翁の年少なるや、質極めて魯鈍、絶えて才幹機智を見ず、一見愚の如くなりき。而かも、是れ却つて翁の翁たる所以にして、所謂英雄嬰兒の如くふ諺に符合する所以に非ざるを知らむや。

翁江戸に出でて始めて藤田東湖に接するや、東湖は直ちに翁の人となりを看破して愛するを吾が子の如く、相携して共に國家經綸の策を講ず。東湖曰はく他日吾志を繼ぐ者は獨り此の少年のみと翁も、亦曰はく天下眞に畏るべき者は、東湖一人のみと。由來肝膽相照らす、英雄、各〻、見る所あり。後年翁の雄略一世を震動せし者偶然ならむや。蓋し、當時德川の下流漸く濁り、强藩の末勢亦弊縮を穿つ能はず、柳營の措置自ら其の宜しきを失ひ天下の志士皆私に泣く。翁は、此の間に在つて早く社會の如何に腐敗せるかを洞見せり。其の一たび東湖に接して國家經綸の大策を立てゝより、歸つて一藩俗論の衝に當たり再び南島に謫せらるゝも矢て他に移らざりしが如き、其の大節の嶷然たるを見るべし。其の一旦幽囚の中より起つて戰亂の間に處し、岩倉公及び松菊に結び大義に臨んで英斷、勇決、遂によく大機を劃したるが如き、其の雄略鬼神の如くなりしにあらずや。其の江戸城を攻むるに當たつてや、從容自若平生の如く談笑し赤心を敵の腹中に置いて疑はず、敵をして其俠情の烈なるに感泣せしめしが如き、維新中興の偉業誰か翁の功を以て第一に非ずと謂はんや。さはいへ余の翁を崇拜する所以の者、徒に茲に止まるに非ず、古今東西幾千の人豪中特に翁を取つて吾が理想となすもの、他に理由あればなり。蓋し、政治的才識、經綸的智謀に至つては、甲東の如き、松菊の如き、或は翁の右に出でむ。然れども、翁の翁たる本領、豈に唯だ其の才識智

識にのみ由らむや。甲東や松菊や畢んぬ至るべし。獨り、翁に至つては得て摸捉すべからず、常人の窺ふべからざるもの在つて存するを見る。

翁の人格（資質の美／克己脩養／悟道）

悠々天命を樂しんで疑はず、至誠を盡くして惑はず、以爲へらく身命吾れに於て何の要する所ぞ、位爵名聞吾に於て亦何の須ゐる所ぞと。落々として一毫の動心なし。而して、彼の學問の能事、亦、此に達するに外ならざるのみ。翁は、よく、此の間の理を會得したる人、蓋し、盡人事待天命の言は、翁の心肝を貫ける一道の精髓なりしなり。實にや其の身命を賭して至誠を盡くし、公道を行ひて榮爵を求めず天眞爛漫にして嬰兒の如き所、灑々として霽月の如き所、寡欲淡泊、而も洸勇にして泰山の如き大節ある所、綽々として常に餘裕ある、一呼一吸、殆んど天地の籟に徹し、一擧一動宇宙を包括するが如き者あるを見る。

克己脩養は德を積む所以、身を立つる基本なり。公道に就いて進み善路に從つて行ひ、念々これをなして敢て怠らず、道熟し理達して後始めて天命を會得し、圓滿靈怪活達縱橫の妙体に達す。南洲と雖も、初めより爾く達人なりしに非ず。蓋し、翁は、禪學を脩め陽明を講じたる人、惟ふに其の此に至りし所以の者、脩養積勉爲さして片時も怠らざりしにこらずんばあらず。

嗚呼翁や才略萬世を曠うして洪度濶量四海を蔽ふ。秩を捲いて一たび起てば百萬の貔貅立ろに集まり、脚を擧げて一踏すれば、乾坤鳴動し、地維震撼す。器識才略、亦優に維新傑物中の第一と稱すべし。其の禪を修め陽明を講じ、德を積み、道を究め、天命を會得して、自然に逍遙したるに至つては翁の如き、蓋し古來其の人多からざらむ。資質の美、克己脩養、悟道の三點、余が、翁に學ぶ所以にして、亦、翁を以て理想的人物となす所以なり。

嗚呼、翁、一たび逝いてより此に二十有余年、世は益々下り人は益々墮落す。仁義地を掃ひ士氣日を追うて銷沈す。閣臣身の慵爵を貪るを知て邦家を羞ふるを知らず、三百の羊群、亦、何の醜面ぞ。奢侈風をなし驕惰俗をなす。偶々實朴飾らざる者あれば、直ちに捉へて、以て愚となし迂となし、輕侮して亦顧みず。嗚呼四千萬の人よく南洲の教へに背かざるもの果たして幾何ぞ。八十洲の民よく南洲の本領を解するもの亦幾人ぞ。天王山頭六尺の像、威風四邊を掃ひ、眼光萬人を射る。英靈今果た何れにか逍遙する芳魄若し在らば、請ふ來たりて吾が暗世を照らせ。

第四等

四　八

二宮尊德

新潟縣　丸山精四郎

二

余が歴史上の理想の人物は、二宮尊徳翁なり。抑も余が翁を以て理想の人物となす所以のものは、一に余は翁の少時さまで境遇を同うせるためなり、二に翁は意志の人なるを以てなり、三に情の人なるを以てなり、四に智の人なるを以てなり。智情意兼備するが故に徳行自ら勝ぐる、境遇相類するものあるを以て同情自ら起こる。何ぞ尊敬せざるを得むや。左に余が特に感じたる翁の行爲を記さしめよ。

翁は幼年にして父母を失へり。夫れ父母を失ふほど人生の大恨事なり。ただに痛歎の極なるが故にしか謂ふに非ず、己が前途の希望目的を遂行する大障礙なればなり。是を以て、世人が樂天家となるも厭世家となるも、這般の時に於て多しとなす。是れ實に人生の危機なり。而して、翁は後者をとらずして前者を取れり。心性快活の狀想見するに足れり。嗚呼余は先きに母を失ひて今亦父を失ひぬ。快々として樂しまざる時、翁が事蹟を讀みて獨り快哉を叫び　心中一層の勇氣を增す所以のもの、皆翁の賜なり。翁曾て親戚にありし時　財空しくして勉學意の如くならざりしかば、荒地を開墾して穀物を得、其の代を以て夜間勤學の資に供しきと云ふ。然るに、親戚のもの之れを悦ばず命ずるに夜業を以てせしかば翁ほゞく之れに服從し、家人の寢ぬるを竢ちて讀書習字に餘念なかりきとぞ。余は近來始めて勞働に從事したり、而も夜業あるに非らず、敢て家人の余が勉學を拒むに非ず、又、石油なきに非ずと雖も、疲勞甚だしくして夜學する能はず、況んや、深更に於てをや。然るに翁の幼時は斯くの如し。慚愧の至りならずとせむや。窃かに我が意志の薄弱なるを恥ぢて翁が意志の堅固なるを嘉ふこと甚だ切なり。故に曰はく、翁は意志の人なりと。

翁は、又、勤儉貯蓄の性に富み、常に貨錢を貯へ、積みて一貫文に滿つれば之れを貧民に分與しきと云ふ。其の他、常陸の荒村を脩めて貧家を與しゝが如き、小田原の飢饉を救ひしが如き　或は人を諭すや至誠にして往々涕泣するに至れりと云ふが如き、一として翁の品性を表はさゞるはなし。まことに博愛慈善の德兼備せりと云ふべし。故に曰はく翁は情の人なりと。

翁は天性廢物利用に巧みなり。曾て村人が棄てたる苗を集拾して之れを荒地に植うること數度に及びて莫大の米穀を得たりしかば竝に家屋を脩復し田畑を買ひ入れて、再び、二の宮氏の家を起つるに至りきと云ふ。一班により全豹を何ふを得べし。故に曰はく翁は智の人なりと。

偉なる哉尊徳翁、翁は智に於て、情に於て、將た、意に於て、如斯なるが故に、百般の行爲皆吾人の學ぶに餘あり。節儉と云ひ、勤勉忍耐と云ひ、博愛慈善と云ひ、堅志力行と云ひ、悉く然らずや。況んや其の餘德遺業今日に至りて尙ほ民を利し國を益すること少なからざるをや。實行を本とせざる理想は何等の價値なし、德行を本とせざる實行も亦何等の假値なし。要は只智德の圓滿に在り。勤めて怠らずんば近きより遠きに低きより高きに愈益進化發展して遂には高遠なる理想的人物に達するを得むか。

アスター

岐阜縣　落合正隆

歴史ありて以來幾千年吾人の理想とすべき人物は數多あるべし。されど、余の淺學なる能く其の人物を見出たすこと能はず。然れども、余が幼時より、其の性行に於て其の事業に於て常に理想とせし者は、我が天保年間に亞米利加第一の富豪と稱せられし實業家アスター氏なり。廣き世界の中、此の種の人物は、他に數多あるなるべけれど、余が特に、此の人物を取りしは、余が小學時代より教師の訓話に依り、又讀本等により、其の事歴を學び知りて其の言行の深く余が腦裡に染みたると、比較的稍れなる人物なるとに依れり。彼れは元獨逸國人なりき。十七歳の時、僅かに一巻の織物と貳圓程の金とを持ちて已が家を出でたりしが、行くこと數里にして天を仰ぎ誓ひて曰はく「余は誠實なるべし、余は勉強すべし、余は賭博を爲さざるべし」と其の後、彼れは英國及び亞米利加の各處に轉居し、おもに獸皮の貿易に從事したりしが、常に、熱心に勉強せしかば、益々好結果を得たるのみならず、獸皮の價値、性質、精製の法、保存の法、皮を取るべき獸の習慣、住所、往來の塲所、及び之れを捕ふる方法等に至る迄、深く調査研究して、遂に動物學、工業學の一端を悟り得たり。彼れは特に資本の活用に長じ、其の奇計を運らし謀略を用ゐることの巧妙なる實に驚くべき許りなりきと云ふ。かくて彼れは此の事業に依り巨利を博し、晩年に所有せし財産は實に殆んど貳千有餘萬圓に達せり。彼れ、常に、早起の習慣を養ひ、五十五歳に至る迄、常に人に先だちて職業に從事し、未だ嘗て怠らず、死に臨んで遺言して故郷なる貧民に五萬圓を施し、八萬圓を以て書籍館を立て、其の他貧婆救助會にも多額の金を寄附しきと云ふ。彼れが一代の苦勞艱難果たして幾何ぞ。彼れが其の國に貢献したる功績果たして幾何ぞ。吾人の能く想像し得べき所ならむや。彼れの理想は實に此處に在りて存せり。古來我が國に此くの如き人物の絶えて出でたるなきは歎ずべきの至りならずや。我が國は、古來商業を輕んじ、士農工商といひて商人を四民の末に置き、商人も亦自ら卑屈に流れしが、維新後漸く此の弊を脱し信用制度漸次に行はれむとす。然れども、我が國は、商業國としては、他の文明諸國に比して尙ほ遙かに劣等の位置にありと云ふ。悲しむべきの至りならずや。されど悲しんで止むは、余が本旨に非ず。宜しく進んで取るべきなり。故に余は縷ひアスターの如くなること能はずとも、自らアスターの理想とせし所を信じて努力せむと欲するなり。

ワシントン

東京　中村菊之助

古今東西の史上に於て、名を竹帛に垂れ範を後世に貽したる偉人傑士少なからず。されど其の多くは一身の榮華をのみ希ひし野心

家にして國家、人類の爲め、正義、公道の爲めに盡くし、者に至りては甚だ稀れなり。余は、其の卑劣なる野心なくして、誠實に人類の爲めに公道の爲めに盡したる點に於てジョーヴ、ワシントンを理想とす。

彼れは世の所謂英雄の如く豪放磊落なるものにあらずして、極めて嚴正なる人物なりき。軍人としての彼れの技術は、獨立戰爭に於て爲したる動作に依りて知ることを得べし。當時米軍の多くは、新に募れる兵士より成りて、訓練未だ完からず、兵士としては頗る幼稚なりしのみならず、其の數、亦敵の半に及ばざりき。加之、英軍の如く經隊の掩護なく、精銳なる武器なし。此の不完全なる軍隊を以て、強大なる敵に當たる、例へば蟷螂の龍車に向かふが如く、鼠の猫に向かふが如し。勝敗の決問ふを須ゐざるなり。若し、滔滔たる細流は千丈の鐵壁を破るべからず、寡は衆に敵する能はざるものとせば、米軍はもとより、立ろに屠殺の厄を免るべからざりしならむ。然ろに事實は之れに反して寡兵克く七年の長日月を支へ、終に大勢をして米軍の勝利に歸せしめたり。是れ主として彼れが忍耐、剛毅の精神と、其の非凡なる兵學上の智識とに依らずんばあらざるなり。政治家として、又一個人としての彼れは、實に人道の好模範たりき。彼れは幾多の先天的美德を有したるが上に、尙ほ品性の修養を怠らざりしを以て、其の品性修養の結果は、延いて正義を欲する念となり、獻身的精神となり、至誠の情となり、公明正大の心となりき。故に、彼れは正義のある所

あらず。彼れは國家人類あるを知つて、一身あるを知らざりしなり。然り。一身の榮華の如きは、彼の夢にだも想はざりし所なりき。故に、功成り名遂ぐるや、脫然勇退して鄕里に歸り、耕耘を之れ事とし、また曩昔建國の大恩人たるを知らざるものゝ如くなりき。嗚呼彼れの一心は、遠く俗塵を避けて、高遠秀麗の地に生息せしなり。吾れ米國史を讀んで、彼れが品性を追想する毎に、未だ曾て光風に浴し、春風に坐するの想なくんばあらず。彼れの品操は、しかく高潔なりしが故に、彼れが建設し、陶冶したる合衆國は、遂に今日あるに至りしなり。われば、深く彼れの此の清德を敬慕す。

今や世を擧げて混濁言ふに忍びず。現時の青年たるもの、須らく彼れの如き高潔なる偉人の性行に鑑み、以て大に爲すところなかるべからざるなり。

基督

島根縣　石原憲

歷史ありて以來數千年の其間能く一代の儀表と仰がれし者少なからずと雖も、是等の所謂英雄豪傑聖賢偉人を提へ來たりて精細に觀察すれば眞に圓滿完美の人格を具備して理想の人物と仰がるべき者果たして幾人かあるべき。吾人は、只、ナザレの耶蘇に於て、之れを見ることを得む。

耶蘇彼れ何者ぞ。吾人は彼れが所謂メシヤにして、果たして神子なるものなりや否やを知らず。そは宗教上の一大疑問として古來學者輩の容易に斷定し得ざる所なり。吾人は彼れが吾人と同じく肉と骨と血とを以て成り四肢五官を具へて世に出現したりし以上は、彼れを普通の人類として論ぜむと欲するものなり。殊に、吾人が彼れに於て稱贊欽慕するは復活昇天等の奇蹟に存せずして彼れが普通人類として生活せし圓滿完美の自然的生涯に存す。見よ彼は精神の人、思想の人、言論の人たりしと同時に、實踐の人、躬行の人、事業の人たりしとは、歷史上の一大事實なることを。世に詩人、宗教家、哲學者と稱するものあり。高遠なる哲理と奇跡なる議論とを弄するもの少からずと雖も、眞に自己の所論と理想とを實地に躬行して言行一致の生涯を送りしものに至りては、決して多くを求め得べからず。假令、其の議論と識見とに於て崇高奇拔人を驚かすに足るものありと雖も、之れを實行し得ざるに於ては、其の高論卓說も、遂には、机上の空言空語に終はらむのみ夫れ人は精神的實在物なると同時に肉体的生物たるなり。されば精神と實行とは人生の兩面にして此の兩面完全善美なるを得て、始めて圓滿なる人格を作るを得べし。故に、吾人は精神に於て莊高幽玄なるを望むと共に、行動に於て正直俊敏なるを期せざるべからず。文章議論音樂技術等に於て卓越せる技倆ありとも、直ちに入格に於て完美を得たりと稱するを得ず。是等は、單に一部の不均等なる發達をなしたるものに過ぎずして畢竟一種の畸形的人物

たるを免れず。然るに耶蘇は、此の譏を脱し得べき人たり。其の思想の莊高にして心事の潔白なる、其の生活の自然にして行動の眞面目なる、能く言行一致を得、所謂八面玲瓏的の生涯を送りしものにして、其の人格の完美なる、史上未だ彼れに匹儔するものなし。吾人は、彼の信徒が稱ふる如く彼れは眞に絶對的完全者なりや否やを、斷ずること能はずと雖も、然も、彼れが生涯の完全善美にして一點の批難を挿むの餘地なきは吾人と雖も之れを認めて疑はざる所なり、彼れは愛を以て有らゆる善の根原にして又美の極致なりとし、極力之を說けり實て或一人が予は完全に達すべく何をなさむやと問へるに對して、彼れは己の如く其の隣人を愛すべしと答へき。而して彼れは果たして其の言の如く眞に溫き同情と熱き涙とを以て、己の如く其隣人を愛したり。彼れが全生涯は、總へて愛の歷史にして、彼れは眞に愛の化身同情の權化とも稱すべき者なりき。彼れは又人類の自由平等平和の大義を叫んで、而して、最も自由と平等と平和とに滿てる生涯を送りたりき。四海同胞即ち博愛の思想は、彼れに於て實現せられたり。有らゆる階級の打破と虛榮の排斥とは彼れに於て實行せられたり。彼れは飽く迄勞働の神聖にして倫安の惡むべきを唱へ、平民の友として貧者の友として極力弱者に加擔したりき。彼れは虛榮の澁むべからざるを知りては、ソロモンの榮華の極の時だにも其の裝ひ野の百合花の一に及ばざるを喝破して、世の徒らに物質的文明に醉うて自然に遠ざかる者を笑ひたりき。彼れは人間を無視して獨り靜かに高尙なる天爵を樂しみたりき。されば、彼れは大工の家に生まれて然も大工たるを恥ぢざりき。其の傳道に從事する間際までも、鋸と鑿とを採り、自ら額に汗して衣食し、以て。勞働の神聖にして決して卑しむべきものにあらざるを示したりき。されば、彼れの眼に映ずるものは、王者も奴婢も貴族も職工も總彼れてに於て平等なりき。彼れのは、王者も奴婢も貴族も職工も總彼れてに於て平等なりき。彼れには敵なく、味方なく彼れの愛と同情とは總ての人類の上に均一に與へられき。故に、彼れは絶對に爭鬪を排し、有らゆる壓制と束縛と權勢と阿諛とを斥けたりき。彼れは自由を守らんが爲めには極めて柔和に、平和を守らむが爲めには極めて讓遜なりき。彼れは敵の爲めにも常に祈りて止まざりき。其の方伯ピラトに捕へられて十字架に釘つけらるゝや、神魂絕ゆる迄も、彼等迫害者の爲めに祈りつゝ毫も恨むことなかりき。是れ、愛の愛なるものにあらずして何ぞ。彼れは眞に死に至る迄も其の操を易めざりき。彼れは自己の主義理想義務の爲めに最も美はしく献身したり。彼れが一言一行は總べて天眞爛漫にして眞理を含みたりき。彼れは徹頭徹尾眞面目なる正義者なりき。人類の完全なる人格と人生の至善極美とは彼れに於て見るを得べきなり。人間何者か彼れよりも淸く、正しく、美はしく、勇ましき生涯を送り得るものぞ。宜なり。彼れは長へに儕輩せられて、永く西洋文明の根原となり、能く至大の勢力となれることや。吾人が理想的人物として彼れを選べるもの故なきにあらざるなり。

中學日記

第一回披露

『中學日記』の應募者に告ぐ

本會の募集に應じて『中學日記』を記述し寄送されしもの無慮百通の多きに及びたるは、實に會員諸子熱心の結果の致せるところにして本會の大に滿足するところなるが、右百餘名の諸子は恐らく必ずや毎月この日記を寄送さるべきことゝ信ずるを以て本會は十二ヶ月の間、これ等寄贈の『中學日記』を丁寧に保存し、而して後、鋭意十二ヶ月間繼續して此の日記を送られし諸子に對しては、その名譽を表彰すべきこと勿論なるべきが、こゝに此等の日記を審査せる際、吾人の胸に浮かびし數ケ條の注意を左に記し、諸子の參考に備へ、而して、その次ぎに豫め約せし如く、優等者の日記一篇を掲ぐることゝなせり。

審査者の胸に浮かびし注意の箇條次ぎの如し。

一、實際に在りし出來事の日記にあらずして、特に作り設けし日記らしきもの、多數を占むること

二、無益なる感情の記事多くして、有益なる事實と認めらるゝ部分の概して乏しきこと

三、投稿せられしうち、英文にて認められし分二通あり、その文の巧拙は兎に角、日記の如き平易の記事を、心に思ふがまゝ英文にて認むることは頗る英作文に益するところあるを以て、英作文を作り得べき學力ある諸子に向かひては、吾人大いに之れを奬勵するに憚らざるべきこと

四、日記には比較的優等なるものありしが、日記及び和英譯文共に優等なるものは、遺憾ながら一通だにあらざりしかば、止むを得ずして、日記のみ優等なる分をこゝに掲ぐることとせしこと

五、和文英譯問題「容易に約束する人は容易に

忘る」の正當にして最も好き譯文次ぎの如し
エン アフト ツー プロミス イズ アフト ツー フォーゲット
A man apt to promise is apt to forget.

六、英文和譯
エー クワイエット タング シュース ア ワイズ ヘッド
A quiet tongue shows a wise head.

直譯すれば
「沈默なる舌は聰明なる頭腦を表はす」
にして、これを我が國の譬喩に當てはむる時は
「怜悧なる頭には閉ぢたる口あり」

五月廿九日の日記

山梨縣　小尾範治

午前八時登校す、明日全校の運動會を催すとの掲示あり、英譯修、身、動物、會話など四時間の課業を濟まして午食に歸る、
午後、中隊運動の訓練を受けて二時歸宿す、特に記憶すべきは、本日英語科受け持ちの横井先生が辭職されしことにして、生徒一同別れを惜みて袂を分かちたり、先生乞ふ自愛せられよ。

（以上、學校にて）

朝五時起床
學校より歸へりて柔道の稽古に行き、三時過ぐる頃歸宿すれば、父上より手紙來たれり、實家にては一同無事、幼き妹日々學校に通へりと報ぜらるるに、故郷のこと、そゞろ思ひ出だされたり、それより自修し、夕食後しばらく散歩して又た机に向かひ、十時の時計を聞きて床に就く

（以上、家庭にて）

日記

月　日　曜日

學校にて

家庭にて

（和文英譯）……豫じめ忠告を受けたる者は必らす警戒す

（右の英譯）……

A wicked man is his own hell.

（以上の和譯）……

姓名

住所

日々の日記を其の都度認め置き、他日の備忘に供することの必要なるは、殊更に云ふまでも無し。普人は、時に其の必要を感じて日々の日記を認め居るも、學生諸君に向つては、急々之を勵行せられむことを望むと共に、未だ日記を認められしことあらざる諸君に向つては、一日も早く之を實行せられん事を望むこと切なるが故に、其の奬勵の微意を表せむとして、爰に「中學日記」を募る。其方法次きの如し。

一、此の紙の表面に印刷せる「中學日記」欄内には、諸君が日々各自に認めらるゝ日記の中比較的に記憶すべしと認めらるゝ一日の日記を選び、事實を飾らず、有りのまゝに認められたきこと。

一、和文英譯、英文和譯の問題を添付したるが、日記と共に其の譯文をも認め送られたし。但し、和譯の文体は、雅文、俗文、言文一致なるも、孰れを取るも隨意たるべきこと。

一、日記及び和英譯文共に最優等なる分を、特に之を本誌に掲ぐべきこと。

一、此の「中學日記」用紙は毎號これを添ふべく、而して、十二月以上繼續して毎月此の日記を送られし諸君に對しては、特に、その名譽を表彰すべきこと。

一、應募期限は、來月十日を限りとすること。

一、住所、姓名、及び、月、日、曜日等必ず明瞭に認められたきこと。

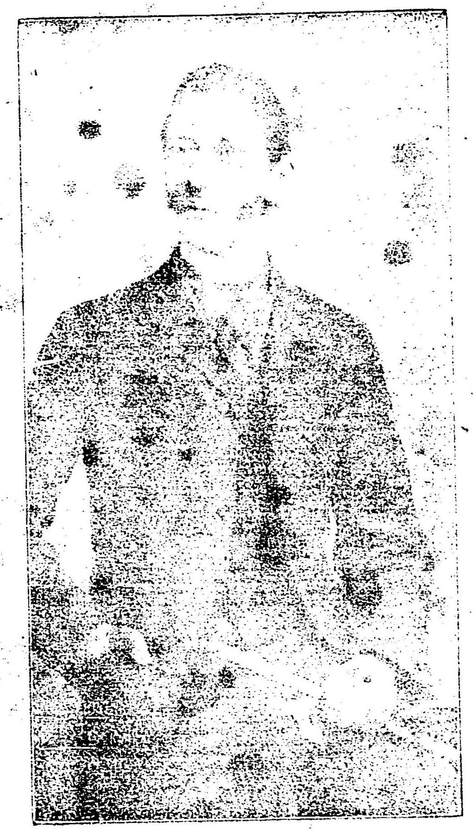
一、東京專門學校出版部内中等教育會宛に送付ありたきこと。

世界帝王の幼時

森つか

帝王だから徒食安眠ばかり致て居ても自然になれると斯う思はれたのは、それは黄金時代の往昔の夢。現今は至るところ文明の光あまねからぬはなき有難たさには何事でも總べて實地世界の優勝劣敗。徒手をして遊んで居るうち遠慮は無沙汰の後から來た人々にどん〳〵追ひ越されて終ひます。だから仲々油斷の出來ぬのは、素より申すまでも御座いませんが。既に時勢が其の通りで御座いますから、會員諸子が一生懸命に御勉強なさるのは之れまた其の筈のことに相違ありませんが、いろ〳〵と御勉強なさるのは、勿論諸子ばかりでは無くて世界各國の諸帝

王と申せども現今は仲々必死の御勉強をなさらなければならぬのであります。ところで、現今の諸帝王それからまた將來世界に帝王たるべき現今の諸皇太子には、果して何の位御勉強をなさるのであらうか、と云ふ其の邊のことを爰に申し述べるのは諸※ならうと思はれますので。先づ雜然このような考へから、斯くは世界帝王の幼時と云ふ題をばこゝに設けたので御座います。



ボーン大學々生としての獨逸皇太子殿下

扨てこゝに先づ第一にお談し致さうと思ひますのは獨逸今上陛下の御嫡男即ち未來に於いて獨逸帝國に帝王たるべき御方のことで御坐います。同皇太子殿下には本年五月第六日を以つて御年滿二十歳にならせられたとのことで御坐いますが今や同國ボーンの大學にて螢雪を友に苦學の効を積ませられて、*上皇帝もその御先代の皇帝陛下も一度は御在學になつたとのことで御坐いまして、その當時でさへも殆んど普通の學生同樣にして御勉學を遊ばされたそうで御坐いますから目下の皇太子殿下に於かせられましても、普通の學生と少しも選ら

露西亞皇帝今上陛下の御幼時

むところなく連りに苦學を遊ばされるのに別に不思議はないと申しても宜しう御坐いませう。

同殿下にはボッダムなるマルモル王宮にて御誕生になり、御年六歳の頃はひまで御母君即はち皇后陛下御自身の極く〳〵嚴しき御監督の下に御成長になりましたので御坐いまするが、扨て此の第六回目の御誕辰以降はフアルケナン將軍と申す人に同殿下御教育一切のことをば全然お託せになりまして、愈々嚴しい御教育を御授けになりましたが、其の嚴びしさと云ふものは普通の學生等よりは遙か遙か上と申して可い程であつたとのことで御坐います。

御年十歳にして近衞第一聯隊の少尉に任ぜらるゝと申すのが、此のホーヘンゾルレン家即はち獨逸帝室に皇太子たる方々の御規定だそうで御坐いまするが、同殿下も又、此の御年十歳と申すに御弟御に當らせらるゝフリッヅ親王殿下とゝもに陸軍少尉に任ぜられ、ホルスタインのブロエンと申すところにある陸軍中學校と申すに御入學相成り御學問のみこそは、皇后陛下が親しくお選らみになつた五六人の御學友とばかり御勉強遊ばしたれ、棟兵その他のをに至りましては二百有餘

名も御坐いまする同窓の御學友と平等に遊ばしたとのことで御坐います。が同殿下には此のプロエンの中學に御在學相成りますること殆んど八年、その第十八回の御誕辰に垂んとする頃、この中學を御退學になり今度は親しく聯隊のうちへ入りになり、多くの兵士等と種々の勞苦を分かたれたそうで御坐います。

斯くて此の軍隊生活を遊ばすことが滿六ケ月、それから更らに目下御在學のボーンの大學に御入學なさつたので御坐いました。

此のボーンの大學へ御入學になりました第一の御目的は、先ゴ法律學を三年間、それから引きつゞき經濟學をば同じく三年間、その後更らに文學美術のことを御學習にならうとの御爲めだそうで御坐います。かく御學問を遊ばすにも、それは或る學科こそ他の學生等とは特別に御學習になることも御坐いませうが、概して他の學生同樣特別に殿下の御席なぞをば設けるといふことなしに極めて平民的な御樣子を遊ばして居らるゝやに承はり及んで居ります。

高田屋嘉兵衞

町田藍川

高田屋嘉兵衛は、攝州兵庫の船頭で、門閥系圖によつて、身分階級を限られた幕府時代に生れながら、唯今で申せば内閣大臣に當る老中若年寄と、膝組で話の出來る程に、用ゐられた男でムります。尤も嘉兵衛が近藤重藏守重を助けて、古來商船の通つた事のない丹根崩の海峽を乘切り、國後擇捉の島々を開拓した功績は古來未曾有でムります。幕府の役人方も、其器量と度胸を見拔いて、船舶製造の重任を托した處が、嘉兵衛は萬金丸（千五百石積）飛龍丸、凌風丸、如神丸（以上三艘各千四百石積）政德丸（千二百石積）吉祥丸（七百石積）天福丸（八百石積）千春丸、濟通丸（各六百五十石積）昌德丸（千五十石積）觀光丸（千三百五十石積）等を始め、四十五艘の大船を造り出しました。今でこそ横須賀の造船所のやうな大、仕掛があるから、左程驚く程でもありませんが、造船術の極めて不完全な時代に、是丈の働きを致した嘉兵衛は、凡人とは思はれません。其事蹟を精しく申せば中々一朝一夕に盡されませんから、玆には嘉兵衛が露西亞人に捕はれて、非常なる艱難に遭遇しても、露些か恐る丶氣色なく、國家の爲めに身命を忘れ、一旦讐敵の想を爲したる、日露兩國の間を調停した次第を、掻い摘んでお話し致しませう。

* * * * * * *

嘉兵衛が何故露西亞人の捕虜になつたと申せば、頗る入組んだ事歷のある事で、是も容易に話し盡されませんから極々ざつと述べませう。文化元年（今を距る九十九年前）露西亞皇帝の使節レサノツトが、我漂民仙臺領寒風澤の水主津太夫外三名を長崎まで送り届け、序に皇帝の國書を以て、通商貿易の事を申し込みましたが、幕府は鎖國一點張りで

したので、レサノツトは君命を辱しめたと申して非常に口惜しがり、歸國の途中果敢なき最後を遂げました。其時レサノツトに隨つて來たフオストーフと云ふ男が、レサノツトの復讐を致す心算で、文化三年より四年へ掛けて、樺太國後其他海岸の土地に於て、番人を生捕にしたり、役所を打壞したり、米穀魚鹽を略奪したり、種々の亂暴を働きました。海外の事情を更に知らぬ幕府では、露西亞人が皇帝の仰せを受けて、日本を攻めに來たと思つたから大變な騷ぎ。奥羽の諸藩に命令を下して、蝦夷警固の事となり、外國船と見たら、遠慮無く打拂へとの意氣込でムりました。處が此騷動の原因はフオストーフ一人の復讐で、露西亞皇帝は更に御存じ無い事だから、海軍少佐兀老尹に、蝦夷近海測量の命を下したので、兀老尹は軍艦ヂアーナ號に乘つて、文化八年の五月國後に着きました。此時はフオストーフ事件以來四五年過ぎて居りますが、幕府の役人は油斷なく警戒して、奈

佐瀨右衛門政辰が、謀計を以て兀老尹外六人を釣り寄せ、上陸させて、とう〳〵生捕に致しました兀老尹こそ好い迷惑、何が何だか一向夢中で、思ひ掛なく突然他國の捕虜となり、陋々云ひ譯を仕ても此方は更に聽入れず、松前へ曳張つて來て、獄中へ繫ぎました。其時ヂアーナ號の乘組士官に利格兒吐と云ふ者がありまして、艦長兀老尹が捕虜となるを見るや、大に憤慨し、是非兀老尹を救ひ出さんと、百方の手段を運らしましたが、此方は何處までも喧嘩腰で居るから取り着く島がありません。そこで利格兒吐が考へるには、これは何でも日本人の有力者を一人生捕り、捕虜の交換をするに限ると、日夜ヂアーナ號を指揮して、蝦夷近海を乘り廻し、鵜の目鷹の目で居た處、高田屋嘉兵衛が觀世丸と云ふ手船に乘り込み、國後の役所を指して漕ぎ行く途中、文化九年八日十四日不運にも出遇つたのが利格兒吐の軍艦。ソレと云ふ間に露西亞人は追ひ縋つて、鐵砲の釣瓶打、嘉兵

衛方の水主揖取は狼狽へて、船底に匿れたり、海中へ飛び込んだり、遑ふ〳〵の体で、船の上に突立ちたるは嘉兵衛一人、最早観念して眼を閉ぢ、敵の爲すがまゝに任せました。露西亞人は二三十人觀世丸に乘り移り、銃劍を打振りながら嘉兵衛を押取り巻き、何やら囂々罵りて繩を取出し、捕縛せんと掛くを、嘉兵衛は血走しる眼を瞋と見開き、先に進んだる敵を四五人突き倒しても、多勢には敵ひません、殘念ながら手を束ねて生捕となりました。露西亞人は更に船底に潜み匿れたる水主楫取を悉皆縛り上げ、觀世丸を自分の軍艦に曳き附け、何處ともなく漕ぎ行きました。此時嘉兵衛の心中は如何でムりませう、諸君嘉兵衛の身になつたつもりで考へて御覽なさい。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

觀世丸の乘組人員は都合四十六人ありましたのが、捕縛された者は嘉兵衛を始め三十六人、他の十人は狼狽て海へ飛び込み、其まゝ鮫鯨の餌食となつて了ひましたが、これだけでも如何に怖ろしい騒動であつたかと云ふ事が分ります。然るに嘉兵衛は神色自若、平生の通りで、其沈着方は恐れ入つたもの、滿身渾て是れ膽とでも申しませうか。先年星亨が殺された時、泰然として腰を拔かしたと面白い事を申した先生とは、泰然の度が雲泥の相違でムります。先づ以上の話で嘉兵衛が露西亞人の捕虜となつた理由も、大概御了解でムりませう。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

利格兒吐は嘉兵衛を生捕にしても、元來敵意を挟んでの事でありませんから、ヂアーナ號の船室へ乘り移らせ、縲紲を解いて、奪つた刀も返し與へ手を取ツて上座へ請じ、恭しく菓子のやうなものを侑めて、何やら熱心に話し懸けますが、語がさッぱり通じません。これには流石の嘉兵衛も閉口致しましたが、先方も焦燥ッたくなツて、

利「國後……」

元老尹「……」

松前「……」

と繰り返し〳〵、首を斬られる眞似をしたり、眼を閉ぢて死んだ態をして見せるので、ハヽア是は元老尹が殺されたかと尋ねるに違ひないと勘付き、否々と首を振り、飯を喰ふ眞似などをして、生きて居る事を示しましたが、利格兒吐は猶半信半疑の顏色。嘉兵衛も今はと舌を出して指しながら、萬一我が語に僞りありと思はば、此刀にて此首を切れと、仕形を以て說き示し、果は力を拔いて利格兒吐の手に渡し、自ら頸を差伸べ、此處〳〵と撫でゝ見せましたので、利格兒吐は稍其意を悟り、少しく安心の体。又其白刃を見詰めて、鋭利の程合如何と、感歎の風情に見えました。併し双方言語が通じませんから途方にくれて、暫く睨み合ひの姿でムりますが、以心傳心とでも申しませうか、利格兒吐も嘉兵衛が物に恐れぬ不敵の面魂理非分別のある男と見込みを付け、嘉兵衛も利格兒吐が温厚の長者にて、害心なき有樣を見て取り、自から禮義も正しく、三日計りは例の仕方話に日

を暮しましたが、八月十六日利格兒吐は一先國後を引揚げ、東察加のオコックへ向けて出帆の用意を致し、嘉兵衛を始め四人の生捕を連れ行き、其他は上陸させて追拂ふと云ふ事でムります。此時嘉兵衛が國後出張の役人、奈佐瀬左衛門の手許へ送つた手紙は左の通り。

乍恐申上候、私儀エトロフより當月七月出帆仕り、風筋悪しく水晶沖に風待仕候處、エトロフより急御用狀有之候に付、御地へ差上可申と相心得、昨日當地へ乘掛候處、異國船見請、沖へ廻り候處、風筋なく、圖合船に異國人乘組、船へ鐵砲打掛け、水主場所稼ぎ方、都合四十六人乘組居候處、私儀も大勢の人を載居候故、色々工面仕候へ共、きれ物飛道具も無之、水主稼方の者共大きにうろたへ、海へ飛込み、船に収付候ものは助けられ候へ共船を離れ候者は水主四人、稼ぎ方六人見え不申、扨て何共申上方無之、昨日より私も異船

へ乗り、色々相尋ね候へ共、一向相分り不申候、迚も私儀は先づ返し不申候様相見え申候此上は御國恩と存じ餘り騒ぎのなき様仕度候委細の儀は水主の者へ申聞置候（下略）

八月十五日　觀世丸にて高田屋嘉兵衛

さて此手紙を讀んで見ると、御國恩と存じ餘り騒ぎのなき様仕り度との一言は、實に千萬無量の思ひを籠めたもので、フオストーフ事件以來、日本は露西亞を敵と見做して、數年の葛藤組んで解けず、何の罪もない哥老尹を生捕にして、獄中へ繋いで置くなどは、隨分無法な遣り方で、只今なれば忽ち國際問題、向ふから問罪の師を差向ける騒ぎで厶りませう。これに就て何かの行違ひがある事と嘉兵衛は考へて、自分が今度露西亞へ捕はれて行くのを幸ひ、其處を十分説き付けて、兩國の感情を和らげ、無事太平になさんとの心、むづかしく云へば樽俎折衝の大任を一人にて、仕遂げやう。これが國家へ對しての義務と、其頃の日本人としては、頗る進歩した思想で厶ります。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

いよ〳〵出帆と云ふ間際に、後へ殘された水夫共は嘉兵衛の身に取り附きまして、

○『且那を異人に渡して、後でどうされるか心配でなりませんから、私も是非お供を致したいもので、故郷を出る時から、生死は且那と一ツにするつもりで居りましたから、何と云ってもお別れ申す事は出來ません。

○『さうとも〳〵、私もはア且那のお供をお願ひ申します、

と多年嘉兵衛が慈悲深く、恩を掛けて召使つたのでムりますから、放れるものはありません。中に吉藏、金藏、半藏、文治郎四人の者は、嘉兵衛の身体にピタリ密着いて一寸も放れず。據ろなく此四人を連れて行く事になり、後はそれ〳〵云ひ聞かせて、上陸させましたが、一同別れを惜んでオイ〳〵と泣き出した。北海の荒潮を乘切つて、

熊や鯨を手捕にでも仕やうと云ふやうな野郎共が三十人以上涙を流して泣てる態はどんなでムいましたらうか、想像したばかりで可笑しくもありますが、又其主從の恩義を察すれば、今日の如く人情の輕薄な處に比較すれば感心なもので厶ります。殊に四人中の吉藏と云ふ男は、航海中病氣に罹りて、身体も自由に利かないのに、何處までもお供をすると云つて、とう〳〵嘉兵衛に隨いて往きました。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

ヂアーナ號は嘉兵衛主從四人を載せて國後を出帆したのが、文化九年八月十七日、其頃は露西亞軍艦も帆船で厶りますから、凉船のやうに早くはありません。九月十一日に漸く東察加半嶋のペイトルックと云ふ港に着きました。此港は北緯五十三度五十八秒、東經百八十三度四十三秒、露西亞の船舶が始終輻湊し居る處で厶ります。嘉兵衛主從は此處に囚はれて其冬を越しましたが、目に見ゆるものは峨々渺々たる雪山氷海、非常なる艱難辛苦を嘗めて、日露兩國の感情を融和し、恙なく日本へ立歸りました技倆と度量は、今日外交官として諸外國に差遣せば、如何なる働きを現はすかと思ふばかり。本誌は元來讀み切りの筈で厶りますが都合によりまして、面白くもありませんが先づ嘉兵衛が露西亞の捕虜となつた來歷を申上げ、次號に壯快無比の大活動をお目に懸けますから、どうかお樂しみに……。

寫眞を募る

本會は本誌掲載用として、左く

（一）各地方中學校及び同程度學校の寫眞（二）各地方歷史的古跡及び特殊風景の寫眞（三）各中學校々友會各種運動部最近情況の寫眞

等を勢る。但し、寄送の寫眞を掲載せる本誌は寄贈者に無代價にて進呈す。

三五日記

村山鳥逕

（八月三日午後九時認む）

時々地が濃霧に被はれて空が見えぬ事のあるやうに、人にもむしやくしやする陰鬱な折があるもので、さういふ時には物事が平常と差つて唯面白くなく、前途が充らないやうで世には神佛もなく萬事悪い事だらけに見える。

自分は昨日一日をさういふ不快な境遇に過した、下町邊を散歩したが依様悲觀的に流れて元氣もなく歸宅したのであつた。

其散歩して居る間も先づ見亘した處、常には誇つて考へて居た文明と云ふものが、今日に限つて罪悪の根元のやうに思はれて了つた。其中に未だ通つた事のない小路へ這入り込んで居たが、實は無意識で氣が付いて見ると自分は貧民の誕生し成長し而して死んで行くその怖ろしい家の並んで居る最唯中に彷徨して居るのであつた。家の壁は永の年月の爲に穢く顳病患者のやうに剝げて居るし、窓からは汚い衣物が干しに出してある、臭い泥溝は毒蟲が爬行るやうに家の前を圍つて居るのである、自分は此を見て唯憂愁に胸を衝かれて大急ぎに急いだ。

少し往つて我知らず自分は歩を停めた、と云ふのは病院の前で今しも一個の死骸が其の最後の住居なる墓場へ葬式もせず勿論行列も立てず見送人さへ附隨せずに早桶で舁出される處なのであつた、まあ此人には友人の一人も會葬する人がないのか――でもボインター種の犬が一疋前に行くから強て云へば此が其の唯一の會葬者でゝもあらうか。世人は此人を棄てゝ顧みなかつた、活きて居た折も死んだ今のやうに構ふものは居なかつたらう、然らば人世社會の大戰端の中に在つて、如何なる方面に彼は服役したのであらうか。

兎に角社會なるものの一員が、全で風に吹散ら

さるゝ木葉のやうに消え失せて了ふ、これでも堂々と人類の社會と稱ふ事が出來るのであらうか、など、思つて少し進み行くと、

その病院の近所に兵營がある、其の前まで來た其處ではまた門前で兵卒等が情で與れる殘飯を、老人婦女子供等が爭つて奪ひ合つて居る、自分達も毎日其日に追はれて居る方だが、彼等は其又我等から哀憐を受けて何か貰はれなければ生きて行けないと云ふ譯であるとは、惣云ふ不幸な人々は神の兒等である一般人間の受ける事と極まつて居る苦勞の外に。寒さや饑渴や屈辱に忍ぶなどと云ふ辛苦に堪へなければ成らぬ。さても不仕合な人界の公衆ではある、此ならば寧ろ巢の中の蜂或は地下に都府を造つて居る蟻等の方が、人より餘程優つた有樣であると云はざるを得ぬ。

噫、人には道理が判ると云ふそれが何の益にたつのだらう、蜂や蟻と比べてさして賢くも幸福にも見えぬ、それで何が高遠な才能の御利益だらうか、我等人間はいつそ喜樂さうに見える、空中を翔る鳥類と、生涯を交換ることが出來ぬものだらうか。

名高い譚のフオイヤア、ブレトンの中のマオが饑渴に逼つて死ぬ時、鷲が果實の生つて居る木で啄むのを見て聞つた事が肯綮に當つて居るやうに思はれる。

「吁あの鳥の方が非督教徒など云ふ者より餘程仕合である、先つ宿も要らぬし屠牛者も麵麭燒も植木屋も要らぬ、彼等の裡に神の國はあるのである地も彼等にこそ盡さぬ饗應處であるし小い蟲は獵獸草原は殼田薇蕾の實や山楂の實は自然の果實を貯へる場所である。それに鳥は値を聞いたり代を拂つたりしないで何處から何を取つても關はぬ權利があるのだ、それだから那麼に樂しさうで一生涯ひ暮すのである。

惣鳥を羨んでは見るが、實際は人間だつて本來から云ふと鳥と一般に樂しくあるべき筈で、地は

依様彼の前にも永久の饗應場を開いて居るのである。それを人が國家を造ると云つて利巳的な而も不完全な交通で段々惡くして了つたので、それより各自が天然の豊饒な懐に歸つて其仁慈に預り平和と自由の裡に生活した方が甚麼に好いか知れやしない。

（八月十日午前四時）

黎明の空は我が寢室の帳に薄紅く射して、颯々と吹く輕風は下庭の花の香を齎らす心地よさ、自分は窓に靠り掛つて、起きたばかりの一日の新鮮な爽快な氣を吸込んだ。

平常自分の眼は花や囀る鳥や日が射して居る根家を見亘すのであつたが、今日に限つて隣と此方の家の境にある練塀の端の處へ目を停めた。何日かの嵐で漆灰の塗てあつた頃は壞れて了つて、その缺損した處へ風が埃を塡めると雨が其を固めて其所へ草が生へて居る、丁度遠くから見た山の畑のやうで、麥も挺然つとして有繋に黄い頭を垂れては居るが病穗に成つて立つて居る。

此の麥の收獲は隣の雀共が頂戴するのであらうと思つて居る中、自分は今や鎌で刈られて居る豊穰な麥の收獲を考へ出すと、引續いて其昔自分が子供の時に故山で畔を飛跳ね廻つた樂しさを回想するやうに成つた、連枷で稻を打つ音が其所此所の農家の禾場で聽える、外面には黄金色の實成者を滿載した車が何處の道路にも往かふて居る、今だに思出すのは田舍娘の俗謠年寄になつても氣の若い老爺掛けかまひのない陽氣な壯郎などでその時には皆較べ得意な氣の立つた樣子が見える。一番終了は此の收獲を與へ勞働の酬を下した神に感謝を捧げるのであつた。だが皆の衆は自分達が世界にて誰彼の差別なく勞働せねばならぬその勞働の神聖とか威儀とか云ふものは當人一向夢中で知らないらしい、唯もう刈つた麥の山なすのを見て得意に「我々を地球上に養育してくださる神樣には初穗を上げるのだ」と謂つて居る、やうに見え

るのであつた。

如何にも不思議な秩序が人間活動の上に制定されて居るではあるまいか。農夫は其地を耕耘し衆人日毎の糧を作り、職工は衣服にとて機を織り、鑛夫は鶴嘴で鐵や其他の金を堀出し、兵士は敵に當り、裁判官は法律を適用して紛擾を裁斷さ、稅關吏は公法に準じて隱蔽物の有無を檢閲し、商賈は遠國に迄出掛けて交易をする、學者美術家は蒸氣と云ふ瀛體がレールの上の巨大い列車を動かすやうに物質世界を引ばる理想の行列に又新しい馬を毎日乘入れる。悉も分れ〳〵に成つて居るやうだが、此が又一殘らず輔け合ふので、各自の勞働は自分は申す迄も無く全世界をも益して、點々の間に社會の各種の者に其結果が配合されるのである。

此の配合法が若一誤つ時は、假令ば或る獨立獨行し得る人にして其所持する才幹を發揮運用せずに居る等の事があれば、其損失は其人一人に止まらず全般の上に被さつて、あるものが無くなつたと同じ結果になる、細民とても依様社會の一人で其地位に居り其働を爲し又其の地位と働との理由も然る可くある譯なのである。

生れた儘の自然の有樣で人の行つたら何も出來るものでは無い、自分の勝手にして小成に甘じ什麼でも好いと放擲して居た日には誠に充らぬ話で、萬物は人間の財產には違ないが、其に手を附けて不完全な處を改めて行くのも人間の所作である。であるから天禀の力を利用して凡の障礙を取り、好機を利用して何か爲なければ成らぬ誰も一個人の爲には草を刈つたり製造したり戰爭したり考へたりしてはくれない、働かぬ者には誰も關はつて居るものはない、つまり那麼者は自分の力と云ふ單位に自分の力と云ふ仝じもの、即ち働かない零を乘ずるやうなもので、利巧な人はその中に仝じ單位へ社會全體を乘つけてどし〳〵進歩發達して行くのである。

が然し自分は何日も社會の欠點と云ふ事は嫌厭

に堪へない、その意味から利巧な人が癪に障つてまあ野蠻人の生涯を羨望んで居る方だ。それも自分の性格が病的な爲でいもあらう、常に偏見を持つて居て、雲が出れば雨日が照れば晴天と云ふ風に物事を判斷する事が由來性に合はぬらしいのである。

文明の世に起る事柄は、事實人をして野蠻の生涯を羨ましむるに足る事ばかり不幸苦楚を以て滿ちて居るではないか、我等は斯かる凶惡奸智を生出さしめ之を益々增加せしめんとする社會を惡まざるを得ない。然し彼の女子供が兵士から殘飯を貰つて居たやうな、那麼事は砂漠の中でも先づあれ以上の合力と親切は受けられまい。彼の死人だつて引取手もない者を病院で早桶を拵へてやり埋める爲には下等でも墓所を當がつて遣つてある、さもなければ洞窩の獸のやうに死ねば死に放しで葷の餌に成るのが落着位のものだ。社會の同情と云ふものは一番窮して居るものに配分されるのすらまあ這麼事位なものである。誰だつて他人が人の爲と思つて作り又捲たパンを喫べて生さて居る己は人樣の御世話にならぬと威張つては居られぬ筈だ。だからでもあるが最貧窮の者は其人の力量で使ふ分として制限されて居る以上に社會から貰がれて居る。

だけれども、社會はそれ以上に何にも人には賦與しないで宜いのであらうか此には誰も疑なき能はずであらう。確に勞働と勞働者の此の配劑は過誤に陷つて居る。時代は漸々と其を改めては行くだらう新しき光明は何とか其間を調和して社會の形成者を他の物を改良するやうに完全の域に導くには相違ない其時に當つて我等の困難と云ふのは早やる我等の心を徐々として而も何かしらん危機を其行程に伴うて進む時世と適合させると云ふ一事である。

（八月十四日午前六時）

自分の住つて居る天井の部屋の窓は、物見梭の

やうに家根に切つてあるので、下の塊は兎迄鉛板で殺うてある、其が日つ切なしに暑さ寒さに曝されるのであるから凹凸になつて、爲に裂罅が右の角に入り掛けて居る、其所へ恰も雀が巢を喰つたのであつた。

自分はその初から爲す處を觀て居た、鳥は始終巢だの苔だの毛などを運んでは寓所を築くのであるが、其の堅忍能く難業に堪へる勤勉を驚嘆したのである。儲て築き上つてから何を爲るかと見て居ると、先づ新來の我が御隣さんは一日の間庭の白楊に飛交ふたり桶の側で囀つたりして居る。美しい貴婦人の生涯が只だ此鳥と能く一致して居るやうに見えた、が然し一朝雛を生まねばならなくなつて、その際家を預め備へる必要の起つた時から今迄の怠惰者は非常な働手に變化して了つた、もう前のやうに安逸放寬に身を置かず、常に降つても照つても飛ぶか物を持て來うかして休まない必要と云ふ事の力如何に大なる哲である。自分等は働に就て此鳥に負債があると思ふのは末で寧ろ其德に於て彼女に負けて居るやうに迄思はれた。

彼の古昔氣候の餘り良くない土地に在た民が絕にす活動して他國民の首坐を占むるやう一頭地を拔いた所以も、外ではなく必要から來た事であらう、其民は天然の物產も餘り無いから勢ひ勉勵して供給に對する需用の製作を講ずる必要があり、その必要が理解力を高め、忍耐力が先見力を強うするやうに成つた。然るに其間他の民は天日を悅び地の恩物に鼓腹し此の材料を什麼すると云ふ考もなくうかうかして居て、遂に貧しく才智なく且つ裸躰の儘で取殘されて了ふ、片方では地の產物を作つたり、氣候の變異を防ぐ建物を造つたり、体軀を温める爲に動物の毛で衣服を製つたりして畢竟勞働が益々勤勉強壯になさしめ、自働の結果爲に敎育されて、時候の良い國民が未だ動物と差して遠くない境遇にまごついて居る中、此方は受造物進化の階級の益々高貴な地位に進んで行く

のである。

自分は鳥が働かなければ成らぬやうになつてからと云ふもの、その本能が益敏捷に成つて來たのを看て、這麼事を思つた。其中に巢が竣成つた、すると鳥は其裡にちよこんと坐つて了つた、自分は尙ほ其後什麼風にするかと注目したのである。

卵を暖め初てから間もなく雛が孵つた。それを養育する母鳥の苦心經營誠に驚入つたもので、自分の窓の邊は世の父たり母たる者の子を育つる道を學ぶ恰好の教習所と謂ても宜い位である。雛鳥等は巍て大きく成つて、丁度今朝巢立をしたのである、處が中で一羽弱いのが居て家根縁を跳傳ひする事が出來ず溝へ落ちて了つだ。自分は可哀想に思ひ漸く捉えて巢の前の兎の處へ置いて遣つたが、最早母鳥は見向もしないと云ふのは此母親は一度家族保護の任を脱了しても宜いとなつて既に此からは思ふ儘に木の中でも家根の上でも勝手に飛跳ねやうと云ふ場合に成つたのであるから、復び此雛一羽の爲に世話は燒かぬのらしい。自分は母鳥が此雛ゞ掛念して何とかするかも知れぬと、窓から出して遣つたが無益だつた。雛も悲嘆の聲を放つて母を呼んだが無益だつた。平氣なもので母鳥は謡つたり羽刷ひをしたりして居て目も呉れぬである。唯父鳥と思はれるのが近間迄遣て來て、輕蔑するやうに眺めて居たが直飛去つて還つては來ない。

自分は麵麭を細に碎いて此の孤兒の前に投つてやつたが、まだ嘴で啄む事さへ知らない、今度は捕へやうと手を出すと、空虛に成つた巢に跳込むで了つた、若も親鳥が那の儘で還らなかつたら此の雛はさて什麼なるだらう可憐なものではある。

（八月十五日午前六時）

今朝窓を啓けると、兎の上に彼の小鳥が死んで居た。傷から考へると邪見な母鳥が巢から啄き出したに違ない、自分は拾ひ上げて無駄とは思つたが息氣で温め遣つたが、呼吸は停んで目を瞑つて

翔は縮が無くなづて了つた。自分は此迄と思つて家根の上に日に曝した儘上せて置いて、氣持が悪いから窓を閉ぢて了つた。生命が死と戰ふ處は常に何か陰鬱なもので此は吾等への一の教訓であると思はれた。

恰も其時廊下に足音がした、きつと隣の人だらう、又來て自分の思想を擾亂させられる事かと思つた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

門番の女で水夫をして居る息子から手紙が來たのを自分に讀んで貰ひ且つ返事を書いて貰ひたいと云つて來たのである。來た手紙は自分の日錄に留めて置ふと思つて寫して置いた、這麼風で。

親愛し奉る御母上樣へ、前便已後何の恙も無く消光罷在候、唯だ前週の事にて餘程旨く扱はざれば大粗相可致きボートと共に溺れんとする處に有之候ひし若し近邊に小船無之砌には溺れ申候やも圖られず候事有之候、それのみ少しく變事と申せば變事に有之候。其折風激しく候て私水に陷りし時船長は既に沈み掛け居られ候、其故私は義務と存じ船長の後を追ひて、三度沈み候へ共漸く表面迄救ひ上げ申候、私共の船中に還り候て後初めて船長は正氣附き、士官に爲さるゝ如くに私の首を抱いて喜ばれ申候、其時は却て私の方が嬉しく存候が、其のみならず船長を救ひ上げ候事が私の性質善良なる事の表白なりとて、必ず一等水夫に昇任致すに相違なしと一仝申居候、其を聽くと直ぐ私は御母上樣も此からは一日に二度咖啡をあがつても困らぬ身分には成なされたと心中に叫び申候此は事實有の儘にて候。くれ〳〵も御保養被下私の爲めに御盡し被下る爲には御自分が御丈夫になされ、私の方にて少しも御母上樣の事を懸念しないやうにして戴き度奉願候　ジャック

次の日は門番女の返事である。自分が代書をしたので。

御身常に御障りなく、相も變らず御多祥、御壽

て申候ものを辱むるやうな事も成さらず御服務の段別して御目出度存候、此上御身御自愛なされ候樣改めて御注意申上候はずとも疾くに御承知の事と存上候。若し御身なければ此の母は墓に入り候方寧ろ望む處に有之、生命には別段制限は無之候へ共、生きて居る間は義務に拘泥せずば相成らずつまり生命は我等の勝手に相成候へ共義務は隨意に破壞致候事も出來難く候。

私の健康は變動先づ無之、御身を心配させる事を怖れて年寄申さぬ積に罷在候、私には何も欲しいと申すものも無之、貴婦人のやうに暮し居候。今年は少々貯金を致候が、手簞笥の抽斗破損み居候まゝ貯蓄銀行に預け、預け人の名は御身のに致置候、御身御歸りなされ候折は御隨意に御引出しに成るべく候。麻の胸當を三枚と短袴を御送り申候間御落掌相成度候。

御身の友人等は皆健康に暮し居候、唯從兄が死去致候、貧苦の中に寡婦一人取殘されしその心根

察候時は誠に不憫の至に候、其故御身よりの香奠と申し御身の三十フランクを贈り候處、彼女は朝夕祈禱の折御身の無事を祈るべしと申し大悦びに有之候ひし、その金はつまり見えぬ貯蓄銀行に預け候樣なものにて、決して無益な浪費には無之利子は我等の心に拂込され申候。時々御音信被下度、常に神の事と私の事を御忘れなさらぬ樣念上候。

フロサン、ミロ

善良な息子に慈深い母親、麽麽のを見ると人間の愛と云ふ事を深く感ぜずには居られない。時々架空の憤世說を激動させて、野蠻人の運命を羨んだり、鳥の生活を嫉んだりして見るが、又公平に觀察するとそれは逆說であると思ひ返さずには居られぬ、我等は人間の性格が善惡混交して居て、善の方は氣が附すに看過すが、惡が時偶意外に我等の目に映つる者だから迷ふのである。萬事まだ完全の域に達して居らぬのであるとすれば何物でも到底回復の見込なしと投出す程の惡事は一も無い筈

である。社會の惡も大したものだが亦心靈上の大業もその中に何れ程活動して居るであらう。道德界が物質界を救濟して居るのと云ふ事も非常なものである。

萬物の中で人が靈長であると云ふのは思慮を盡す愛情と犧牲獻身の精神にあるので、我が窓邊に子を養育した母鳥は、天然の鳥類保存の法則に從つて必要な時だけ愛護したと云ふ迄の話、唯本能に從つたので靈性的に慥しやうと考へた譯ではない。それだから天則通りに仕事を果すと、荷を下ろされたやうに義務行爲を擲つて、復び自分勝手な氣儘を遣り初める。處が之に反して水夫の母親を御覽なさい、生命の限り働いて子の爲めに骨を折り、死後の事まで氣に掛けて自分のした事が子に殘るやうに苦勞して居る。

慥く愛情と云ふものが我等をして萬物と全く異つたものたらしむるので、我等は依樣不朽の者として此世に生れし身の幸を感謝せなければならな

いのだ。他の受造物は唯互に種屬を繼續して行く丈であるのに人類は獨り己れを永存せしめて行くのである。

（この日記は巴里のアッチック、フイロソフアーの日記を、その意に從ひ和げしものなり）

通信

●商工學中學校の情況　當校は東京市麹町區大手町に在りて宮城の東部に位し生徒總數六百餘名に御座候拾參學級に分組し補習科も有之現在職員は貳拾五名餘外に雇員五名程有之候去年十月校長當松榮三郎氏辭任なされ現校長大脇瑛之助氏を校長に任じたり生徒の大半は商工業家の子弟にて卒業生は高等商業學校或は高等工業學校へ多く入學するを見る運動部は熱心なる有志者庭球會を組織し居れり時々修學遠足會の催し御座候

（商工中學校生徒　鈴木宗一）

蝶蝀の風車

大塚素江

すべて、小供さん達は、東京でも地方でも異りのない、おどけないもので、別けて地方の小供さん達は、一層おどけないかの様に思はれまする。つきまして、澤山をかしい話柄があります、茲にお話し仕ようとするのは、中でもをかしかつた其のひとつで、現在側に見てゐた私ばかりでなく、何所の小供さん達にも亦、をかしいお話であらうかとおもはれます。

私が病氣で地方へ歸つて在つた頃、常住氣任せにぶら〳〵遊んでゐて、保養ながら釣魚ばかり唯だ一つの娯樂にして居りましたが、夏の或日のこと相變らず釣竿と餌箱と魚籠とを提げて、午時過から鮒釣りに出懸けて往きました。

往きました先きは、「龜や杜」と申します所で畑地と礫原との境の廢河の岸に、丁度饅頭茸というて蓋を拵つてとるとぽツと烟の様なのがたつ、其の茸の蓋の様な形の、こんもりした小山があつて、其の麓の下が直ぐに淵に成つてゐて、奇麗にされた白けた突兀した大きな岩が、彼方にも此方にも突き出てをります。往古は小山を中にして、河水が繞つてゐつたそうですが、現今では、瀬が變つて、ほんとの河身は一町ばかりも西の方を流れて此所は只だ、さら〳〵小河の落込みに成つてあります。扨此の小山は、むかし〳〵大洪水が出ました時、六里も上方の南から流れて來て、此所に留まつたといふ、面白いお話がありますが、其れはまづお預りにしておきませう。

西の方は、一里ばかり離れて、可なり大きい高い山が聳つて在つて、北へも南へも餘程の間擴がつてゐまして、峯の上にも、溪間の所にも、ふはふはした白い雲が引懸つてゐる様に浮いてゐまするし、遠い西南の方には又、富士山よりも雪の消えない、ぎくしやく尖つた高い山が白くなつて見えて居まするし、東の方は、二三町も隔つてゐませうか、所々に松林のある雜木山が矢張北と南へ臥てゐる様に延ばへてゐまして、其所から鶯が飛んで來るので、此所の小山の邊では、何時でも法華經と囀つてるのが聞かれます。

ほんに景色の佳い所でありますから、遊び半分の釣魚には、此の上もない結構な場所、可なり雜魚も釣れるのでありますが、其の日は又間がわるくて、西の山からお猿ちやなかつた、ぶう〳〵大きな風が吹いて來て、淵には浪が起つて、ざぶりざぶり岸へぶつゝかりますので、釣りすることも何うすることも出來ませず、詮方なしに釣竿擔いだまゝ、呆然西のお空を眺めてゐましたが、なかなか風は止んで呉れず、向かひの磧からさらつて來た砂塵がばつと眼の中へ吹込みますので、正面には向いても居られません程でありました。

けれど、小鮒一尾釣りも仕ないで、すご〳〵皈るのは、何うも殘り多い様な氣がして、丁度幸ひ、

岸に擧いでありました小船を風の吹いて來る方へ横に向けて、水底へ深く棹突立て、船が風に吹き付られて推されて來ぬ様に、緊乎と結びとめ、辛つとの事でわゴかばかり浪の立たぬ場所を拵へました。

これなら最う占めたものと、よせといひまして雜魚を一所に寄せるものを、程よい水中へ撒布いてそして一服煙草吸うて、そろ〳〵釣魚に取懸かりました。

所へ、筒袖の單衣着た六才ばかりの可愛らしい小供さんが、すた〳〵駈けて來まして、「をぢさん、何釣るの、鮒釣るのか、どつさりゐるよ、宅のお祖父さんねえ、上手だから、何時でもどつさり釣つていくよ、而して家内で食べるの、兄ちやん大きいから大きいの、僕小ちやいから小ちやいの好きをぢさんどんなの好き。」と、なか〳〵のお愛嬌、

「をぢさんはね、矢張大きいから大きいの好き。」と笑つて坊ッちやんの天窓を撫てやりましたが、

大きいにも、小ちやいにも、釣れることか何うか、當なしに見張うて居りまする。

「フム、釣れるかしら、斯樣に風吹いてゝも釣れるかしら。今日はね、風が吹いて不可いつてお祖父さん止したよ。やあ懸かつた、浮標が搖いてるよね、をぢさん、面白いなあ、をぢさんも上手なのねえ。」と、私の側へちよこなんと蹲んで、浮標のひよこ〳〵するのを、かく〳〵と小首をひねつて眺めてゐました。

私は又、浮標の引きぶりが氣に入らぬので、坊ッちやんにも、ろく〳〵お愛想も仕ませんで、そろりと糸を引き上げますと、さあ何が懸つたと想ひますか、鮒か、鯉か、鰷か、なか〳〵そんな物では無くて、背の黑い、腹の赤い、そして點々黑い斑があつて、四つ足がある、尻尾の長いやつが、きう〳〵鉢をひねつて上つて來ました。

「ヤア、蠑螈だ、〳〵、をかしいなあ、〳〵、をちさん變な顏してよ、蠑螈さらひ。」と、坊ッちやん

躍り出して、いやらしく顰めてゐた私が顏、覗く樣に眺めてゐました。

私は蠑螈は大嫌ひ、見ると惡寒がするので、大きな躰してゐながら、夫れを鈎から外すことが出來ず、「あゝ嫌ひなの、大變なやつが懸かつた。」と困り切つて、糸の先をでく〳〵はづまして、振り落とさうと仕ました。けれど、お客さん、なか〳〵外れて呉れません。

「をぢさん弱いのねえ、蠑螈なんか怖がつて。」と、坊ッちやん莞爾〳〵して「僕とつて進げますよ。」と、ちよいと摑んで、平氣で鈎から外して呉れました。

「難有うよ、坊ちやん、怖くなくつて。」と、私は謝辭いうて見てゐますと、一寸輕く點頭いて、彼のいやらしい物捨てようともせず、頭を撫でたり足を引ッ張つたり、尻尾を撮んで倒にぶら吊たり種々なまねして弄んでゐまする。

「坊ッちやん、眞個に怖くないの。」と、重ねて尋

ねますと、一寸首ひねつて仰向いて、

「あゝ眞個に怖くないの。昨日、ね、をぢさん、僕と竹ちやんとね、二人して蠑螈攫へて、お鼻の上に載はしてゐたの、そしたら阿母さんに叱られた。」と、愛くるしく笑つてゐる。

「其樣なまね仕ては不可せん、汚いから最う打棄てしまひなさい。」

斯う云つて私は、蠑螈のくはへた鈎はいやな臭氣が付いてますものだから、丁寧に洗つて、餌をつけ替へて、またつりに懸かりました。

坊ッちやんは、側に生へて在つた柳の小枝折り取つて、する〳〵と皮を剝いて、其れで以て蠑螈の首の所を縛へつけ、其の端を持つて俯はして居ます。

そのうち復、浮標がひよこ〳〵うごき始めたのを坊ッちやん見付け「やあ、復懸かつた、今度は鮒だよ、鮒でなきや鰷だよ、鰷でなきや鯉たよ、鯉でなきや目高だよ、目高でなきや……あの〳〵なあに、をちさん、速く見たいなあ。」などと、いろ〳〵數へてうはついて居まする。けれど、私は、些とも面白くありません、矢張蠑螈の引きぶりなので何う仕ようかと考へて居ました。

釣魚は、なれますと、鮒は鮒、鰷は鰷、と皆浮標の引きぶりで見別けのつく樣に成ります。蠑螈は又まるで別で、直物ひよこ〳〵一所で浮標をうごかして、深くも遠くも持つて往かず、釣つてしまはぬ間は、際限なしにいたづらして仕樣がありませんから、厭々ながら、思ひきつて釣り上げますと、矢張腹の赤いお客さん。

「やあ、復、蠑螈だをかしいなあ〳〵、をちさん蠑螈釣るの上手ねえ。」と厭な顏してゐる私には頓著なく、坊ちやん一人面白がつて、今度も亦鈎から取つて呉れて、矢張同し樣に、先きの柳の皮の片一方の端に縛し付け「そーら網曳たよ、網曳きだ〳〵蠑螈の網曳負けるな〳〵。」と皮を剝いた小枝で地べた叩いて追ッ立てゐまする。扨間の惡い時

は惡いもので、それから釣れるのも〳〵、不殘蠑螈都合二十と幾匹か釣つたので、私は氣持が惡うなつて、釣竿はふり出して萎げ返つてしまひました。

坊ッちやんは、又、氣根よく、せい〳〵柳の皮を剝いては縛し付け、剝いては縛し付け、一對づつのを十本から拵へ、それを一束にして、眞中の所をひと搦み緊乎結へて放しまする、放された蠑螈は、一匹づゝ別々の方へ向いて、四方八方へ匍ひ出して引張り合ふ、首の所を縛し付けられてあるから、躰がくらりと横に成る、そして横に廻り始める。

「面白いなあ〳〵、今度は蠑螈の風車だよ。やあ引つくら返つた、赤い所と黑い所、黑い所と赤い所、美しいのねえ、をぢさん。畜生、此方へ向いちや不可い、風車が破れるよ。そーら其方へお廻り、あらまた引つくら返つた、また此方向いた、仕樣がないなあ、畜生〳〵、叱ッ〳〵。」と直して

も、叱つても、さうは蠑螈も云ふこと聽かず、勝手次第氣の向いた方へ入り違ひ匍ひ廻るので、澤山の柳の皮がだん〳〵錯雜にこいらかつて、胴中や足などへ搦まり、横に成つたり、仰に成つたり曳摺られて切ながるのもあれば、又、滿足な奴は平氣でずん〳〵引ッ張り立てるから、猶更手の付けようがなくなる。坊ッちやん、とう〳〵遣り切れなく成つて、「仕樣がないねえ、をぢさん、直して頂戴よ。」と、でちや〳〵に成つてるのを、だらりと擧げて、私の所へ持つて來ました。

「やあ、坊ッちやん御免よ、こればッかりは降參だ。」と眼を圓くして飛びのきまするとと、

「さうだッたの、をぢさん嫌ひだつたのねえ、仕樣がないなあ。」と、しんこ細工の筍の樣なくりくりした指して、ちよい〳〵なぶつてゐましたが、

「風車に成らないんだから、打ッ棄てしまはう。」と惜そうに、ざんぶり淵へはふり込み、ぽんとして立つてゐました。

河原にがや〳〵集つて來た小供さん達、同じ年比のが、かれこれ二十人ばかり、此方向いて、「新ちやん、新ちやん」と呼び立てまする。

「あーい。」と返事して、「をぢさん、仲間が來たから僕最う往くの。」と、お辭儀する坊ッちやんの天窓撫で、

「坊ちやん、新ちやんていふの。」と尋ねまするとと、

「あゝ、新ちやんだけどもね、眞個はね、新吉。」と云ひ捨て駈けて往きました。これからが「びつこ隊」。

通信

●函館英語學校の情況　本校は校主荻田吉二郎氏、教師大島經男氏等の非常なる熱心の結果　漸次盛大に趨き、目下のところ地方英語學校としては最も完全なるものと相成り申候、また此の度學生品性の陶成と學術の補習とを計らんとて本校内に同志會なるもの設立致され、毎月小集會を開きて會員の修むるところを論述し、且つ趣味の涵養を計り、毎年二回册子『紅苜宿』を發行して本會の趣意を述ぶることに相成り候間、則封同册子一部御會

へ御送り申上げ候間可然願上げ候先は右申上げ度匆々

（函館英語學校　T　O　生）

●日本女子大學の情況　わたくしは本校下級の一學生で御座いますが、本校が校長をはじめ諸賛助員、諸先生等の熱心にえつて、ます〳〵盛大に趨きますのを、まことに嬉しく存じて居ります、殊に大學部家政學部の如きは澤山の生徒が入學致して居りまして、仲々盛大で御座いますが、それに引きかへ英文學部には割合に生徒の少ないのは何ういふものであらうと思つて居りますが、しかし近いうちに英語の先生が英吉利から新らしく、いらつしやるそうですから、そうしたら本部も盛んになるであらうと、わたくしはそれを樂しんで待つて居りますのです

（日本女子大學　うめ子）

●曉星學校講演會の影況　本月九日當校内に於いて賞品授與式幷びに餘興として文學講演會開會致され申候、開會は同日午後二時半、君が代の合奏、勅語奉讀にはじまり、小學部生徒の英語講演、ヴヰヨロン彈奏、佛語唱歌、佛語會話、中學部生徒の佛語講演、ヴヰヨロン獨奏、國語講演等あり、右終はつて後、小中學校生徒へ賞品授與これありしが、同日は佛國公使をはじめ諸學校長、教授、生徒保證人等數千人の來會あり、盛大を極め申候

（曉星中學校生徒　フーレー）

『金』に就いての話

伊藤秋南

私はこの『譚叢』の欄に實業に關する多趣味にして且つ有益なる談話を叙述する責任を負ふことになりましたこれは自分に採つては甚た光榮と思ふのであるが繰つて考へるとこれは非常に困難な仕事であると思ふこれが小説であるか美文であるかには行かないが其中に矢張寢食を忘れる愉快があるとか歴史的逸話であるならば隨分諸君をして愉快を感ぜしむるをも出來るであらうし又愉快の間に諸君の智識を磨き身を修むる一助となることも出來るであらうと信じます然るに實業に關することは其趣味が以上のもの丶如く一般的のものでないから強いて面白く爲さんとすれば其實業家の逸話失敗談などになつて終ふこれは一時人をして面白がらせ時に或は腹を抱へて笑はしむるの功はあるべけれどこれでは實業云々と謂ふことは全く客となつて躰のよい落語講談になつて所謂有益と謂ふことが全く留守になるのである故に實業上の譚叢

く謂へば經濟上の談話は容易に諸君をして小説戯曲若しくは美文と同じ趣味を感ずるように爲す理には行ないこと丶謂はなければなりません

然らは經濟上の話は全く無趣味のものであるかと謂へは必ずしも無趣味なりとは謂へません矢張一種言ひ難い面白みがある其趣味は到底太平記とか三國史とか八犬傳近松文集などを讀むと同じことと思ふこれが即ち理屈的趣味とでも名づくべき愉快があるのである彼の華聖頓であつたか幼少にして數學が非常に好きで常に問題を考へて寢食を忘る丶ことがあつて或る時難問題に出會つて如何に考へても解答が出來ない爲め非常に苦悶して居つた所が偶然街頭を歩きつ丶其解答を得思はず大聲快哉を呼び行人の笑ふを顧みなかつたと謂ふ話がある此の時の華聖頓の愉快は如何であつたか測り知ることは出來ないがこれは即ち理屈的趣味であることと同じ趣味は經濟上の譚に於ても感ずることが

多々あるがとても文學の如き趣味は得ることは出來ないこれは諸君が學問を研究し雜誌を讀むに當つて常に區別する必要があることであらうと思ふ又私が譚叢に掲ける實業譚も其心で讀むことに願ひたいのである此の『中等教育』の第二號に天野法學博士は經濟學研究の利益の一として經濟上の事柄に對して趣味を感ずるようになると講ぜられたが諸君はこれより經濟及び法制の講義を學ぶに從つて愈々實業上の話が面白くなられるでありませう故に私は可成眞面目な話を解り易く述べることに致しますけれどもこれはもと譚であるから其心して見られたし學理の講義に至つて本誌の講話に就きて研究することが必要であります前置が餘り長くなつたようであるが經濟とか實業とか謂ふもの丶譚は所謂理屈的趣味あるものであると謂ふ一場の談話であると思うて貰いたいのである

私がまだ小學校に通つて居つた頃であつた『金』と謂ふ問題に就き一つの疑問が起つた其疑問は極めて單純なもので今日世界で最も富で居る國は英國だとか米國であるとか謂つて日本はこれに比べては貧乏であると謂ふが何故大に金山を開掘して『金』を澤山に鑄造しないであらうかといふことであつた當時この事を頻りに考へて或る年長者に質問して大に笑はれ且つ謂はれた『金』ばかり鑄たとて富國にはなれない又そんなに金山が容易に掘れるものではないと其當時私は自分の思想の幼稚であるのに思い至らずして其説明の餘りに單簡であるのに驚いた然るに其後種々な話を聞き又書物に書いてあるのを讀んで少しつ丶其疑問の無意味なりしことを悟るようになつた殊に經濟學を學んで始めてこの間の理論を知つた今に至つて考へれば私は(一)『金』即ち國富であると考へ又(二)『金』に伸縮力あるをを悟らず(三)『金』の採掘には資本を要するものであることを知らなかつたのである即ち經濟學に論じてある財の如何なるものなるかを知らず『金』即ち貨幣は其性質上世界を通して均一

の價格を持つ傾を有し他の財に比して貨幣が澤山
あり過ぎる國では其交換の割合が安いから其國か
らは貨幣が他の國へ出て行つて其代りに他の財が
入つ來るし又反對に貨幣が他の財の割合に少ない
國では貨幣の交換の割合が高いから茲には貨幣が
入つて財が其代りに出て貨幣の價格が均一になる
丁度水が高きより低きに就いて其平準を保つ性質
があるが如く貨幣は低きより高きに流れるもので
あると謂ふ原則も知らないのみならず採金は一の
生產事業であつてこれを支配する種々の原則があ
るそれを全く知らなかつたのであるこれ等の原則
は一々說明すると中々長くなるがこれは經濟學の
講義になるから茲には述べませんがこれ等のこと
を知らない結果笑ふべき疑問が起つた理で今日考
へれば誠に抱腹絶倒すべきである然るに經濟史を
讀むと私が甞つて考へたことゝよく似て居る話が
出て居るから面白いのである
よく例に出す話ではあるけれど彼の青砥藤綱の滑

川で青錢を拾つた話があるこれは日本歷史の美談
であるから諸君は無論よく承知して居ることであ
るが彼のように賢明の人ではあつたが尙は『金』
は天下の通寶である一文たりともこれは河底に埋
沒してはならない我が過ちより水中に落したので
あるから拾はねばならぬ人夫を雇ふ『金』及び松明
を購ふ『金』は一度自分の懷中からは出て人の手に
渡るけれども天下に通用するので差支ないと思つ
て落した『金』より澤山の『金』を費してそれを拾は
せたのであるこれは今日まで歷史上の美談となつ
て居る成程其心事は美であるに相違ない自己の損
失を顧みずして天下の爲めを考ふるのは誠に德行
であるこれを落した『金』は少ないこの上損してはな
らぬと謂つて放棄する其心事に比較すれば藤綱
と謂ふ人の行ひは立派である然れとも今私が話し
て居る考へから觀ると藤綱はこの時に『金』即ち財
であるといふ考へを持つて居つて其思想からこの
行ひが出て來たものであるように思はれます若し

かく考へなかつたならは藤綱の如き偉德高き人で
あるからかくの如きことは爲さなかつたのであら
うかと考へるのである
試みに諸君考へて御覽なさい一文の錢を拾ふ爲め
に費した『金』は人夫及び松明を買つた人の手に渡
るから天下に通用するけれど人夫が働らいた勞力
と松明とは僅かに一文の錢を拾ふ爲めに費へて終
ふのではありませんか一本の松明一人の勞力でも
これは一文よりは多くの價値があるに定まつて居
る況して數本の松明と數人の人夫の勞力は餘程の
ものであるこれを他の事に使つたならば必ず一文
所ではない尙は澤山の財を天下に殖すをが必ず出
來たのに相違ない故にこれを經濟的に謂ふならば
青砥藤綱はこの一文をあのように大骨折で探が
すのを止めて其費用で他の生產的の仕事を爲した
方が國の爲めであると謂へるのである藤綱が若し
よく『金』は財の一部分であるが『金』獨り財ではな
い松明も財であると謂ふことに思ひ至れば必ず彼

『金』に就いての話

の一文は拾はなかつたであらうと私は思ふそれ故
に藤綱も當時彼の瞬間には『金』即ち財と誤解して
居たものである依つて一例として述べて置きます
然れどもこれは決して藤綱其人を嗤ふ爲めに謂ふ
のではなく又其美德を傷ふ爲めでもないかく謂へ
はとて藤綱が自己の利害を忘れて天下國家の事を
重するの高德は少しも損ふものではないのである
中世佛蘭西にコルベールと謂ふ宰相が出たこの人
は政治家でもあり學者でもあつて所謂コルベール
主義と謂ふ經濟上の主義を實行して大に名高き人
であるコルベールは頻りに佛蘭西の商工業を保護
奬勵し其製品を外國に輸出して澤山に『金』を集め
て佛蘭西の富を增殖しようとした、コルベール主
義とはこの事を謂ふので一名「マーカンタイル、シ
ステム」譯して重商主義ともいひます所がこの主
義は漸次に詮じ詰めると財即ち『金』『金』即ち財と
いふ考へと『金』の伸縮力を無視したことに歸着し
て終まふのであるコルベール程の偉人であつても

矢張時代の思潮には超出することが出來ないものであるかと思はれます今日では經濟の思想も大に發達し經濟學も進歩して居るので私が嘗つて思ひ付いたような疑問は直ちに一だ笑ひ傾せないことになるが當時は中々かく容易には解せなかつたのであらう

コルベールは佛蘭西を富強にすることに力を盡し內地の商工業を保護奬勵し其製造品を澤山に海外諸國に賣出さしめ『金』を澤山に取込むことを以て自分の政策としたそれ故に外國品を買ふことはコルベールの好まぬ所であつたつまり佛國の輸出を輸入より多く爲し以て物品の代りに『金』を得ようとしたのであるこの政策は勿論一概に之を非難することは出來ないが彼が自國の製造品を多く輸出して其代りに他國の製造品が入ることを好まず可成これを『金』で得たいと考へたのは明かに『金』即ち財といふ思想を抱いて居つたものであると思はれるこの點に於てコルベールも經濟學に說いてあります財の意義を誤まつたものといふ非難は免れぬものと謂はねはならないのである而かもこのコルベールが懷抱した思想は十八世紀の頃には佛國は言ふに及ばず其他西班牙獨逸和蘭等の諸國にも盛んに唱導されたもので西班牙なとは大に極端にこのコルベール政策を行なつた

コルベール及び其時代の人々が多く『金』即ち財と謂ふ考を持つて居つた話は今述べた如くであるがこの主義は唯だこの點だけの誤りではなく私が第二の誤りとして述べた貨幣の伸縮力を無視した人爲的に澤山の貨幣を國內に保有することが出來るものと考へてつ居たのである現に極端にこの重商主義を行なつた西班牙は一時金銀を輸出することを禁止した一方に製造品の輸出を奬勵しさらに米國から金塊を收集する政略を採つたのであるこれが爲め西班牙は一時は隨分世界の『金』を國內に呼び入れたがそれは其後漸次再び海外に流出して遂に之を抑留することが出來なくなつた如何にして

さういふ現象が顯はれたかと謂ふに內國の製造品を澤山に輸出して之を『金』に代へ外國品を買はない爲め『金』は增すが物品は增さないそれで『金』よりは却つて物品が貴くなつて物品の價が騰貴して來た同じ物品でも內國品は外國品よりは二倍も三倍もするといふ有樣になつて來たこうなると如何に法律で禁止した所でそれは別段役に立たぬ皆秘密に安い外國品を買ふそれで物品が澤山に入つて來る結果『金』が出て行く忽ちの間に『金』は西班牙に餘分であるだけ他の諸國に行つて終つてそれが物品と變つたのである

古今東西を問はずかゝる趣味ある話は澤山にあるのである靑砥藤綱の事蹟といひ又重商主義の話とて何れもこれは陳腐の話には相違ないけれども前に述べた如く『金』といふ問題に關して幼稚の疑問を持つた私が始めてこれ等の事實を聽いた時には非常に趣味多く感したので茲に一寸一夕の譚として諸君に紹介致したのである

『金』に就いての話

諸君が經濟學の講義で貨幣は交換の媒介物價格の尺度であつて其物自身財の一であると共に財は貨幣以外に澤山あるを知り又貨幣(金銀)は其價の安い所から高い所に移動して世界を通して常に其價の均一を保たんとする性質を有し一國には其國の交換に必要なる分量より多くを保藏し得ぬものなるとを知つたならこれ等の話は私が說明したより一層多く趣味あるものであらうかと信じます

次に貨幣の話で趣味あることは何れの國に於ても其名稱分量の差等こそあれ金銀が其通實となつたことである勿論社會の事物は各國其沿革の順序が自然に同一であることが多いがこの『金』がかく同一の發達を爲して居るのは甚だ面白い事であると思ふ各國の貨幣史を繙くと何れの國でも始めより今日の如き鑄造貨幣を使用して居つたものはない始めには其部落の生活に於て其効用の共通なるものが貨幣となつて居ます即ち農業を以て其生活を立てゝ居る農民の部落では農具の如き牛馬の如きも

のが貨幣の代用を爲して居つた又漁民の部落で漁具貝殼などが貨幣の代用を爲して居つたこれは社會の幼稚の時代には一般に行はれた現象であつたが年代の進むに從つて漸々進化して遂に何れの國でも一般に金銀を使用して金銀が世界共通の貨幣として授受されることになつた

この趣味ある現象は全く貨幣たる役を爲すには金銀以外の物品は不適當であるといふことが各國共に其實際の經驗より歸納された結果であらうと思ふ貨幣學者は貨幣たる物件に必要なる條件を七つ程擧げて居るが其條件に就いて一々考へて見れば成程金銀が最も適當であると謂ふことが考へられるのである其條件の第一に價格あることであるこれは金銀に限らず財と稱するものなれば皆該當する然るに第二に運搬し易きことが必要であるこれは財中にも不適當なものが非常に多くある第三に破滅し難いものと謂ふので又適當なものが少なくなる第四に何んでも同種の物件さへ持つて來れば皆性質が同じものでなければならぬと謂ふ條件が加はるので愈々少なくなる第五分割し得べきことと第六價格の變動少なきことと第七認識することの易きこととこの三條件が加つて適當なものが又々少なくなつて金銀が先づ危して合格する位になつて終ふ即ちこの道理によつて金銀が世界を通じて貨幣として使用せらるゝ事となつたものである然れどもこの道理が始めから知れたものではない唯だ各國が年來種々の物件を貨幣として使つて見て種々の不自由を感じては他の物に代へ又他の不自由を生して他の物に代へ幾度かかくの如く變更して遂に金銀となつたのであるその變遷の歷史に就いて學者がこの七條件を歸納したものでありませう兎に角かくの如くに各國が種々の物件を貨幣として使用したのが結局皆この金銀に歸着したのは考へて見れば餘程趣味あることであると謂はねばなりません

中學日記

第二回 披露

再び『中學日記』の應募者に告ぐ

一、本會の募集に應じて、第二回目の『中學日記』を記述し寄送されしものも亦た百通以上に達し候は、會員諸子熱心の致すところと本誌編輯同人等の最も滿足することに御座候

一、されど、前回及び今回を通じて此の日記を記述し寄送されしものは、僅かに左の十數人に過ぎ候はぬことは編輯同人の甚だ不思議に存じ候ことに御座候

徳島縣	杉野	鶴一君
靜岡市	勳柄	傳藏君
茨城縣	栗	山濟君
能登	大谷内唯一郎君	
函館區	青木	三郎君
越後	本間	五郎君
仙台市	佐藤	文三君
東京深川	最上	芳江君
金澤市	久田	賢輝君
福岡縣	原	謙二君
金澤市	御影登太郎君	
岐阜縣	落合	正隆君
弘前市	最上	梅三君
越前	竹下	勉君
大坂市	中川	俊光君
根室	横山	太郎君
鹿児島	谷川	新熊君
高知	岩崎	勉君

一、吾人が此の日記を募集せし理由は、現今の學生諸子が、いかに持久の性に富めるかを試驗せんとなりしに、第一回の募集に應ぜられし一百有餘名の會員のうち、八十有餘名の人の此の第二回目の募集に應ぜられざりしは、果して如何なる理由にやあらん、吾人は寔に其の理由を知るに苦しむところに御座候

一、こゝに芳名を掲げし十有餘名の諸子、幷びに今回のより新らたに募集に應ぜられし自餘八十餘名の諸子、希くは今後尠くも十二ヶ月は絕えず其の日記を吾人の許に致されむことを、吾人の最も希望する處に御座候

一、日記中宿處姓名を認めざりしもの十二通あり右は審査上不都合につき、爾後は必ず御忘れなく兩者とも御認めありたく候

一、和文英譯問題「輝く者必ずしも悉く金に非ず」譯文は次ぎの如くに御座候
All is not gold that glitters.

六月廿六日の日記

鹿兒島縣　吉良滿吉

（和譯）……高慢な心を持つ人は金錢に緣が無い

午前七時半出校したが、二時間目は地理であつた今日はデンマークの所であつたが、其の國人は貯蓄心に富んで居ると話された　彼の國の富みを我が國のと比較すれば一人につき百五十六圓に對して二圓だとは驚かずには居られぬことである、四時間目英語の時、佛國のナポレオンの話の內に、「才子は勉強家」とこう云はれた、放蕩無賴は才子の常とは小才子の事だそうだ、五時間目の作文は我が鄉の風景と云ふ題で、宿題であつた、宿屋に歸へつて新聞を見たら、本日の英皇戴冠式は皇帝御病氣の爲め御延引になつたとのこと、彼國ではさぞ殘念に思つたことであらう、又た畏きあたりでは第二の皇孫の宮御降誕あらせられたとのを、手紙を父上へ送つた、月末だから金を送つて下さいとの意であつた、

六月廿二日の日記

岐阜縣　落合正隆

今日日曜なれば麥を刈り入るゝをに昨日より定めありしかど雨天なるべく見えしにより、賴み置し日雇人等を歸しゝに、天氣圖らずも快晴となりしかば、机に倚りて勉學し居し余も引き出だされて麥の刈り入れを手傳ふ、されど家人の手のみにては一日に片付け得べくも思はれざりしかば午後より雇人等をも交へ、余は實を落すことを專務とし父母及び日雇人は畑より麥を刈取り、妹はそれを余が許まで運ぶ役目をし、夕刻までに悉く刈り入れを終り、目的を果しぬ、慣れぬ仕事とて身体大いに疲勞せしかども、目的を果し得し嬉しさに一同とゝもに愉快に晚餐を喫し、此の日を終へぬ、事はまことに小なりといへども、目的を果すことの愉快を感ぜしこと今日の如きは、絕えて今まで無かりしことなりき、今日の自然の敎訓余は決して忘るゝこと無かるべし、

日曜　日　月

學校に　家庭にて

〔和文英譯〕……眞の朋友は時として肯して他を怒らしむ

〔右の英譯〕……

A straight stick is crooked in the water.

（以上の和譯）……

住所

姓名

日々の日記を其の都度認め置き、他日の備忘に供するとの必要なるは、殊更に云ふまでもなし。吾人は、既に其の必要を感じて日々の日記を認め居らるゝ學生諸君に向かひては、愈々之を勵行せられむことを望むと共に、未た日記を認められしことあらざる諸君に向かひては、一日も早く之を實行せられんことを望むこと切なるが故に、其の奬勵の微意を表せむとして、爰に「中學日記」を募る。其の方法次ざの如し。

一、この紙の表面に印刷せる「中學日記」欄内には、諸君が日々各自に認めらるゝ日記の中比較的に記憶すべしと認めらるる一日の日記を選び、事實を飾らず、有りのまゝに認められたきこと、

一、和文英譯、英文和譯の問題を添付したれば、日記と共に其の譯文をも認め送られたし。但し、和譯の文体は、雅文、俗文、言文一致などの孰れを取るも隨意たるべきこと。

一、日記及び和英譯文ともに優等なる分をば特に之を本誌に掲ぐべきこと。

一、この「中學日記」用紙は毎號これを添ふべく、而して、十二ヶ月以上繼續して毎月この日記を送られし諸君に對しては、特に、その名譽を表彰すべきこと。

一、應募期限は、來月十日を限りとすること。

一、住所、姓名、及び、月、日、曜日等必ず明瞭に認められたきこと、

一、早稲田大學出版部内中等教育會宛にて送付ありたきこと。

故人の逸事

池田晃淵

故人の逸事と申せば、誠に渺漠とした、且甚だ廣い事なる上に、所謂百人百種で御座い升が、詰る所は、故人の嘉言善行を申ので、其中より剛毅朴訥な士の御話を申升、此剛毅朴訥と申事は、既に孔子も、仁に近しと贊歎られた程で、人の性行上より申せば、最上乘とは申されませんけれども、正直にして、勇氣のある性質であり升から、其行爲も、自然常人の眞似られぬ事もあり升、尤中には、實に兒童らしき行爲もあり升けれども、そこは、即ち僞らず飾らざる、正直なる所で御座いまして、彼の孔子が巧言令色鮮矣仁と、酷く擯斥しました、僞り飾りて、阿ねり諂ふ奴等とは、雲泥の相違で御座い升、さて其人と申は天正より慶長寬永へかけて、筑前の黒田孝高、長政二代に仕へて、家老職となり、殊に其頗強勇を以て、日本は申に及ばず、朝鮮、明國までも、英名を聽かしたる、毛利但馬友信の逸事で御座い升、尤も此人、本氏は母里で御座い升か、寬永年間に、德川幕府で、江戸城を修築した時、諸大名へ其手傳を申付ました、黒田家も同樣に申付りましたから、家老職の母里但馬を、其總奉行として、人數を預けて、普請の手傳を勤めさせまして、滯りなく竣工の上、幕府から、手傳の諸大名へ、夫々に賞與がありました時、此母里但馬へ、幕府から賜りました賞與の書付に、右筆が誤りて、母里を毛利と書ましたのを、但馬は、將軍家から贈つた、苗字も同前だと申て、毛利と更めたと申事で、又實名も、初は久信と申たを、或時主君長政が、林道春（羅山先生）を招いで、論語の講釋を聞かれ

ました時、但馬も其席へ出て、聞て居ましたが、朋友と交るに言信わらば、未だ學ばずといふと雖も、我は必ず之を學びたりとせん、といふ章の講義を聞て、頻りに涙を流して、感激して、自分は實に不學文盲だけれども、此章句の通りを、固く守りたならば、少しは人らしくも見ゆるだろふと、斯考へて、其日より、友信と更めたと申事、是等は些細の事の樣なれども、一寸常人とは違つて居り升。

元來此但馬は、自分で考へて、尤だと得心した上でなければ、主君の仰でも、直に應と承知しません、自分の心に尤と思はぬ事に、應と從ふのは、これは諂ひだと、斯一途に心得て居り升ので、事の大小も、何も頓着はありません、其代りに、自分でいかにも尤だと得心した上は、水火の中と雖も、聊かも恐れず勇進一升、夫故に、數度の戰場に、唯の一度も後れをとらざるのみならず、いかなる勇士といへども、戰ひに利なくして、軍勢を引揚るといふ塲合には、中々苦戰をして、辛々に引揚るのが、常の事で時によりては、敵の追討に逢ひ、七顚八倒して、引揚る事も御座い升、夫れ故斯樣の時に、殿りとして、一番跡へ殘りて引揚る人が、肝腎であり升、此但馬は、いつも斯樣な塲合には、其殿りをしまして、敵の追討に來るのを、遙かに追退けで或時には此塲合で立派な大將分の士を討取る事などもありました、夫で身体には鎗疵一つないと申からは非常の剛勇に相違ありません、

さて自分の心で尤と思はぬ事には、從はぬといふのは、中々持重の風で、是は畢竟天性の正直なる所で甚だ感ずべきであり升が、これに付て可笑しき話が御座い升、但馬が始めて江戸へ參りました時、駿河の浮嶋が原で、小休みを致しました所が、折柄富士が晴々と能く見えましたから、同行の人々か、偖々富士は實に日本一の高山程ありて何所から見ても、誠に能い姿だと、とり〳〵には

めますのを聞て、但馬は、何あれが富士か、あれか日本一の高山とは何たる事ぞ、我らが城下の後ろの福知嶽程もないと申たから、何れも夫は御目違で、何として福知嶽などが及び申べきと、口々に申升と、但馬大に怒りて、我ら是まで數度の戰場で、敵勢を見積るに、千でも万でも、遂に一度も見誤りのなきは、各も存ずる處、然るに是式の小山一つに、某しの目が違たるかとは、聞捨ならぬ、其義ならば、首に掛けても、高下を見積り申さんと申ましたから、一同もあきれ果て、成程福知嶽と並べて見申さば、富士は中々及び申まじくと申て、其塲を濟したと申升、これは一寸遠見しては、思ふたより卑い山だと、自ら信じた所を申張つたので斯樣な事が、度々あり升から、一家中でも、剛情ものとか、氣違とか綽名して居つたと申升

然るに、此剛情ものを、黒田孝高か、嫡子長政十三歳の時に傅役としました、尤も栗山備後と兩人をしましたが、備後は一老職の事なれば、唯大體を締結るのみで、平生の細事は總て但馬一人で致しました、其時但馬、同家中の人々に申には、我らは此度若殿の傅役に仰付られたが、僅か十三歳の人の相手するには、是まで各へ物を申た樣な事は勿論、我らも十三歳の昔に返り申さでは、迚も若殿は息屈して、遂には病氣にも成申べければ、其心得で居られよと申して、夫よりは、始終若殿の友達となつて、遊び戲れ、折にふれて長政憶したる仕方などあれば、忽ち夜叉の如き勢ひにて、大聲を揚て叱り懲し、又能き事をなせば、眞の我子の如く、涙を流して譽め悦びなど、致しましたから、終には長政も但馬を恐れもし、又懷かしくも思ひて、實に水魚の如くなりたと申升、夫故に十六歳にて長政が初陣の時などは、危き塲所に、但馬は態と引出して、自身介抱して手柄をさせまして、夫より戰のある度毎に、斯の如く介抱して手柄をさせましたから、長政もいつか膽も据り、

彈丸矢石の間を、何とも思はぬ樣になり、從つて軍隊の駈引なども、自然に覺え込ましたから、成長の後には、豐臣、德川の二代にかけて、屈指の名大將となりました、さて但馬は、長政に對しては、一生傅役の心を忘れませんで、長政か其後筑前の國主となり、但馬も一万五千石を領して、家老職で御座い升か、時として長政、何事にか近侍の輩の諫を用ゐませんで、各當惑する時に、密かに但馬に、斯樣斯樣の事で、困ると申升と、但馬早速君前へ罷り出て申には、又例の我まゝの癖か出たそふな、大名や大將となると、自分勝手な、我まゝの出來るものでは御座いません、自分勝手な我まゝを仕たくば、唯の士になり下るが能う御座る、見よ大名だから、大將だからと申て、勝手我まゝに振舞ふなら、次第々々に能き家來には見放され、果は身上零落して、小者一人を漸く召連る程の身に成であらう、殿樣が其樣に零落た時、附從ふ小者は、此但馬より外には有まい、其時は

水汲飯炊は愚か、大小便の桶までも擔かねば成まいと、幼年の人に云ふ如く、繰返し々々申升から長政も尤ではあり、且は怠屈もするから、遂に聞入て仕舞ふ、しかし長政も最早立派な大將で、三十以上の年齡で御座い升から、時によりては大腹立で、手討にもせん勢ひで御座いましても、但馬は少しも恐れませんで、か樣に零落て、世間の人々に、あの母里多兵衛（但馬の初名）主從のなれの果を見よと、指さして笑ものになるよりは、唯今御手討になりて死ぬ方が、此身にとりては仕合で御座ると申て、諫め升から、いかに火の樣に腹立たる時にても、此誠心に感動して、怒氣も鎭まり諫を用る事に成升、斯樣な人々が輔翼いたしたから、長政はあの如き名大將となりましたので御座い升

斯樣に但馬は剛毅朴訥であるから、さらば下々に對して肩を怒して威張るかと申に、決して左樣では御座いません、自分の部下（組子）の輩に常々申

には我等も各も、唯時の回り合せで、頭となり組下となりたるのみなり、人間はいつ轉變があるて、我らも各の組下に成らぬともいへぬが、しかし今日の所は、我らは頭なれば、各は親と思はるべし、又各は組下なれば、我らよりは子と思ふべし、されば親と子の間柄なれば、平日は何事もうちとけて、親しく致さるべし、頭とて、組下とて、左樣に窮屈にするには及ばぬ事、去乍ら、各平生の身持は、いかにも行儀よく相嗜みて聊も不義の振舞あるべからず、萬一不身持の族あるならば、子の恥は親の恥、組の恥は殿の恥故、聞次第に早々成敗（死刑）申付るぞ、偖又戰場は、世間にては士の死場と申せど、我らは左樣に思はぬ、士の實の山と思ふなり、其子細は、我らは元錙一本持て出たるものなれど、度々戰場へ出たればこそ、今斯樣に家來も持つ、各をも引廻す身分になりしぞ、但し其間に討死するか怪我でもして片輪になるものは是は其身に實の授からぬ不仕合ものにて據ろなし

さればとて、實の山にても、油斷しては實の授かり樣なければ、一も二もいらぬ我らか下知を神妙に守り候へと申て、眞に我子の如き仕なし故に、組下の輩も、世間にては氣違の、剛情のと申せど中々左にあらず、慈悲深き事は佛の樣なる人なりとて、親しみ服しました、勿論但馬は常々節儉にして、假にも奢りがましき事はなく、其身も妻女も、木綿布の外は着用せず、食物はと申せば、いつも黑米飯に糠味噌汁なれば、從つて勝手元も餘裕ある事故、家中の若士等が喧嘩など致して、主家の法度に觸れ、追放などに成升と、其罪の不義の所行でなきものは、但馬、內々人を廻して、自分の方に引取て養ひ置き、偖折を見て、赦免を願ひ遣し升、斯樣の風で御座い升から或時は、數十人の浪人を養ひ置升故、朋友の中より、但馬に、其許は主家の浪人を手元に養ひ置くは、餘り無遠慮なる仕方でないかと、申升と、いや〳〵、あの者共の親兄弟は、何れも主君の御用に立た、事の

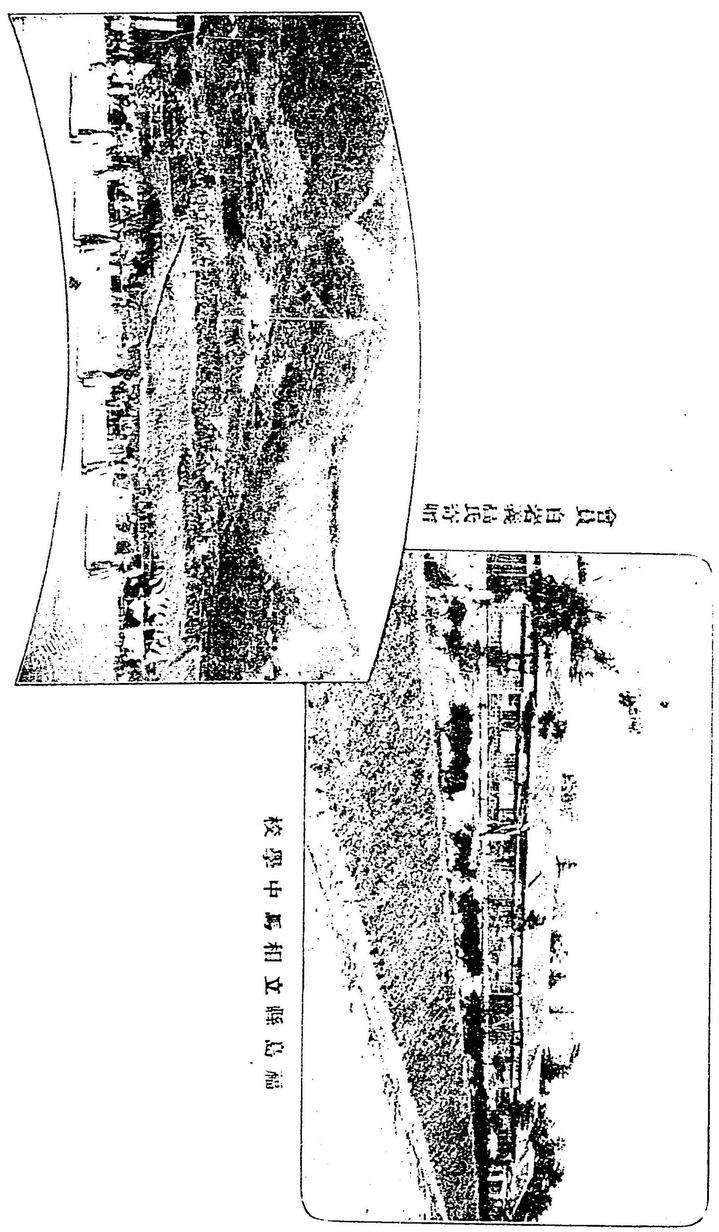
大小はあれ、皆命掛の奉公したるものなるに、其を馬鹿にして居りました、所が慶長五年に、豐後の石垣原と申所で、大友家の舊臣等が、隣國の立花などを頼に致して、俄かに一揆を起して、豐前即ち黒田家の領内に討入らうと仕ました、其時井上周防は、急に馳向つて、千人に足らぬ人數を以て、而も外に應援の兵もありませんのに、五千に餘る敵を散々に駈け破つて、數日の間備を固めて、遂に敵を破つて仕舞ました、此手際を但馬か見聞しまして、人々に申には、凡そ軍と申ものは能狂言の様なもので、仕手、脇、連、地などかあつてこそ、夫々の手柄も、働きも出來るものなるに、周防の此度の働きは、仕手も、脇も、連も、地も皆一人にて、あの如く一もみに、目に餘る敵を蹴散らし再び頭を出させぬ様にしたとは、去とては凡人にあらず、我らなど中々及ぶ所にあらず、と申て、夫よりは周防を嘲る事を、止たと申升、凡そ是らの事柄は皆一つとして、常人の爲す能はぬ事どもであり升。

右の如く、但馬は一家中にて、誰れ憚る人もなく振舞ふたかと申と、中々左様で御座いません、主君長政よりも、怖るゝものは一老職の栗山備後であり升、主君長政の事などは、「いつの間に、其様に我まゝをいはるる様に成たか、よし〳〵、今に大きな灸でも据でやらずば止むまい」などゝ、長政が幼少の頃の事を、引出して蔭にては、戯言を申升けれども、栗山に限りては蔭にても、備後殿は何と仰せられてなどゝ、敬ひ居り升、夫に付て一二可笑き御話があり升、慶長六年に、黒田長政筑前へ移封になりました時、豐前堺へ小城を取立て但馬を置事に致して、其普請を致しました、然るに但馬は石垣はこれでは卑い、今少し高くとか、堀も、これでは淺く狹いから、今少し廣くなどゝ色々長政の申事に故障を申升から、長政は、いや〳〵此城は、左様に堅固にするには及ばぬ、僅か二三日持こらへる程の、要害なればよろしいと申升と、但馬は、左様な城には我らを差置にも及び申ませぬと、云捨て、直に宅へ歸りましたから、長政始め、一同興を醒したから、栗山備後は、又但馬め我まゝを仕出しかと申て、直と但馬が宅へ參りまして、備も已れは、又例の病を出した、急ぎ我らと一所に參れと、さも大柄に申升と、但馬は、備後殿の御自身御出なれば、何しにとやかく申べきと、悄然として後へ附て參りました、備長政の前へ出ると、長政申には、其方は何と聞違たるや、此所は本城より、三里程の所なれども、敵寄たりと聞かば、我ら駈付て蹴散らすは、二三日の間なり、夫故に餘り堅固の要害は、不要なりと申たるぞと申升と、但馬は、夫なれば御尤もの事なれど我らは又敵寄たらば、捨て逃るために、要害は不要と存じたれば、左様の所は、我ら守るに及ばず、彌々我ら守るとならば、三日が五日、五日が十日と、一日も長く持ちこらへんためには、要害こそ堅固ならではと、存詰たる故、最前の如く申候に唯今の御意にては、御最もの御事に候と、御請を

申しました、又其後長政は、桐山丹後と申武功の人を、老職に致さうと申て家老中へ相談し升と、一同も御最もと同意しました、然るに、此桐山丹後は但馬とは音信不通の中で、其起りと申は、朝鮮にて、或時明軍が、長政の陣所近くの山上に、夜中に兵を上せたといふ、注進がありましたから、但馬はこれを聞と、直に手勢三百計りを引連れて駈出しましたが、數刻を過しても、但馬が歸陣しませんから、長政は、桐山丹後其時は使番でありましたから其樣子を見せに遣はしました所が、丹後は途中から歸りて申には、但馬は追討に逢ました、唯今苦戰中で御座ると、復命しましたが、長政を始め、但馬に限りては、追討になるものでないが、いかにして、追討と知たかと尋ね升と、味方近くに、烈敷鐵砲の音が聞え、次第に其音が近寄り升からと申と、其儀ならば、誰ぞ參れとある所へ但馬は大手を振て歸陣しまして、しかも百四五十の首數を持て參りまして、此通り敵を山より追下し、遙かの先きへ追退けましたと申たから、長政始め一同、大に其手柄を賞しましたが、其時何人か、一同、但馬へ追從心に、先刻桐山丹後か、か樣に申たといひ升と、但馬は烈火の如く怒りて、あの青二才め、人にこそよれ、此但馬を追討に遂たなどゝは、其分に致し置れぬと直ちに果し合ふべき勢ひで御座いましたのを人々色々に宥めて、其時は無事に濟ましたけれども、夫よりして但馬は丹後を非常に悪み遂に挨拶もせぬ事になりました、勿論丹後も、自分の疎忽を幾度となく、謝したけれども、但馬は何分にも聞入れませぬ、そこで今度は、中老にするには、是非とも家老たる但馬と中直りをさせねばならぬから、長政、家老中を呼寄て、但馬に中直りをする樣にと、直に申ましたが、但馬は、君の御爲めとあらば、此所にて一命を召るとも、決して否み申さず、去乍ら、此丹後と中直りの儀は何分にも御免下されと申て、承知しませぬ、長政は重ねて、其遺恨も我等委細存じたり、さし

て根深き事にもあらねば、我らに免して、中直り致せと、色々に申、又列座の家老中も、口々に申たけれども、但馬一向に承知しません、所が栗山備後は、但馬の側近く參りて、殊になだめすかして、申升けれど、但馬は堅く聞入れませんから、備後は、「偖も己れは又か」と申と、左の手を伸して、但馬の頭をはりましたから、長政始め一同あきれ果人にこそよれ、但馬程の荒武者を思慮深き一老の備後が似合ぬ無禮、これは唯事に濟まじ、必ず今にも但馬は飛かゝらん、其時備後は早業の人なれば、首尾能飛退べし、さらば我々中に入て取押へんと、肘を張て待て居ましたが、備後は少しも恐るゝ氣色なく猶も上にのしかゝらん程の勢で、「己れ人がゆるせばとて、剛情も程のあるもの、主君のあれ程に仰らるを、御請せぬとは何事ぞ、御爲めには命を上るといふも、夫にて偖はりになるではないか、誰しも心に染ぬ事は、十に七八はあるなれど、そこを堪忍するは、御爲めと申ぞ」と、親が子を叱る如く、繰返し〳〵申と、但馬は次第々々に頭を下げて、疊の上に、涙をはらはらとこぼしたが、漸くに頭を上げて、「偖々近頃申譯もなき次第、此上は丹後と中直り申べし」と申たから、其時備後は、「夫でこそ我らも安心した、能く主君へ御請申せ」とて、座に復しました、それより但馬は、長政に向ひ、「備後が唯今の仕方、嘸御不審に思召まさふが、是には深き仔細のある事で、備後は未だ善助と申て十八歲、私は萬助と申て十五歲の時、先君如水公（孝高）二人を御側近く呼で、此萬助と申者は、由緒立派なるものなれど、かたの如き、わんぱく我まゝもので、家中の者、誰あつてこれを憎まぬものはなきが、行末見所あるものなれば、今日より善助に預ける間、眞實の弟と思ひ、敎へて人になしくれよ、若し聞入れぬ事があらば用捨なく折檻をせよと、仰られましたを、善助色々と辭退を申ましたが、如水公一向御聞入れなく、何分にも賴むと、重々の仰に、善助御請を

申上ると、又私に、其方は善助を、兄とも親とも思ひ、萬事善助が仕方を手本にして、聊かにても申事を背くなよ、若し善助に腹立れて、打擲さるゝとも、夫は善助がするではなく、我等がする事なれば、必ず彼が申事を背くなとありて、兩人に誓紙血判を致させて二通づゝ書せて、一通は兩人の手許に、一通は如水公の御手に納められて、其以來一から十まで、備後が介抱にて、斯人らしく罷成ました、尤も其間、或時は打たゝかれ、又つめられなどされし事、度々ありましたが、十六歳の初陣から、始終陰となり陽となりて、私を引立介抱致せし親實は、親とも兄とも、中々申様はなく候が、もはや兩人も三十歳以上となりてからは、其以前の如く、叱りも致さねば、偖は我等は、もはや人になりしか、但しは善助は、昔の事を忘れてかと存候ひしに、唯今の仕儀、如水公の御意を重んじて、私への教訓、實以て骨身に徹し、偖は我ら至極の誤りと覺り候、此上はいかにも御意に從ひ、丹後と中直り申べし」と申たから、長政を始め列座の人々、此物語に感涙を流し、去にても如水公の深慮は、凡人の及ばざる所と感激しまして、直に長政は、近侍に盃を持て參れとありて、自身三獻を傾けて、誰彼と申さず、但馬に其盃を下されました、但馬も謹んで三獻戴きまして、これは御座有まじくと申て、直ちに丹後を伺ふまでも、御座有まじくと申て、直ちに丹後より格別懇意に申談すべし、これは主君よりの御盃なり、中直りに其元に參らすとて、盃をさし、二獻めの時に、これは中直りの印とて、自分の脇差をとりて、丹後に遣はし、偖ば上作にてはなけれど、業は其元の存の通り故、我ら平生腰をばなさず、秘藏致せしなりと申ました、長政此躰を見て、深く感じ入り丹後も但馬へ道具(腰の物の事)と存ずるも、遠慮あると見えたり、さらば我らよりこれを遣はさんとて、自分帶したる脇差を脱して但馬に遣はしました、是等などは、殆ど兒童に類



したる點もあり升けれど、當時戰國時代、意氣張を第一とする風義の上には、有勝の事で、決して笑ふべきではなくして、能く其信義を重んずる事は金石の如く、過ちを悛るに速かなるなど、剛毅朴訥仁に近しとは、是の謂なるべし（此外猶數條あれども餘り長くなり升、ちこれにて御免を）

通信

●濱中校友會の情況　わが校友會たるや大いに体育勢育を奬勵せんが爲めに設けられしものにして、野球、柔道、擊劍、弓術、庭球、演說の六部に分かたるゝ外、今年新たに設げられし夏季水泳部を舞坂海岸にて開かる。就中野球部最も盛大にして、去七月名古屋第一中野球部との仕合に勝ち、菲山、靜岡兩中學野球部に勝ち、今は日の出の勢なり。會費は毎月三十錢、生徒は四百五十名あり。年三回校友會雜誌を發行する規定なり

（濱松中學校　S K 生）

●春日學游會の情況　わが村は僻地なので人心が一体に開化しないで。青年の如き、肉體の快樂をのみ知つて更に精神上の美しい清らかな樂を知らぬ。本會は我が鄉青年の氣風を一新しようとの目的で起つたのである。會員は僅々十三名である各自好む雜誌を購讀し集會の席で各〻所感を披露し。一ヶ月に一回「春日之華」てふ筆記雜誌を綴り廻讀する組織である今や入會希望者も漸く增加し日一日に盛運に向ひ目的に近づきつゝあるのである。

（福岡縣筑紫郡　原　謙　二）

●鳥取縣第一中學校の情況　去る三十三年全焼せし本校漸く新築功竣り生徒總數五百五十名を越え職員二十余名にして文武奬勵の目的よりなれる本校友會には文藝運動の前部に別ち前者にては年四回發行の雜誌鳥城及び野外研究演說討論會は數回有之又年一廻の展覽會催され居り後者にては年一回の秋季大運動會及び春期旅行其他柔術擊劍端艇野球ローンテニス等の各練習及び對外校競爭相催され甚だ盛大を極め居り其役員は會長一名部長一名委員拾二名理事六名及び通常名譽特別の各會員合せて千名に達し居り候

（鳥取中學生　松　下　政　三）

●卷校同窓會の情況　八月十日卷高小學校内に於いて第一回同窓會を開く、本會に本校出身者の親交を温め兼れて各自の智識交換を目的とするものにして、此の日も諸講師の有益なる談話あり諸學科の研究あり、來會者三百有餘名頗る盛會なりし。

（越後西蒲原郡　本　間　五　郎）

世界第一の富豪ロスチャイルド家

椿鷹峯

(一) 緒言

青年の志を立つるや、須らく大いならねばならぬ。王侯將相などいふ兒戯にひとしい人造の位記勳爵は沙汰の外として、正義の筋道によつて遂げ得べき、即ち他の俗物等の私情、利慾心に關係なく、清い努力によつて達し得べき事業に就いていへば吾等の一事に志すや、必ず、其の事業に於いて、最大、最高、最優、天下無敵の人物にならうといふ覺悟が無くてはならぬ。人によつて天賦の資質に優り劣りあるは免れ得ぬ數であらう。天分に差違あることも、亦、爭はれぬことである。けれども、人には、必ず、自己に特殊なる、他人が代理することが出來ぬ天職といふものがある。此の天職を完全に盡くすことをはかる上に於いて、吾等は、全力を注がねばならぬ。天職たる事業を奉行する上に於いて、決して人後に落ちぬ心掛けがなくてはならぬ。「最大最高我れ及ばす」とする心、「第一流は我が分にあらず」といふ心、二流三流に滿足する心、此の心が、取りも直さず、人を卑怯ならしめ、意氣地なくならしめ、自暴自棄ならしむる種子である。

人の事業、天分は、限りなく多い。其中で。精神的事業は、或は、最も高尚なる事業であるかも知れぬ、けれども、他の物質的事業とても、決して、卑しむべき謂はれは無い。田畑を掘ることも、牛馬を畜ふことも、鑿、鉋をいぢくることも、金を溜めることも、それぞれに、他の事業の蹴おすべからざる價値を有つて居る。茲に說かうとするのは、金溜めの事、世界第一の大金持ロスチャイルド家のことである。其の額に於いても、之れに比すれば泰山の前の小垤といふべく、又、致富の道に於いても、特に仰ぐべきふしの存在せぬ、三菱、三井のやからを見て垂涎する徒は、先づ、ロスチャイルド家の無限大なる富を見て其の志を大いにしロスチャイルド家が富を致した道を見て、其の心の底を洗ふが宜しい。

(二) ロスチャイルド家の先祖及び家名の由來

ロスチャイルド家 (Rothschild) は、現今に於ける世界第一の富豪であります。佛蘭西の一記者は、曾て、歐州の各國政府とロスチャイルド家との關係に就いて、「今やロスチャルイド家に取つては政府のある必要は少しも無い。けれども政府に取つては、一日も、ロスチャイルド家がなくてはならぬ」といひました。ロスチャイルド家の富の度、及び其の世界に於ける勢力の如何ばかり大いなるかは此の語によつて量り知ることが出來ませう。

ロスチャイルド家は僅か百三四十年の間に於いて今日の盛運に達したのであります。ロスチャイルド家のもとの性はバウエル (Bauer) といひました。其の先祖は、名をマイエル、アンゼルム、(Mayer Anselm) といひ、獨逸國メーン河上なるフランクフォルト (Frankfort) の商人アンゼルム、モーゼス、バウエル (Anselm Moses Bauer) の子で、西暦一千七百四十三年に、フランクフォルトに生まれた人であります。家系は、丁度、穢多が邦人に蔑視さるゝように、歐洲人に賤しみ嫌はるゝ猶太人種に屬して居りました。父は、マイエルを教師にしようと思ひましたが、マイエルは之れを拒んで、商人となり、つひに、金貸業によつて身を立てようと決心したのであります。

マイエルは、此の決心をすると間もなく、フランクフォルトの猶太町に小さい家をかまへて、赤い楯を其の店の看板としました。それから、市人は、いつとなく、彼れの名を呼ばずして、「赤楯屋、々々々」といふようになりましたが、是れがそもそもロスチャイルドといふ家名の起原で、ロスチャイルドは、赤い楯といふ意味の獨逸語であります。

此の語は、元來、ロートシルド (Rothschild) と讀むが本當で、英語の red shield に當たつて居るが

これを英吉利風に讀みならはして、遂に、ロスチャイルドと呼ぶに至つたのであります。看板が家名になつた趣は我が國の三菱、三井、大丸、白木屋などの場合によく似通つて居ります。

(三) ロスチャイルド家の發達及びナタン

それから、マイエルは、一方ならず勉勵して、手堅く其の業を營み、銀行家としての地位も次第に出來かゝりましたが、己にして、其の財政上の技倆がキルリヤム伯に知られ、一千八百一年に、託されて、伯の財政上の代理人となりました。其の翌年、即ち、一千八百二年に、彼れは和蘭政府に一千萬ターレル（一ターレルは、凡そ我が七十三錢にあたる）を貸し出したが、これがロスチャイルド家の一國の政府に貸出しをしたそも〳〵の初めであります。マイエルは、段々と其の手を財界にひろげゆく中、獨逸と佛蘭西との間に戰がおこり、佛國がキルリヤム伯の領地に入つた爲め、伯は、餘儀なく其の領地を逃れ出でたが、其の時、

其の莫大なる貨幣及び實物を擧げて、ロスチャイルドに託したいといひました。かういふ恐ろしい時のこととて、大金を預るのは頗る危險なる場合ではあつたけれども、彼れは、今こそ伯が平生の知遇に報ずべき時であると思ひ、快く承諾しました。當時、ロスチャイルドは、其の莫大なる財寶を庭の片隅に埋め置き、用ある毎にそれを掘り出したといふことであります。さて、ロスチャイルドは、かような危險なる時に於いても、五朱の利子をつけて、後に至り滯りなく伯に返したから伯は大いに喜んで厚く彼れを信じ、其の莫大な財産をば彼れをして自由に使用せしむることになりました。ロスチャイルドが成功の基礎は、實に、かくして固められたのであります。

マイエルは、かくしてロスチャイルド家の基礎を固めましたが、一千八百十二年の九月十九日に、五男五女を殘してフランクフヲルトに於いて歿りました。五人の男子、長はアンゼルム、マイエル、

（Anselm Mayer. 西暦一七七三―一八五五）次はソロモン（Solomon. 一七七四―一八二六）三はナタン、マイエル（Nathan Mayer. 一七七七―一八三六）四はカルヽ、（Karl. 一七八〇―一八五五）末はヤコブ（Jacob. 一七九二―一八六八）といひました。其の中、長子のアンゼルム、マイエルは、フランクフヲルトなるロスチャイルド銀行本店の管理者となり、ソロモンは維納（ウヰンナ）、ナタンは倫敦、カルヽはネープル、ヤコブは巴理と、それ〳〵に、ロスチャイルド銀行支店の管理者となりました。而して、此の一家及び其の銀行に關する重要なる事件は、凡べて、フランクフヲルトに於いて評議して定めることになつて居ります。

五人の兄弟の中、最も機敏であつたのは、三男のナタンであります。ナタンの倫敦なるロスチャイルド銀行が今日の盛大をいたしたのは、全く、彼れの力であります。ナタンは、初め、父の商品を賣りさばく爲めに、一千八百年からマンチェスターに行つ

ロスチャイルド家

て居りましたが、居ること五年にして倫敦に移り、それより、大いに、其の手腕を振ふことになりました。ナタンが、初めて倫敦に入つて商業を營み株式の賣買に從事した當時は、倫敦の大銀行家、大商人、大株屋等は、彼れの大膽なる仕打ちを見て、全くの山師と思ひ、侮蔑嘲笑して齒牙にもかけざりしが、彼れの着々成功するを見るや、やかで驚嘆、嫉妬の眼を以て彼れを見るようになりました。彼れは、傳書鳩及び自分の有する非常なる速力の小舟を使用して、政府の力を以てしても出來ぬほど迅速に、遠近の出來事を探知し、株式の騰貴低落を豫察して、大利を占めました。中にも、ロスチャイルド一家に巨大なる影響を及ぼしたのは、一千八百十年以來の彼れの仕事であります。其の年、エルリントン將軍は、英國政府に巨額の爲替佛渡請求書を送つたが政府にそれを支出する力がない。そこで、ナタンは、それを割引して其の金を出だし、それから、ロスチャイルド家はナ

ボーレオンを倒さむが爲めに聯合した諸強國と關係して、軍資を貸し出すことになりました。ナタンは、徹頭徹尾遂にナポーレオンを倒し得ることを信じ、聯合軍の爲めに盡くしたことが少なくない。ヲーターループの戰に、彼れは、自身、戰場に臨んで、狂するばかり熱心に、刻々に變はりゆく兩軍の運命を見守つたといふことであります。此の戰の二日前のブルーヘルに於ける聯合軍大敗の結果、倫敦の株式は非常に低落してあつたが、ナタンは、ヲーターループ大捷利の私報を、公報の達する數時間前に倫敦に傳へて、暴落した株式を買ひ占め、之れによつて巨大なる利益を博しました。ナタンの仕事振りは、萬事此の調子で、機敏を極め、其の上、信用を重んじ、人の爲めに盡くす心も深かつたから、遂に、空前の大成功をなしたのであります。ナタンは、一千八百三十六年の七月二十八日に死にましたが、其の子のリオネル（Lionel）

一八〇八―一八七九）が其の後を嗣ぎました。リオネルは一千八百四十七年に倫敦市會議員に選擧され、後又、國會議員に選擧されて國家の公職にたづさはる身になりました。猶太人にして公職を奉じたのは、彼れが初めで、從つて、彼の名は、「猶太人が公事に關係し得ぬ習はしの除去」といふことに聯想さるゝようになりました。

(四) ロスチャイルド家の家

さて、ロスチャイルド家は、かような僅かの年月の間に如何にして、かような偉大なる成功を爲すことが出來たのでありませうか。始祖マイエルの三男ソロモンの友人なるゲンツといふ人の言によると、ロスチャイルド家の成功の主なる原因は、正しい正義を堅く守つたからであります。此の一家が子孫相ついで大事業を成就したのは、好時機に投じ、巧みに資本を運用したる爲めのみでなく、專ろ、一たび立てた正しい主義を決して變更せずに守つたからでありました。而して、彼等が金科玉條として守つた主義の主なるものが、二つあり

ます。

第一の主義は、「五人の兄弟、常に親しくし、共同の目的利益の爲めに、各々其の業を勉強すべし」といふこと即ち兄弟一致といふことであります。これは、其の始祖が、臨終の病床に於いて兄弟に垂れた遺訓であります。五人の兄弟は、常によく、此の遺訓を守り、如何なる事業を計畫するにも、必ず、ロスチャイルド家全體の爲めといふことを標準にし、決して、兄弟墻にせめぐような醜體を演じなかつた。それ故に、兄弟の支店を開いて居る各國各地の經濟界の事情がよくわかり互に相助け相補ふ便利もついて、其の事業が着々好結果を奏したのであります。

第二の主義は、「如何なる事業を企つるにも、一攫千金といふような不當な利益を占めようといふ考へを起こしてはならぬ、必ず各自に、其の事業の制限を立て、熟慮して思ひ設けぬ變を免るゝことが出來るような範圍に於いて事業を計畫すべし。」といふことであります。即ち、着實精確に事業をせよといふことであります。ロスチャイルドの子孫は、此の主義をもよく守りました。かくて、彼等の要求する所は、中正で貪らず、支拂が精確で、手續が明瞭簡單であつたから、各國の政府、各國各地の大小會社、又、世界全體の信用を得、遂に、其の廣大なる金の網の中に、全歐洲を捲き込めるようになつたのであります。

此の二つの主義を堅く守つたことは、實に、ロスチャイルド家をして今日あらしめた主なる原因であるが、始祖及び五人の兄弟の高尚なる性質も、亦其の成功の原因の一つでありました。彼等は、寬大にして慈善心に富み、且つよく人を信任しました。彼等は、人に深切を盡くし、人の難を救ふことについては、一度も手を引いたことがない。又た人に物を惠むに、恩をきせるような振舞は少しもなく、心の底から同情してやつたそうであります。又店員などを雇ふ時には、初めには精密に其

ロスチャイルド家

の爲人技倆などをしらべるが、一たび採用してからは、萬事うち任せて少しも疑はない。それ故、友は日に〳〵多くなるが、少しも敵をば造らなかつたそうであります。

始祖の長男ロスチャイルドがフランクフォルト銀行に掲げて社員に示した訓戒に曰はく、

一、汝の仕事をば一つ〳〵注意して精しく調べよ。

二、何事にも氣輕に着手せよ。

三、長く考慮せよ。されど毅然として決斷せよ。

四、前進せよ。

五、困難に堪へよ。

六、生活の競爭には大膽なれ。

七、廉潔を保持せよ。

八、職業について虚言を吐くことなかれ。

九、無用の交際をなすこと勿れ。

十、自己の實力以上に見られむとすることなかれ。

十一、借金は直ぐに返せ。

十二、酒を飲むこと勿れ。

十三、時を善用せよ。

十四、好時機といふことをあてにすることなかれ。

十五、何人に對しても禮讓を守れ。

十六、自暴自棄なることなかれ。

十七、右の條々を服膺して一心に働くべし。さすれば、成功は目前に在らむ。

世界第一の金滿家が驚くべき富を致したのも、其の原因を究むれば、兄弟の協同一致着實精確といふことに外ならぬ。投機事業によつて一攫千金の利を得むと望むような實業家、着實なる進歩をまのろく思ふような青年は、先づ、ロスチャイルド家の成功に鑑みて、其の心を清くせねばならぬ。

破隊

（前號なる（ねもりの風車）につづけて讀むをよしとす）

大塚素江

新ちやんは、すた〳〵駈つて、下の方の板橋渡つて向ひの河原へ往き、仲間に交りました。私も蠑螈ばかり釣つて居た分には、氣持が惡く成るばかり、何の慰みにも成りませんから、寧そのこと、小供衆に交つて遊んで見やうと思ふと、何うやら自分は、五六才の椀白盛りであつた頃の、いたづら小僧に成つた樣な氣がして、釣竿も餌箱もほつちやらかして、饅頭笠被つた大男が、つく〳〵ひよん〳〵跳ねて往つて新ちやんが渡つて往つた板橋から、河原へ參つてみますると、さあ驚いた、なか〳〵小供衆の仕事ではない、大人が幾人か幾日か懸つて拵へた樣な、大層大きな石のお城が出來て在ました。

お城は四角でありまして、外廓は、長さが十間、幅は七八間もありましたらうか、石は坊ちやん方の頭位大きいのが下層に成つて在て、漸次に小さいので二尺ばかりも高く築上られ、四方とも一間程潤い出入口の門が取られてあり、裡には、も一重四つ門、同じ位の高さの塀が築上られて、外廓との間二間通り程平らに砂がならされてありまして、而して內廓の裡には亦、お部屋の樣なのが五つ仕切られて、中央の一番廣いのが大將の居所に成つてありました。

その大將の居所に、坊ちやん達が不殘こちや〳〵集まつて、新ちやんを中にして、何か相談してゐました。私はつと其所へ入つて往つて、「新ちやん大層立派なお城ね、一同して拵へたの、大きいのね、をぢさん驚いたよ。」とほめてやりました。ほかの坊ちやん達は、私を初めて見たので、人見知りして羞含んでゐましたが、新ちやんは、最うお馴染だから遠慮はありません、「ぢやないのよ。兄ちやん達拵へたの。竹ちやん所のも、平ちやん所のも、三太郎所のも、仁右衛門所のも、大勢し

て拵へたの。而して學校から歸る間、僕達借りてるの。」と仲間に向ひ、「竹ちやん、平ちやん、一同ね、此のをぢさんねもり釣るのが上手だよ、どつさり釣つたよ、彼所で、そして怖がつてよ、あんなの怖くかわないねえ、僕不殘とつてやつて、ねもりの風車拵へたの、一同知つてるあのねもりの風車。」

これが双方へのお愛想、私はさまりが悪いから、天窓掻いて笑つてゐますと、大勢の坊ちやん達、がく〳〵と首を縦に振つて、莞爾〳〵私が顔眺めてゐまする、最う新ちやんのお執持で、お友達に成りかゝつたのであります。

「をぢさん、僕達ね、これから軍人遊戯するの、見てらつしやい、僕と竹ちやんと南方の隊長さんよ。」と新ちやん砂拂つて立ち上る。一同も續いてむく〳〵起つて、鐵砲、劍、旗など各自に取持つて支度しまする。

「坊ちやん達、面白く遣つて見せて頂戴。」と邪魔をかしかつたのは、新ちやんの隊の中で、仁右衛門と呼ばれた、大人の様な名の五歳に成る兒が、鐵砲逆に持つてぼんとして在ましたので、新ちやんが憤つて、「こら仁右衛門、氣をつけい。」と、いかにも隊長さんらしく叱りつけました。すると、仁右衛門ちやん恟りして、「どゝん〳〵」と鐵砲持ち直して、ひよこん〳〵押し出して、わつと一同に手拍いて笑はれ、べそかいて引込みました。

どゝん〳〵は何の音でせうか、此れはね、鐵砲の音のまねでありますよ。田舍の小供衆は、東京の坊ちやん達の様に、すぽん〳〵ころつぷが飛び出したり、ぱん〳〵雷管が彈ける様な、立派な手遊の鐵砲は餘り持つてる者がありません。此の隊の坊ちやん達は、不殘鐵葉屋へ頼んで拵へて貰つたれ粗末なのばかり持つてゐるので、口眞似しませんと、すつとも、どんとも、響きませんから、仕方なしに口でどゝんどゝん遣つてるのであります。

そのうち新ちやんと竹ちやんとが、またも、ぶう〳〵喇叭吹き立てる、一同はもぐ〳〵片足出して押し出さうとする、「さあかゝれ。」と號令が懸ると、双方直ぐに右と左二た手に別れ、わあ〳〵どゝんどゝん、敵手も味方も不殘一つお城の中で、仲間喧嘩の様な、をかしな擬戰が始まる、新ちやんは大きな聲して、「いけないの一同、いけないの、今云つたの忘れてるんだもの、今日からびつこ隊だつたらね、僕昨夜兄ちやんに聞いたんだ、びつこ隊でなくちや不可いつたらね。」とぷう〳〵憤り出す。

「さうだつけ、一同びつこ隊だよ、さあ、びつこ隊、びつこ隊。」と竹ちやんと劍振つて號令懸けゝ此れはをかしい、びつこ隊つて何うするのかと眺めてゐますと、新ちやんも機嫌が直つて竹ちやんと二人兩方の隊の眞先に進んで、相變はらずとんどゝんと口で遣つて、鐵砲構へて、ぺたんこぺたんこ趁跡ひき出しました。すると、一同も續いて後から、どゝん〳〵わあ〳〵ぺたんこ〳〵押し

に成らぬ方へ避けて、尻ついて覗てゐましたが、成程これは面白い、隊長さんが喇叭卒で、新ちやんと竹ちやんとが、鐵葉の喇叭唇へ當て、頬べた膨らかして、とつとこ〳〵吹き立てますと、大勢の坊ちやん達なか〳〵なれたもので、同じ程づゝ二た手に別かれ、くるりと自分〳〵の隊長さんを圍繞きました。中には涕汁たらした兒も見えましたよ。

新ちやんと竹ちやんとは隊長さんだから、其れはなか〳〵豪いもの、小ちやな大手振つて、一同來いと鷹揚に前に立ちますと、二た手の坊ちやんの兵士さんは、そろ〳〵後に附いて、お城の外廓の内側の、南の方へは新ちやんの隊、北の方へは竹ちやんの隊と、二た所に別かれて陣取り、復喇叭が鳴りますと、今度はずらりと一列に並んで、各自に鐵砲を構へまする、勿論隊長さんは、何方の劍拔いて睨み合つてゐました。

出してこちや〳〵揉合ふ。此れがびつこ隊なので、丁度片足猫に噛れた家鴨の様にがつくり〳〵。べたんこ〳〵不殘揃つて遣つてゐますから猶更をかしい。私もつひ釣込れ、お城の外廓ひよいと跨いで、接戦に交つて「かゝれ〳〵、負んな〳〵、何方も負んな、びつこ隊〳〵。」どゝん〳〵どとんこ〳〵離し立て、矢張べたんこ〳〵遣つてみました。所が一番大きい私が、一番小ちやい仁右衛門ちやんよりも猶べたんこが下手で、直ぐに尻餅つきてしまひました。一同は元氣よく、矢張べたんこ〳〵面白そうに遣つてゐました。

此のびつこ隊とは、一体何のことなんでせうか、坊ちやん方聽いてごらんなさい、兄ちやん達に、私は疲れましたから一服と致しませう。

男らしき行爲

徳田秋江

茲に話す美談は、誰れが讀んでも感奮すべき事である。人情は平常何事も起こらない場合にちやほやしても、一旦事ある時に方つて、其の輕薄を露はし易いものである。眞正の愛情高尚の性質は、平時に於ては分からない、まさかの時に於て始めて顯はれるものである。

有名なIsrael王Davidが遠く故郷を落ちのびて、難澁を嘗めて居つた頃、渇に苦しんで遙かに古里Bethlehemの泉の水が欲しいと思つた折りの物語は、人間の美しい情愛を示してゐる。全体斯の美談は臣下の者共の立派な人と爲りと相待つての事で、王が晩年の譚でゝもある様に思はれるが、さうでない。斯様な高尚な偉大な性格は、王がまだ三十歳の頃であるから無論王とならぬ時、時の王ソールの爲めに追放せられて居た青年時代に於て既に行爲の上に表はれた。

Saul王との仲も和成らず、親しきJonathanと惜しき別かれを告げ。獵者に追はるゝ鳥獸の如く山谷を逃れ、Philistine人の爲めには捕へられむとして

辛き命を拾ひ、流浪の身となつたが、心は依然信實を棄てず、年老いたる兩親は、しばしMoabと言へる處に身を隱さしめ、自からは小供の時分より歩き慣れたる山間の洞窟を假りの宿として居つた。後に至つて勇敢にして、天禀の王として仰ぎ見られる程の人であるから若くても早く人の同情を買うて、間もなく幾群の人々を集めた。是等は、皆不幸に嘆き富者に苦しめられ、不幸に滿ちて居る輩であつた。此の中に后の股肱の人物も居つたのでDevilが人民共の同情を得たのも、矢張り此のえらい股肱の勇敢なる行爲が痛く人民の心を喜ばしたからだ。先づ三人の甥があつた。兇猛暴虐なるJoab武俠なるAbishai及び足の達者なるAsahelとである又、Levite Benaiahを言つて獅子をも取りひしがうと言ふ獅子の如き豪の者もあつた。勇將の下に弱卒なしで其の他凡べて王の如き勇敢の者許りAnakの巨人種と闘爭を事として居たが、斯くの如き暴横狼籍の輩でも、よくDavidの命には服從して、一言の規律を守つた。又、近處の良民を侵すこともしなかつた、自分共を追放した王であるけれども、之れに向かつて弓をも引かなかつた。だから。農民は此の主從の爲めに羊一頭だも損失しない、農民は安心して此の勇士等が歌ふ軍歌に耳を傾ける事もある。

"Come, ye children, and hearken to me,
I will teach you the fear of the Lord.
What man is he that lusteth to live,
And would fain see good day?
Let him refrain his tongue from evil
And his lips that they speak no guile,
Set him eschew evil and to good,
Let him seek peace and ensue it"

來たれ、人の子、來たつて、吾が歌ふを聞け、
吾れ汝に、神の畏るべきを敎へん。
貪りて、生さんとする徒は何人ぞや。
斯くて人は幸福なる日を得べしと思へるか。

人にして其の舌を惡に遮らしめよ。
然らば唇は、何等の罪を語らざるべし。
人をして惡を避けて、善をなさしめ、
人をして平和を希ひ、平和を追求せしめよ。

勇者等は樂器に和して、斯くの如き高調なる歌を歌うて、人々の熱愛を引いた。集り來たるものの中に、十一人のGad人があつた。皆勇猛慓悍にして獅子の如く猛き顏と鹿の如き疾き足とを持つて居る。Jordan河の洪水を事ともせず泳いで進軍し、敵の奴原を山谷に追ひ拂つて居つた。

然れども、熱帶近き地方であるから、燒くが如き太陽の光强く四邊の禿山を照り付け、巉巖屹立谷深く嶽銳くして山羊の通路さへない。此の懸崖絕壁に今尙ほDavid王が此の頃の城樓の跡と思はれるのが殘つて居て其の近くに這ひ入る許りの低い穴があつて、絕壁の羊腸たる徑路に通うて居る凡べて熱帶的の熱苦しき光景を呈し荒廢慘憺一木一草の綠色目を遮さるものがない。斯かる境遇に

苦しんで、自分の故郷の豐饒美麗なる山川を想望する毎に、心は常にめいる許り心細かつた。其處には一面瀰望の平野開展し小麥の綠茫々葡萄棚の影涼しく、灰色なせる橄欖樹高く日光を庇ふ雲ともなり泉石溢れ出でて混々盡きず誠に美はしい鄕土である。

此の綠、此の泉の事を想うて渴望に耐えず、遂に「あゝあのBethlehemの水が一杯飮めれば」と歎聲を洩らした。

之れを聞いて、Abishai, Benaiah, Eleazzieの三人は何うかして其の水を取つて來たいと思つたが、何にしても其の淸冽なる泉に行くまでには恐るべきPhilistine人が居るから、思ふ樣にならない。併しながら、三人の勇者は、其の將を愛する念厚くして、決してこれしきの敵を恐れるものではない、水と言つても只の水ではない、David か年少の頃より食みなれた泉の水が欲しいのである。是に於て、三人は山道を分け下り敵陣を橫ぎつて泉に赴

き、それを背負つて再び大膽にも敵の中を恐び通うて持つて戻つた。之れを見たDavidは痛く三人の獻身的熱愛に動かされて、只の水ではあるが、さう思はれない。餘り尊くて之れをむざむざ飮むに忍びないで、斯う言つた、「此の神聖なる水が、勿体なくつて飮めうか、此の生命懸けで取つて來た水此の尊い血の樣な水が飮めうか、」と言つて、Davidは其の神聖なる水を神像に注いで、自分は一滴も飮まなかつたと言う事である。

遙か後の時代になつて、丁度之れに類した事は數多あるが、殊に有名なのはMacedonのAlexanderの譚である。此の人は甚だ組暴な過激な性質であつた、併し、一面には又高尙な寬厚な度量があつた。此の人が、僅十年前後の短時日の間に、當時の知られた限りの大世界を包羅して吾が一手の下に切り從へることが出來たと言ふのも、其の勇敢猛烈の獸力によりて許りでは決してない。半面の美しい性情が過半助けたのである。

男らしき行爲

を神に供へて祭つたと言うことである。

同じ譚がまだある。澳太利の建國者として名高い Hapsburg の Rotolf が激戰の后、渇に苦しんで水を得た場合に何うも皆が同じく苦しんで居るのに自分獨り之れを飲むことは忍びぬと言つて、飲まなかつたと言うことである。

又英吉利の Hilip Sidney が西班牙人と Zutphen に於て戰つて、股間に疵を蒙り、馬を馳せて退いて居る途中、自分よりもまだひどい負傷をして居る兵士に口ゴから水を飲まして遣つたと云う事も、献身的の美談である。

又、千六百五十二年から六十年を經てデンマルクの Frederick 三世とスキーデンの Charles Gustavus と戰爭した際、Flensburg といふ處の去る住人も兵士の一人であつたが、傷を負うて暫らく物蔭に息ひビールを飲んで居ると、側から敵のスキーデン人がこれも負傷して野原に横はりながら叫んで助けを乞うた。そこで此の丁抹方の兵士は側に立ち寄つた。すると、此の半死のスキデン人は不意にピストルを以て、此の深切な敵人を打つた。「苦生」と言ひながら、丁抹人は、「已れは貴樣に深切をしようとした。それに對して、貴樣は仇をする、全体ビールを悉くやるのであるけれども、半分しかやらぬ」と言つて、それでも深切にに半分だけは飲ました、戰終はつて、王は此の談を傳聞して丁抹人を近く呼び、何故其の樣な不埒な敵を助けたかと言つて尋ねたら、丁抹人は「拙者は死にかゝつて居る者の生命を奪ふことが出來ませぬ」と言つた。王は聞いて其の男らしい言に痛く感じ、お前は貴族たるべき品性を備へて居ると言つて、直ちに取り立てたと言ふ談である。

以上、皆武士の情とか、男らしい心とか言つて、高尚偉大なる品性の顯はれた行爲である、人は平時に於ては偉人と小人との區別が、甚だ認め難いものであるが「一朝危窮存亡」の場合に際すると、兩者の差別は、閃々として辨別し得られるのである。

第三回披露

三たび應募者に告ぐ

一、第三回目の「中學日記」を記述し寄送されし者の數、第二回目よりも四十五通の增加を見しは編輯同人等の愈々滿足するところにして、第二回目の募集に應ぜられし會員の大多數が、今回も亦た奮つて應募されしは、吾人の最も滿足するところのものなり

一、而して爰に一言審査者の粗漏を謝せざるべからざるは、第一回及び第二回を通じて募に應ぜられし芳名のうち、左の一子を記し漏らせしことなり、こゝに其の粗漏を謝す

東京神田　渡邊整氏

一、和文英譯問題「利益に遠ざかる者は傷害に近づく」の譯文最も正當なるものは次ぎの如し

A man far (フアー) from his (ヒス) good (グード) is near (イズ ニアー) his (ヒス) harm (ハーム).

七月四日の日記

長野縣御影師範學校　津倉亮一

（和譯）……心進めば足自から輕し

午前八時から修身、歷史、心理、生理の四課目を授けられ一先づ歸舍し午餉を喫した。午後一時から再び登校して化學、國語の教授を受けて寄宿舍へ歸る。いつもながら心理學は面白い中に明瞭に會得された。

（以上學校にて）

ドンヨリ曇つた天氣である。上杉君は脚氣の爲め今朝から缺課して神戸病院へ行つて診斷を受けた所が、よくないように云つたといふので、俄かに歸鄉することになつた、と、告別に來られた。僕は驚いた。實は君は假入學中なのだ。が、病氣なら詮方もない。君よ、心配せずにユックリ療養し給へ。寔に僕は唯だ二人の同鄉者を割かれて寂しい心地である。八鹿なる叔母の許から暑中休暇の時日を問合せられた。錦魚一尾親友に割愛さ

せた。

七月廿日の日記

石狩國　布廣秀太郎

（午前）南瓜に肥料を與へよと命ぜられ、母は南瓜の周圍に溝を堀る、それへ豚の糞を注ぐ、小豆畑の草を少し採る、未だ正午に少し早やければ中等教育を讀む。

（午後）桑をこく最中、父大聲にて大變だから早く歸れと云ふ、歸へつて見れば、昨日我が造りし「クド」のそこ薄くして火出で大事にならんとせしなり、危いことかな。晩までに漸く桑五貫目を採る、一貫目三錢五厘とは驚いた。夜岡田文學士の國語漢文批評を見て面白く可笑しき時、母は眠を覺して、未だ寐んか、と叱りながら灯を消された。

七月廿二日の日記

廣島市　大西卓爾

Going up to the school at seven o'clock A. M, there I soon recieved the remaining-examination on Physics and Chinese sentence which have been still my concern. The questions were unexpectedly proposed, but I plainly answered all of them with some easiness. From afternoon, as it was the last day of examination, we all the scholars greatly cleaned the class-rooms by sweeping and dusting in a great excitement, as if it were, for a while a fighting. After that has been finished, the school master made us assemble into a large lecture room, where he tolds us many essential things that we ought to keep in mind during the summer vacation, and thus finaly conducted a ceremony of shutting up the school.

I returned home before five o'clock with the lighter steps than usual. As there was yet a time to supper, I arranged the books which

had been deranged on and sides of my table during the days of last examination; while doing so, it made me for the first time feel most pleasantly with a mind free from care, as though a heavy burden has been taken down from the shoulder. After a good appetite of supper, I took a walk to a certain refrigeran place, where? had been quite refreshed, and coming back home at ten o'clock in the night, retired into my bed room to have a comfortable dream.

（この英文中文法上その他の誤謬なきにはあらざれど、ここには態と原文のまゝ訂正することなくして掲げたり、會員諸子試みに訂正して送られたし、訂正せる右英文は次號若しくは其の次の號に掲ぐべし……審査者）

八月二日の日記

名古屋市　長繩綱二郎

朝飯後赤塚町なる郵便支局へ行き四十一錢切手貯金として預け入れた。途中にて細谷氏に遇つた。氏は先日來三河地方へ避暑旅行中であつたが昨夜歸宅されたそうで、旅行中は餘程愉快なことがあつたと話された。そこで此の日午后七時に氏を筒井町の宅へ訪問したが不在であつて面會が出來ず直ちに歸宅した。

午前九時から正午まで日本歷史を復習した。天氣は前日から引き續き雨、氣候は八十度内外。早朝豊前小倉の西垣氏から葉書が到着した。要件は過日自分が送つた暑中見舞の返事であつた。午後一時ごろから百花園といふ古雜誌を讀みかけたが知らず〳〵の間に晝寢をして終つた。弟の信一に起され眼を醒したら午後四時三十分であつた、金六錢、筆二本を購入した。

午前六時十分起床、午後十時半就眠。

七月十八日の日記

豊前國　柏木純一

今日からはもう休暇だから、未だ眼を覺ますには

早いわと、まだ眠むたかつた心をはげまし蒲團の上に起きた。時は午前の六時。

井戸端で冷水浴。下女に迫るやうにして朝飯をしまい、裏の家へ行つて十枚ばかりの雨戸をみんな開けてしまつた、久し振りで掃除をした。そして涼しい朝風を受けながら、昨夜來た中等教育を讀んで居ると、比良君が二三冊書物を持つて前の川を渡つた來た。五高の寮の内幕噂、流行病の話、地方選擧運動の噂、在都先輩の動靜など暫く談して居たが、頓て談の種も盡きてまた讀書。そのうち母屋から午飯の知らせが來た。

午後また裏へ行つて、寢臺の上でやかましい蟬の聲を聞きながら小公子を讀んで居るうち眠むけがさしてきたので、これでは不可と思ひながら、つい/\。紅茶を持つて來て呉れた下女に起こされたのはもう日暮れであつた。裸になつて暫らく運動。夕飯後また停車場まで散歩。十時に寢た。

日記

月　日　曜日

學校にて	家庭にて

Aquiet tongue shows a wise head.
（以上の和譯）……

姓名　　住所

（右の英譯……）

（此の日記認め方の詳しき説明は裏面にあり）

和文英譯……容易に忘る人には容易に忘る

「中學日記」認め方

日々の日記を其の都度認め置き、他日の備忘に供するの必要なるは、殊更に云ふまでも無し。吾人は、既に其の必要を感じて日々の日記を認め居らるゝ學生諸君に向かひては、愈々之を勵行せられむことを望むと共に、未だ日記を認められしことあらざる諸君に向かひては、一日も早く之を實行せられむことを望むこと切なるが故に、其の奬勵の徹意を表せむとして、爰に「中學日記」を募る。其方法次きの如し。

一、此の紙の表面に印刷せる「中學日記」欄内には、諸君が日々各自に認めらるゝ日記の中比較的に記憶すべしと認めらるゝ一日の日記を選び、事實を飾らず、有りのまゝに認められたきこと。

一、和文英譯、英文和譯の問題を添付したれば、日記と共に其の譯文をも認め送られたし。但し、和譯の文体は、雅文、俗文、言文一致などの孰れを取るも隨意たるべきこと。

一、日記及び和英譯文共に最優等なるもの特に之を本誌に掲ぐべきこと。

一、此の「中學日記」用紙は毎號これを添ふべく、而して、十二ヶ月以上繼續して毎月此の日記を送られし諸君に對しては、特に、その名譽を表彰すべきこと。

一、應募期限は、來月十日を限りとすること。

一、住所、姓名、及び、月、日、曜日等必ず明瞭に認められたきこと。

一、東京專門學校出版部内中等教育會宛にて送付ありたきこと。

譚叢

西班牙幼帝と攝政太后

森おつか

こゝに世界帝王の幼時の第二として、お談し致そうと思ひまするのは、西班牙幼帝――――即はち當年の五月十七日を以つて、御成年に達せられ即日親政式を擧行されましたアルフォンソー第十三世陛下（Alfonso XIII）のお話で御座います。ところで先づお話の順序上この十三世陛下の御父上は何人かと尋ねて見ますると先帝即はちアルフォンソー第十二世陛下で御座いまして、御母上は墺太利のカールフエルヂナント親王の御女即ち攝政太后その御方なので御座います。扨て此の攝政太后は何のような御方かと申しまするとに、至つて近眼の御方では御座いま

したが、誠に氣の輕い面白いお方で御座いまして、その上、お心の誠に濟いお心がけの好いお方で御

アルフォンソ一第十三世陛下及び御母后

座いました。

攝政太后は此のように、誠に氣の輕い面白いお方で、言葉を換えて申しましようならば樂天家の方で在らせられましたから、世間普通の婦人等が外見だけを粧ふ「虛飾の微笑」ではなく、いつも〳〵恰も面白げな心からの微笑を浮かめられて居られたことで、如何な悲しい、心苦しい折にでも太后の御唇から微笑の影の消え失せたことは無かつたほどで御座いましたと云ひ傳へられて居りまする。それで、或る人が、此の攝政太后に拜謁いたしました折のことをば、次のように記しました。

『太后は御口元にも御眼元にも同じほどの微笑を浮められて居り、如何にも樂しげな御樣子に見受けられたことであつた。勿論暫らく拜謁して居るうちに、御口元や御眼元にこそは微笑み給ふとも、御心の底には、最も複雜した種々の御物思ひに充ち滿ちて居らせらるゝことも充分に判つたことではあるが、さるにしても、いかにせば、斯くも巧みに、御心の底の御物思ひを、樂しげな笑ひの影で消さるゝことの出來るものであるぞと、殆んど敬服の他は無かつた次第である。』

のみならず、話頭いつしか進んで、諸皇子のことに及んだときには、いよ〳〵笑み傾むけ給ひ、頓て幾枚となくアルフォンソー陛下の御寫眞を取り出し給ひ、彼と之とを比べられては、陛下の御健康が、果して何れほど進んだかと示されつゝ、微笑みとともに、如何に陛下は自由を重んじ、如何に好き性質を保つて居らせらるるかを說き示されることで有つた。云々』

攝政太后の言を借用して云ふまでもなく誠にアルフォンソー十三世陛下は、先天的に好い性質を保たれ、大に自由を重んぜらるゝことであるから、西班牙人は擧つて、陛下を敬愛し奉らぬものとては無いと申す有樣で御座います。かく一般人民から頌る敬愛をお受け遊ばすことは、丁度先王十二世陛下と同樣で御座いまする。が、陛下の御容貌は、どちらかと申すと、母御なる太后に好く似て居らるゝと申すことで。それで太后同樣、いつも樂しげな御樣子を遊ばして居らつしやると申し傳へて居りまする。が神ならぬ人間に於いては、いかなる人も遁かれることの出來ぬ缺点――その缺点は此の陛下とても保つて居らるゝことで御座います。

何を申すも、極めて柔和な事物に熱心な、そして極く〳〵敏捷な御母上から、極めて熱心に教育を受けられた陛下のことで御座いますから、いかにも柔和な性質を保つて居られ、その國家を熱心に愛せられ貧しきもの弱きもの等に對し、充分の同情を保つて居らるゝことは、これ疑ひもないことで御座いまする。されば、たとへ此の立憲王國たる西班牙に於いて、王者が權力を伸すのには、充分の制限があるとは申すものゝ、後來は極めて強い勢力を此の王國のうちに占めらるゝであらうとは、われ人ともに疑はぬところで御座いまする。

太后は斯くの如く、熱心に陛下を御教育になつたことで御座いまするが、此の陛下も既に御成年に達し、親しく政治を聽かるゝようになられたことで御座いまするから、此の陛下のます〳〵生ひ行かるゝ末を樂まれつゝ、王宮に程遠からぬあたりに、近く太后は家居を搆へらるゝにや、承り及んで居りまする。

高田屋嘉兵衛

町田藍川

前々號に引き續き申述べます。高田屋嘉兵衛が利格兒土に捕はれて、彼得斯科の港に着きましたのは、今より九十一年前、文化九年の九月十一日（陰暦）で御座ります。此彼得斯科と云ふ港は、東察加半島の南端に位して、陰暦九月頃には、最早氷雪皚々たる銀世界。露西亞人が、北米アラスカ地方を開拓するに就て、船舶往來の休憩場になつて居ますが、冬向になれば海陸の交通も全然停つて了ひます。乃で利格兒土の一行も、嘉兵衛主從を上陸させたまゝ冬籠り、只今なれば東察加位、何も珍らく程でもありませんが、九十一年前の日本人としては、突然斯う云ふ遠い寒い處へ攫はれて來ては何樣心持で御座いませう紅葉のあるに雪が降ると箱根靈驗の初花の口眞似位では追付ません。

* * * * *

嘉兵衛が上陸して旅宿に宛がはれた家は、竪十五間に横六間、室數が八個あつて、其内一番廣い座敷へ嘉兵衛を入れ、利格兒土も同室で、起臥を共にして居ましたが、利格兒土と云ふ男も、餘程大膽な人間で御座います。尤も英雄は英雄を知り、肝膽相照せば、胡越も兄弟の如しで、最初嘉兵衛を捕つた時から、此男は信義に篤い剛勇無類の者と、利格兒土は早くも其人物を愛し、艦中に於ても種々話を仕て見れば、如何にも敬服すべき器量と、朝夕の挨拶も丁寧にする處から、嘉兵衛のはうでも、其雅量に感服して、此港へ到着してからは、双方の意氣相投合して、互に天涯一知己を得たりと思つて居るので、怨を忘れて共同生活をするやうになつたので御座います。

嘉兵衛の考へでは、元より俘虜になつた事だから穴藏のやうな牢屋へ叩き込れて、食物も碌々與へず、手酷い目に遇はされる事と豫て覺悟を極めて居た處、存外廣大なる旅館で、船長の利格兒土と

同樣に取扱はれるので、少々薄氣味の悪い氣持、宛然夢を見るやうで御座ります。尤も食物だけは利格兒土一行、其人數を算當して、本國から取寄せ貯藏して置くので、嘉兵衛主從に分配する事は出來ません。又分配された處が、喰べ付ないものでは辛棒が出來ないと云ふので、勝手に自炊と致しましたが、此土地は穀類は一切ありません、夏の季節に魚類を捕つて、乾固めたり氷漬にしたりして、日常の食物にするのだから、米味噌類は嘉兵衛の持船より、僅少ばかり運んで來た品を用ゐて居ました。併しそれを喰て了つては後のお代りが無いから、主從相談の上、朝は粥を二椀づゝに燒味噌少々、午餐は通常の飯を炊きて二椀、晩に冷飯一椀、魚類は三日に一度、其外一切口に入れざる事と、嚴重なる規則を立てましたが、櫃權を握つて、板子一枚下は地獄といふ荒稼ぎ、一升飯を一度に喰つてもまだ腹の皮が緩んで居るといふ人間には、隨分辛い事で御坐いましたらう。

こゝに一ツ可笑い話があります。東察加の土人等が嘉兵衛の事を聞傳へ、今度ヂアナ號の艦長が、日本と云ふ國から歷々の役人を連れて來たといふから一番見物して來やうと、日々嘉兵衛の旅宿を取圍んで、ソレ彼方の窓へ首を出した、ヤレ此方のはうへ茶碗を洗ひに來た、とバア〳〵分らない語で、指しをしたり、笑つたりして居ますが、嘉兵衛こそ容貌並に優れて立派な人物で、貴い身分と云つても差支へありませんが、隨いて往つた吉藏、金藏、平藏、文治郎の四人に至つては、色の眞黒な、護摩壇の不動から、剩錢を取りさうな顏色で、口は鰐口、目は鯨、加之に鼻は獅子の洞入、まるで動物園の案内をするやうな顏色だから、あれが日本で身分の貴いお歷々か、イヤハヤ日本と云ふ國は、不細工の面ばかり揃つて居る處だと、云はれやしないかと、四人の面々、湯を沸かして顏を洗ふやら、髮を撫付るやら、口を雫めて、鹿爪らしく、威儀を取繕ふ有樣、お爨どんが俄に嫁

いりをするやうな滑稽で御坐いますが、今更生れ付の醜男が、急に立派になる譯には往きませんから、銘々鏡を眺めて、愚痴を並べる騒ぎ、馬鹿氣て居ます、是も始終嘉兵衛から『日本の恥になる事があつてはならぬ』と云はれて居た故で御坐います。

＊　＊　＊　＊

偖右のやうな次第で、一月餘り經ッても、利格兒土は唯普通の世間話ばかり致して、別に嘉兵衛の身に就ては何の沙汰もありません。又一ッには何の話をするにも通辯が居なければ、双方の語が通ぜず、通辯と申した處で、ほんの寒い熱いの挨拶に少し毛の生えた事しか話せませんから、胸中の秘密を打明けて膝組の談判をするなぞといふ事は夢にも見られません、それで嘉兵衛も大に焦燥込んで居ますと、こゝに利格兒土の側に阿利加と云ふ十二歳の男子が居ました。此子は年に似合はぬ怜悧な性質、學問も割合にしては能く出來るはらで、嘉兵衛とは無二の親友となり、日本語を教へて呉れと云ふ望み。嘉兵衛も喜んで日本語を仕形話から教へるうち、此方も露西亞語の一ッ二ッ覺えて來ました。熱心ほど恐ろしいものはありません。段々阿利加と語學の稽古を積み、三月餘りの間に、どうやら訛言交りの露西亞語で意思を通ずる程になりました。そこで阿利加を益々可愛がッて十分此方の味方に引入れ、利格兒土の不在毎に露西亞政府から利格兒土の許へ遣はした公文書類や何かを引出し、阿利加に讀ませて再び故の處へ藏ッて置きますので、露西亞政府と利格兒土との往復書狀の大略も解り、今まで知らない事情まで悉皆知れて見れば、露西亞は全く日本に對して、別に野心のあるのでも無く、貿易が目的であるばかり、それを日本では露西亞人とさへ云へば、人の國を頭から鹽を附けて喰ッてしまふかの如く考へて居るのは大間違、罪も無い哥老尹を松前で窮命させて置くとは、不道理千萬と心附きました。

そこで嘉兵衛も深く思案しまして、其年十二月八日の夜半頃、俄破と飛び起き、鼾の聲酣なる利格兒土の枕頭に立ちはだかり、

『利格兒土殿、利格兒土殿、話があるから起き下され』

露西亞語で立派に遣つて退けたから、利格兒土も誰か知らんと、睡い目を摩りながら熟視すれば、何ぞ圖らん枕上に嘉兵衛が突立ッて居る。

利『ヤア嘉兵衛殿　今頃何の用事』

嘉『外でも無い、日露兩國多年の葛藤を斷ちて、足下の頭と仰ぐ哥老尹の縲紲を解き、再び足下等と再會させる手段に就て、篤と相談する心算で、お睡い處をお覺し申した、實は疾うから其心はありながら、語が解らん爲めに猶豫して居ッたが、今日では聊か露西亞語にも通じたれば、一刻も早く足下の意中を伺ッて、其上此嘉兵衛も一働きする覺悟』

これを聞くより、利格兒土も喜色滿面、臥床を離れて、椅子に腰掛け、一禮を施して。

利『流石は嘉兵衛殿、只今の御一言感服々々、此上は何卒君の働きで、哥老尹の命が助かるやうにお願ひ申す』

嘉『それは何處までも遣り遂る心得で御座るが、一体貴國も無法千萬、先年フオストーフと云ふ者を遣はして、樺太、國後、擇捉其他へ亂暴、役所を燒き拂ひ、番人を捕虜にし、剩さへ米穀物品を掠め取るなぞとは、盜賊同樣の致し方、さればこそ我日本にても、露西亞は强慾無殘の泥棒國よ、今度來たらば打拂へと、嚴しき下知を傳へて、國の守を固めた處へ、乘り込んで來た哥老尹、之を捕へて其國の罪を糺すも、少しも無理は御座るまい。されば此葛藤を解かんには、貴國より前の罪科を償ふだけの禮義を以て謝罪するより外に道無し、如何で御座る利格兒土殿。

嘉兵衛は威儀を正して、裁判官の宣告の如く、儼

然として逃べ立つれば、利格兒士は大に驚き。

利『嘉兵衛殿、少しお待なされ、其フオストーフと云ふは無頼の曲者、取るにも足らぬ奴なれど抑も事の原因を尋ぬれば、貴邦政府の所置も宜しくない、何となれば先年我國皇帝陛下より、侍從レサノツトを御名代として、貴邦へ差遣し商業貿易の事を申し入れたる處、長崎奉行を始めとして、其取扱ひ方禮を盡さず、皇帝陛下の御名代に應對する道を失ひたれば、レサノツトは憤懣遣る方無く、歸途阿哥斯科府に於て彼のフオストーフに顚末を語りしより、フオストーフも、レサノツトの恩誼を蒙りし事あれば、復讐として貴邦へ對し、左る亂暴を働きたり。又レサノツトは貴邦に於て侮辱されしを口惜しがり、狂ひ死に死したる程にて、フオストーフは官命にも非ざるに、他國を抄略したる廉で、阿哥斯科府の長官より、嚴譴を受け帶劍を奪はれ、水に投じて果敢なくなりたり。それを改めて謝罪せよとは、餘り御勝手では御座らぬか。

嘉『然らばフオストーフの亂暴は、貴國皇帝の御存じ無き事とナ』

利『お語に及ばず』

嘉『併しフオストーフも、露西亞國の民なれば、其罪科は皇帝陛下の知ろし召さゝる所とは云へ御政治向不取締の責は免れゃすまい、又レサノツトに對して、日本の諸役人が無禮の條々、國柄が違ッて、今まで一度も往來せし事も無ければ、禮義作法の手違ひは自然の道理、それも我邦の天子將軍には御存じ無く、奉行其他下役人の不行屆にて、貴國に於てフオストーフの罪は皇帝陛下のお構ひなしと、遁口上を申さるゝと同樣の事、それでも日本は勝手我儘の國柄と仰せらるゝか、如何に』

一步も退かぬ嘉兵衛の議論に、利格兒士も語無く暫く沈吟の体でありましたが、忽ち顏色を和らげて、

利『成程左樣承れば、貴邦にも一理あり、此上は彼是と云ひ募らんより、我は阿哥斯科に赴きて長官と相談の上、貴邦へ對し謝罪しながら君と同伴して、哥老尹の命乞を致したく思ふなり。其時は是非共君のお働きにて首尾能く』

嘉『不束なれども高田屋嘉兵衛、其邊の御氣遣ひは御無用、貴國に於て謝罪するとなれば、萬に一ツの仕損じは仕りません』

利『それでは何分お賴み申す』

と利格兒士は、其翌日乾坤一白、皚々たる雪中を厭ひもせず、阿哥斯科指して發足致しました。考へて見ればフオストーフの狼籍も、日本が國際上の禮義を知らぬ爲めに招いた結果で、罪は五分々々、それを嘉兵衛が云ひ廻して、向ふから謝罪狀とまで、濟付た口先は、感心なもので、實に立派な外交官の腕前イヤ口前で御座います。

* * * *

利格兒士が發足してから二十日程經つて、文化九年の十二月二十八日、利格兒士の留守居役オロタコフと云ふ者の許へ聖比得堡より急報がありまして、五六人の役人が寄り集り、披いて見るより一同は顏色青ざめ、互に目ゝ目を見合せ、低聲にて戰爭の話をする樣子なれば、嘉兵衛心の中に、これは何か大變が起つた、事に寄つたら日本と露西亞の戰爭では無いかと、騷ぐ胸をヂッと鎭めて例の通りオロタコフの不在に、阿利加に賴んで、急報を取出し見れば、此年四月以來露西亞は佛蘭西と戰端を開き、屢々敗北して、都は大騷動、佛帝拿破崙一世、古今未曾有の大軍を率ゐて、莫斯科へ攻め込むと云ふ報知で御座います。さては沒人等の愕然したも無理ならずと思ひましたが、此戰爭が續いては、哥老尹一人位で揃つてゐ居られまい、利格兒士も本國の危急存亡と聞いては、再び此土地へ歸つて來るやも覺束無し。すれば此身主從も何時此處を免れ出でらるゝ事かと種々に心配して居ましたが、年も改まりて文化十年正月二

十四日利格兒士は東察加の地方長官に任ぜられ、新らしき辭令を懷中にして、彼得斯堡へ歸て來たので、嘉兵衛も幾分か安堵しました。

＊　＊　＊

嘉兵衛は元より身体も壯健なり、養生も宜しう御座いますから、幸ひ風土の障りもありませんが、供の吉藏、文治郎、金藏の三人まで病氣となりまして枕を並べ、呻々吟つて居る始末、ヂアナ號軍艦付の醫者を招いて、治療を致しましたが、其甲斐もありませんで、二月二十四日文治はとう〳〵息を引取りましたから、嘉兵衛も泣く〳〵、春月浮命信士といふ戒名を附け、船中の例に從つて水葬を致した處、續いて二月二十八日吉藏も果敢なく、異鄕の鬼となり、西行佛信居士と戒名を附けましたが、其心の中は思ひやられて、哀れな有樣で御座います。後に殘りたるは金藏、平藏の二人のみ、心細い次第ではありませんか。

嘉兵衛は其後金藏平藏に向つて、如何に下人なりとも、日本人として萬一の時、餘り見苦しき擧動の無いやうにと、外に人氣の無い折を窺つて、有合せの棒切を取つて、劍術の心得を敎へ又圍爐裡の灰を掻き集めて、彈藥を製する事を工夫しましたが成功しませんから、銃獵に行くから鐵炮を貸して呉れと、利格兒士に强請て、銃を肩に野山を驅け廻り、十發打つ處を一發打つて、彈藥を貯へ窃かに秘して置きました、其心底は若しも利格兒士が前の約束を取消して、此まゝ自分等を棄て置く時に、主從三人切死して、流石は日本魂のある人々だと、北海萬里の隈に勇ましき名を留め、日本の國威を輝かさうといふ準備で御座いました。

＊　＊　＊

處が利格兒士も信義を守りて、嘉兵衛を日本へ送り還さんと、文化十年五月六日一同ヂアナ號に乘り組み、漸く日本の空を指して出帆する事になりました。或日船中で利格兒士は嘉兵衛に向ひ、

利「如何に嘉兵衛殿、君は航海の事より立身致したと承はるが、定めて船の搆造なども精しからん、さればこそ毎日々々船体諸機械にお目を注けて、圖取などして居らるゝが、歸國の後に此樣軍艦を造つて我國と開戰でもするお心掛か」

嘉「それは仰せらるゝまでも無し、若し兩國の戰爭となれば、此船よりも猶一層新工夫の大軍艦を造り、へ高印の旗を押立て、我其大將となつて、足下と海上に相見えん、今こそ捕虜同樣の身なれど、其時は足下を始め士卒まで燒打にして、鏖殺にする覺悟で御座る、それが恐ろしければ此場に於て、如何にともお心任せ」

と大言を吐きて呵々と打笑へば、利格兒士も腹を抱へて笑ひました。兩人の胸中實に洒々落々たるもので、少しも敵意を挾むとは見えません。五月二十六日ヂアナ號が國後島へ漕ぎ寄せ、見張の番所より二十町も隔つた處に錨を下し。嘉兵衛は利格兒士に請ひ上陸せんとするに、利格兒士は肝心の哥老尹が、存命で居るか否を疑ひ、萬一哥老尹に死れては、是までの苦心も水の泡と、胸中煩悶して居ますから、容易に嘉兵衛を許しやせんで、唯平藏金藏の二人を上陸させる事になりました。嘉兵衛は少しく焦燥る氣味で、二人を短艇に載せ自分から髮の毛を握つて髻をプツリ斷切り、刀と共に投與へ、

嘉「それを持つて早く陣屋へ往け、萬一兩國の和議破れ、哥老尹が免されなければ、我は日本の士は二度と踏めぬ覺悟、其時は此二品を形身として本國へ屆け呉れよ」

と大聲にて云ひ渡せば、二人は呆氣に取られ、

嘉「それでも旦那一人を殘して、私等ばかりおいとは」

嘉「イヤ乃公は乃公だけの考へがあるから、躊躇しないで早く往け」

と烈しき下知に金藏平藏の二人詮方なく、主人の身を氣遣ひながらも、久しぶりにて日本人に遇へる事とて、短艇を漕いで陸路に向へば、利格兒士

は又哥老尹の樣子を早く聞きたさに、通譯官に命じて大音聲。

『汝等二人の中一人は、明朝までに哥老尹の生死の程を聞糺し、短艇に乘つて此處へ來れ、左も無ければ汝の主人嘉兵衛を、再び連れ歸り、阿哥斯科の牢屋に入れ、屹度窮命させるぞよ』

と云ひ付ければ、二人は早く陸路へ上りたし、併し哥老尹とやらが生きて居るか、死んで居るか、こゝが主人の命に係はる大事の處、如何はせんと左思右想、陸と船とを見比べて、太息を吐きながら櫂持つ手はお留守の樣子、嘉兵衛は又も聲張上げ

『早く往け』

怒鳴り立てたる其聲に、千尋の海に潛める鯨も、目を廻す程なれば、二人も今は斯うよと斷念めて汀を指してエッサッサ。

嘉兵衛は後を見送つて莞爾笑ひ、利格兒土に會釋して、氣分惡しと甲板の上に踏圖引被つて高鼾、程經て目を醒せば、利格兒土側に在り、嘉兵衛は

容を正して進み寄り。

嘉『利格兒土殿、足下は先刻金藏平藏の二人に向ひ、哥老尹の生死によりて、我を再び連れ歸ると脅したナ、伯得斯科に於て足下は何と云ひしぞ、よもやお忘れにはなるまい、兩國の和議を執計ふやう、是非賴むと云つたではないか、然るに今日我上陸を拒んで、再び連れ歸るとは何たる御了簡、哥老尹が助からざれば、兩國戰爭に及ぶも苦しからずとのお考へか。一人の友達を庇つて大事な國を忘るゝ愚かさ、笑止千萬。好し其お心算なれば、我も覺悟がある、再び和議の事は云ふまい。先度は四十餘人の船子に、怪我過失のあるを恐れ、神妙にして捕へられたが今は我身一ツを棄つれば埒は明く。何とて再び生恥を曝しに阿哥斯科くんだりへ往くべきぞ』

と跳り上つて、蒲團の下より一袋の彈藥を取出し利格兒土に示し、

嘉『是は日外貯へ置きたる彈藥、此船を燒き拂ふ

には十分なり、燧、火繩もこゝにあり、まさかの時の用心に藏ひ置いたものなるが、罪の無い水夫等に怪我をさせるも氣の毒、寧その事利格兒土殿、足下と一騎打の勝負して、結局を附けん、さア來れッ』

と兩袒脫いで、氷の如き短刀を握り、立ち向へば利格兒土も惘ッとしながら、兩眼を閉ぢて暫く沈考、ソレと見るより船中の從卒、水夫楫取まで百名近く總出にて、利格兒土の身を大事と、ムッ取り捲き、銃劍を嘉兵衛の肌に擬しましたが、徵愕とも仕ないで、睨み詰めたる顏色、仁王の再來と怪しまるゝばかりで御座います。利格兒土は部下の者を制して、

利『あゝ嘉兵衛殿、君の剛氣と正直は、元より知つて居たれど、個程までとは今更感心仕つた、其器量あれば、兩國の和議も氣遣ひ無し。哥老尹の事は兎も角、一先君が上陸して萬端宜しきやうお願ひ申す』

高田屋嘉兵衛

と云ひながら、筆を執りて認めたる露西亞文字を其頃の文體に改むれば、

先年フオストーフ日本御支配蝦夷島へ寇し、御仕入物を盜み取り燒拂ひ、其上番人を捕へ候段甚不埒の始末、此度高田屋嘉兵衛より篤と承り驚入候、委細之儀は嘉兵衛へ相賴み、幾重にも誤り可申候間、何卒被二生捕一居候露西亞人、速かに御戻し被下度奉願候、尤もフオストーフ儀は町人商船にて、我等一向右の始末も委敷存知不申候、別文の通り嘉兵衛へ能く賴み遣はし候間宜敷御奉行樣へ、御取成被下度奉願上候以上

千八百十三年六月九日

かひさつか役人　りこるそ

くなしり島御詰合御役人中樣

此書面を携へて嘉兵衛、愈々上陸の事と決定致し利格兒土と祝杯を擧げ、醉に乘じて高砂の曲を三遍謠ひ、悠然としてヂアナ號を立去りました。東察加の多寵りに引替へて、朝日に匂ふ敷島の、櫻

花咲く春の心地、名も高田屋の大和魂、實に立派なものでは御座いませんか。

＊　＊　＊　＊

それより高田屋嘉兵衛は國後役所の役人に面會して松前奉行服部備後守、荒尾但馬守の指揮を受けて兩國の和議を整へ、八年間松前の獄中に俘虜となりました哥老尹以下七人の露西亞人も、恙無くヂアナ號へ復歸する事になりまして、利格兒土の喜びは如何ばかり、船中一同嘉兵衛の信義に感じて、高田屋とも嘉兵衛とも云ふものはありません、大將々々と神の如くに敬ひ、躍り狂つて嬉し泣に、おい〳〵泣き出す者もありました。

＊　＊　＊　＊

嘉兵衛の故郷でも、最初露西亞人の捕虜となつたと聞いて、老母は心配して病に臥す、妻は良人の無事を祈るために、日本廻國の巡禮に出で、無二の友なる某は、嘉兵衛の冥福を願ふと云つて、出家になつた騒ぎ、其處へ古來稀なる功名を建て、滿足で歸國したから、其驚きと喜びは、又一騒ぎで御座いましたらう。今日なれば全國を動かすやうな歡迎會を開いて、國旗の相場が狂ふ位でありますす。其後幕府より嘉兵衛への御褒美として申渡し。

定雇船頭

一金五兩　　高田屋嘉兵衛

其方儀去秋、露西亞船くなじり島へ渡來の節船長へ申諭方骨折、猶又再渡來の節、彼是取扱候に付書面の通爲二手當一爲レ取レ之候

是丈の艱難苦勞をして、金五圓は少々お安いやうでありますが、幕府に取つては非常の特典で、將軍より直々の恩賜、老中の手を經て下るのだから容易では御座いません。又幕府より七十俵の扶持を賜はり、本國阿波の藩主蜂須賀家よりも苗字帶刀を許されましたが、嘉兵衛は生前、一度も苗字を名乘つた事はありません、此一事でも如何に奥床しい人物であつたかと云ふ事が解りませう。

左程の豪傑も文政十年四月五十九歳を一期として病歿致しました。九十餘年前に外國まで押渡り、文明的大活劇を演じた大偉人、今日なれば華族に列せられて、貴族院議員になる資格は確かに受合其他種々な話もありますが、先づ是で御免を蒙りませう。永々御退屈樣。

通信

㊀帝國青年議會名古屋支會の情況　本會は東京神田帝國青年議會員にして我名古屋地方に在住する者の組織せる一團体で智識の交換詩歌文筆の習練品性思想の養成を目的とし本部の認諾を得て設立されたもので毎月一回宛開會前會目的を貫徹しつゝある(愛知縣會員某)

㊁川邊字南山青年演說會の情況　近時教育大に進歩し山間僻地に普及し南山に青年演說會なるものが組織せらるゝの機運に達せり加藤鴻吉君を會長に仰ぎ目下會員拾余名皆熱心に相磨勵しつゝあり集會は毎月二回若しくは三回にて回を重ぬるに從つて益々隆盛に趨けり各地方に珍らしき現象なり(備中國會員加藤局一)

㊂山梨縣第一中學校の情況　本校は校長大島正健氏其他教官十九名、生徒は四百七十余名あつて、甲府市舞鶴城内にある。本年の卒業生中官立學校へ入學した者は都合九名である。職員生徒の組織してゐる校友會は學術部、編纂部、運動部に分れて居て、學術部は演說討論等で年に二回位總會がある。編纂部の手で年に三回位校友會雜誌が出る。運動部では柔道、撃劍、遊戲を奬勵して年に二回運動會をやつてゐる(山梨縣中學校(H.O生)

㊃長野夏期體操講習會講師慰勞茶話會　八月廿四日午後一時から長野㊟師範學校に於て開かれ、講師師範學校教諭鈴木毅、山田春耕外諸氏、會員三十余名の出席あり、講師の演說、會員の謝辭及、地方各地の物産等の問答ありて和氣藹々たる中に散會せるは午後三時二十分なりき。(長野縣上水内郡柳蔭)

無線電信

鳥巡生

今迄は海底電信と云ふと大層な發明のやうに思はれて居たが、其は發信者も受信者も一導の線金の仲保で、什麼か恁か通信し合つたのである、處が此に線金などの聯絡なく、一方は唯線金を棒の先へ出して着けたのが立つて居ると、一方ては空中に紙鳶を飛して居る、其他裝置の無い事は無いが海底電信などゝ比ふれば實に僅少のもので費用も掛らぬ、それで自由に又迅速に太西洋を隔てゝ、いやそれ處ては無く世界の何處にても通信か出來ると云ふ、之がマルコニ發明の無線電信である、初にマルコニは二百五十哩斗を隔てゝ試驗して攻功したが、其時分ですらその八倍の間隔に成功しやうとは思ふものはなく、著名な學者發明家も英米間の通信などは不可能事として信じなかつた、處が兎に角遣て見た結果、發明者より世界全体が其利を享くべき成功を目撃する事となつた、實に驚嘆の至に堪へぬ

マルコニ氏肖像

マルコニは隱然と千九百〇一年十二月六日に助手のケンプ、ペジエットの兩人を隨へてニューフオンドランドのセントジョンスに上陸した、それは先つ其の乘て來た大西洋滊船が三百哩沖中へ出た處で通信の實驗を爲るつもりなのである。マ氏はセントジョンス市より半哩斗離れた港口の番兵の立つて居る信號兵の傍の兵營の室に器械を据付けた、その器械の裝置は極めて簡單なものてある其から三日目に徐々實驗の用意に掛つた。水曜日即ち十二月十日に風の速力を觀る爲バーデンポウエル形に造つた(圖の紙鳶は其なり)骨は竹で絹を張つた九呎大六角形の紙鳶を揚け、それから十四呎の水素輕氣球をも騰けた、此等は畢竟、送電を受けるのに用ひる爲である、處が輕氣球が中途で破裂して了つた。

翌木曜日此日は何か音信があるだらうと待望んで、又紙鳶を騰けた。風は激しかつたが却て好都合で約四十呎斗の高さに紙鳶は揚つたので、それ〳〵の手配をして嚴密に試驗しやうと構をして居た。

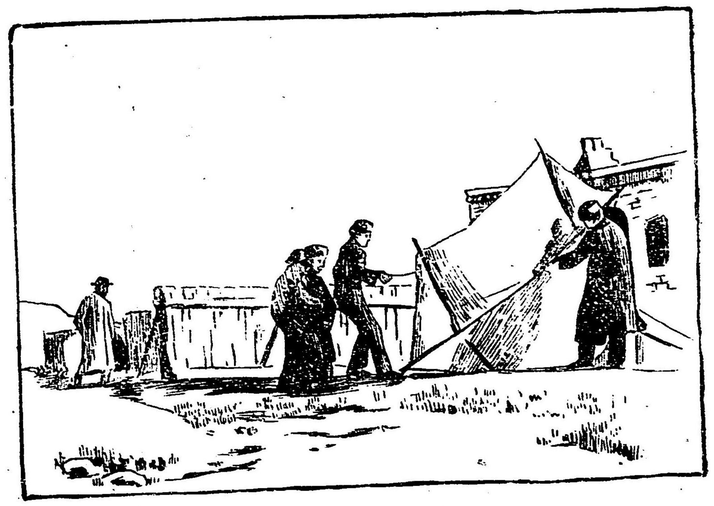
千九百〇一年十二月十二日木曜日の正午から、マルコニは例の兵營の下の室に外部から引いた電話の受聽器を耳に附けたまゝ坐を占めた、もう對岸の通信が初まりさうなものだと考へながら待つて居る彼の心は頗る苦惱で、此の擧一度失敗に終ればそれ見た事かと冷笑の中に今迄の苦心を水泡に歸せしむる譯であるから有繋に堪まらぬ心地にも成つたらう。前の机の上にはその受信器を据えて一心に見戍つて居る、窓を通つて一條の線金の器械から杆と紙鳶とに續いて居る、共に外に飛揚し又は建てられてある、此日は風も隨分激しい寒濕の天候で、場所の位置は北亞米利加州の最東端ケープスペーアが突出して灣をなしその怒濤の聲凄じき海を下にし三百呎の斷上である。前面漫々たる海洋英國の海岸を隔つる事二千哩、噫誰か曾て此の間隔を一の線金もなく通信し得べしとは想

像だにしたものがあつたらうか。

部屋の中にマルコニと助手ケンプと唯二人萬事要意を整へて何時でも通信御座れと搆へて居る、殆んど半時間ばかり室内死せるか如くに静かに極細微な音も聞かさぬやう注意した、蓋し時間を計ると最早何かしら通信の來る頃なので氣が氣では無い折である。不意にコヒラ（受信の要具にして後に説明す）に微かな響かした、それは通信では無いが何か感電の一徴候で、發明者の心には正に暗夜一道の光明を認めたも仝様マルコニの顔は嬉しさに紅くなつた。

「ケンプ君何か聽えやせんかね」

ケンプはマルコニと共に耳を澄まして居ると、少し經つて微かであるが確かにS（……）と響いた此は初め助手達とマルコニが約束して通信の初には此の符號を用ゐる事にして置いたのであつた。確に英國の海岸から送つた合圖に違ない。十分を經過して又通信があつた兩人共天に昇つた心地で



喜びその符號を再三檢査し間違て無い事を認め得た、此時受電線の附て居る紙鳶は一處に飛翔して居ず風に動されて上下左右に搖れて居たが廿分を經た後他の通信が來た。

所で先つ問題が歸着したのである、無線電信は大西洋を隔てゝ確に成功した、マルコニの顔は歡喜に滿ちて丘を降つた。

此の事が成功したと云ふ事が傳はるや直にニユーフオンドランドの知事サーカベンデッシユ、ボイルは英國エドウワード皇帝に其旨を上奏した、海底電信大に驚慌を來して其株式は暴落し初めたと云ふ始末。

此の成功の諸方へ通報されると色々批評するものや嫉みの惡口を放つものもあつた、然し例の發明家エヂソンは、此が他の人の報告なら信しないがマルコニ君が自身で試驗した結果を自身の口から成功だと報ずるのなら確であると言つたさうである。

偖て此の通信法の理屈の概略はと云へば、唯だエテルを通透する電氣の波動を應用すると云ふに過ぎぬので、送信者が或る方法で此方から電波を起すと其を受信者か器械で受けるのである。一体エテルと云ふものは神秘的の物で、見えもせぬ無色無臭のものだが宇宙の如何なる部分にも瀰滿して居る不可思議の氣で、此か其であると證明して見せる譯には往かぬが、此か無いと云ふ日になると説明の出來ぬ事か幾多も出て來る、丁度無神論が其自身或は説の成立つ事かあるかも知れぬが、有神論てなくては到底説明の出來ぬ事か幾多もあるやうな俱合である。それで此のエテルには波動のあるものとしてある、即ち或種の波動は光線を與へ或種は熱を與へ又或種の波動は電氣を與へる假令は色の場合で一秒時に四千億波動を起すのが赤色で、其二倍の波動即ち八千億のか紫色と云ふ風、凡て色は此の波動てある、それでマルコニが用ゐたのは一秒時に二十三億波動する電波を應用

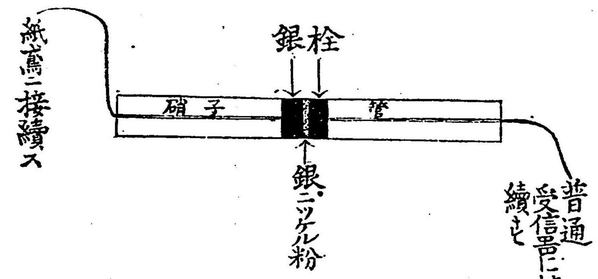
したのである、エテル波は空氣に攪亂され無いから風などに妨げられる心配は無い。空氣は唯音響を波及する丈で空氣が無くても光と熱と電氣は働く然し音響は傳へやうが無いのである、尤音響もエテルを透して働く他の三者と比べると實に遲いもので、雷の鳴る時電光は刹那に來るが音は餘程經てから來るのを見ても知れる。

電氣と云ふのは竟りエテルの或種の震動の別名である、能く人は電氣か電線を流れると云ふが、流れると云ふより線金の微分子間を波打つて行くと云ふ方か至當で、丁度靜な池の中へ石を投ると水は流動しないが波か出來ると全し理屈てある。水波は見えるが電波は目に見えぬ、然し電氣學者は其を自在に用ゐて今迄も電信を受送するやうに工風した、處がエテルの波動は電線にのみ波動するとは謂へない、何處にてもエテルがあるとするならは海底を電氣か線金て通るやうに空中を否山を透しても波動する譯である、電線か無くとも電

信は送受し得べきものである、と云ふ理論からマルコニは大に工風を凝したのであるが、先つ第一に困つたのが其電波を正確に又全しやうに出す器械と其波を受取る器械の裝置を案出せねはならぬ事であつた、勿論遠距離での問題である。

マルコニは伊太利亞の人で其父は地面を廣く所有して居るので、其處で色々試驗した結果電池から特別な波を起すやうに工風し其波を普通の電信符號のやうに用ゐる裝置を案出した。それから受信器の方は苦しみ拔いた末伊太利亞人のカルゼッキと云ふ人か發明し佛人ブランレと云ふ人が改良を加へたコヒーラを應用すると難無く出來る事に考付いた。

コヒーラとは鉛筆位の太さの管で長さは約二インチばかりの物である、其中央部に西方から銀が狹つて居て銀と銀の間にはニッケルと銀の粉末が充めてある、其兩種の粉は電氣の波を良く導くのと導かぬのと性質を異にして居る、此に線金が西



圖のラヒコ

方へ結付けて管の中を通つて居る、簡單な器械である。それで送電器から來た波は受電の爲に騰げて居る紙鳶とか建て居る棒とかの線金に當ると、其から直に普通電信機に點字を捺させる丈の强い力が無いのを此コヒーラに一遍受けて中のニッケルと銀の粉を引く力は充分ある、即ち此の粉を電氣の力で結付ける、其の結付く瞬間は良導體となり其と同時に此方の電池の電流が直に通つて普通電信機を動かし点なり線なりを書くと云ふ裝置に成つて居る。電波の途切れると粉が不良導體に成つて此方の電池の電流か止まる、又波が來ると前のやうに導體に成る、此樣のが早く續いて点字の通信法が行はれるのであります。

一寸言へは先つ右のやうなものであるが、何にしろあれ丈の發明であるから、その詳細の事を說明するとなか〳〵大變なものである。今は先つ此れだけにして置く。

二小話

小塚空谷

▲狐と猫

ある日の事でありましたが、一疋の猫があつて、去る林中で一疋の狐に出會しました。處で猫は狐がこの世では善き地位にも居るし、且つは才智深くて色々の經驗もしたものと思ひました故つとめて慇懃を盡くし、誠に丁寧に挨拶などをしまして偖て云ひますには

ヤア狐君、今日は善いお天氣で。御機嫌は如何です、近頃は如何御暮しですか。別に御變りもないやうで結構ですな

斯くまでに猫が丁寧に言葉をかけましたのに、高慢ちきな狐は、己はもと〳〵猫風情に、返答をすべきものだか如何だかと猶豫つた樣子で、暫くの間、猫を頭から足の先きまで、默止て眺めて居りましたが、遂にこう云ひました。

お前は賤しく何でも甜め廻る無作法者だ。お前は雜色毛の愚物だ。滋養物も食べない痩せ浪人だ。お前は鼠獵者だ。

お前はナント思ふて居るね、己に言葉をかけて一体なにするつもりかね。お前には得術といふものがあるのかい。何か出來るツてな能腕はあるかい。

こんなにヒドク云はれても、猫はヂットして堪忍袋の緒を切らないで、更に謙遜をしまして

私にはタッタ一事の出來ることがありまして、唯其の術に得て居るばかりであります

と答へました。そこで狐はまぜかへして

ハア、ソリャ聞きものだ。どうかそれを話して下ださい。

と、いひました。

それは外でもありませんが、若しも犬などが私を追ひました時分に、私は樹上に昇つて、能く自分を守ることの出來る術を得て居るのであり

ます。

猫の此の語を聞いた狐は、さも侮辱の体でタッタそれッきり、己は萬能の王樣だ、何んな術でも出來ないことはない。して、まだ術の外にも、點計の嚢を持つて居るよ。貴樣は可愛さうな奴だ、サア、一緒に行つて、お前がドンナ具合で犬を欺誕すか、御手並の實證を拜見しよう。

と云ひ出しました。

こうやッて、彼れこれ問答して居る間に、折りふし、一人の狩人が、四疋の犬を連れてやッて參りました。猫はイチ速くも樹上に昇て、青葉の繁つて居る枝の中へ、安全に我が身を隱してしまつた。而して上の方から對話者の狐に聲をかけて

我が友狐よ、今の話の嚢をお開け、早く嚢をあけて犬を欺しなさいな。

と、今度は猫よりヒヤかしかけたが、狐は何にも仕出來さないで、うろ〳〵してるうちに、早々四

疋の犬は狐を捕まへてしまつた。之れを見まして猫は

オー、お前は、私に何んでも出來ると自慢して居たが、其の百能を持ちながら遂にお前は捕らへられてしまつた。若も汝が、此の木に攀るべき術の唯一事を持つて居たならば、決して其の命を失ふやうなをはなかッたらふに。

と云ひました。

▲狼と人

嘗て狐と狼とあつて、或る日狐が人間の迫害力に付いて狼に話して云ふに、自分等が殺されないやうに、人間の奸計を免れやうとするには、自分等の猾才を以て逃げますが唯一の方法であつて、トテモ外には良策がない。誠に悲しい譯ではあるが我々動物仲間では、公然人間に反抗して起つ事は一人として出來ないのである。との事を以てしました。

そこで狼が之れに答へて

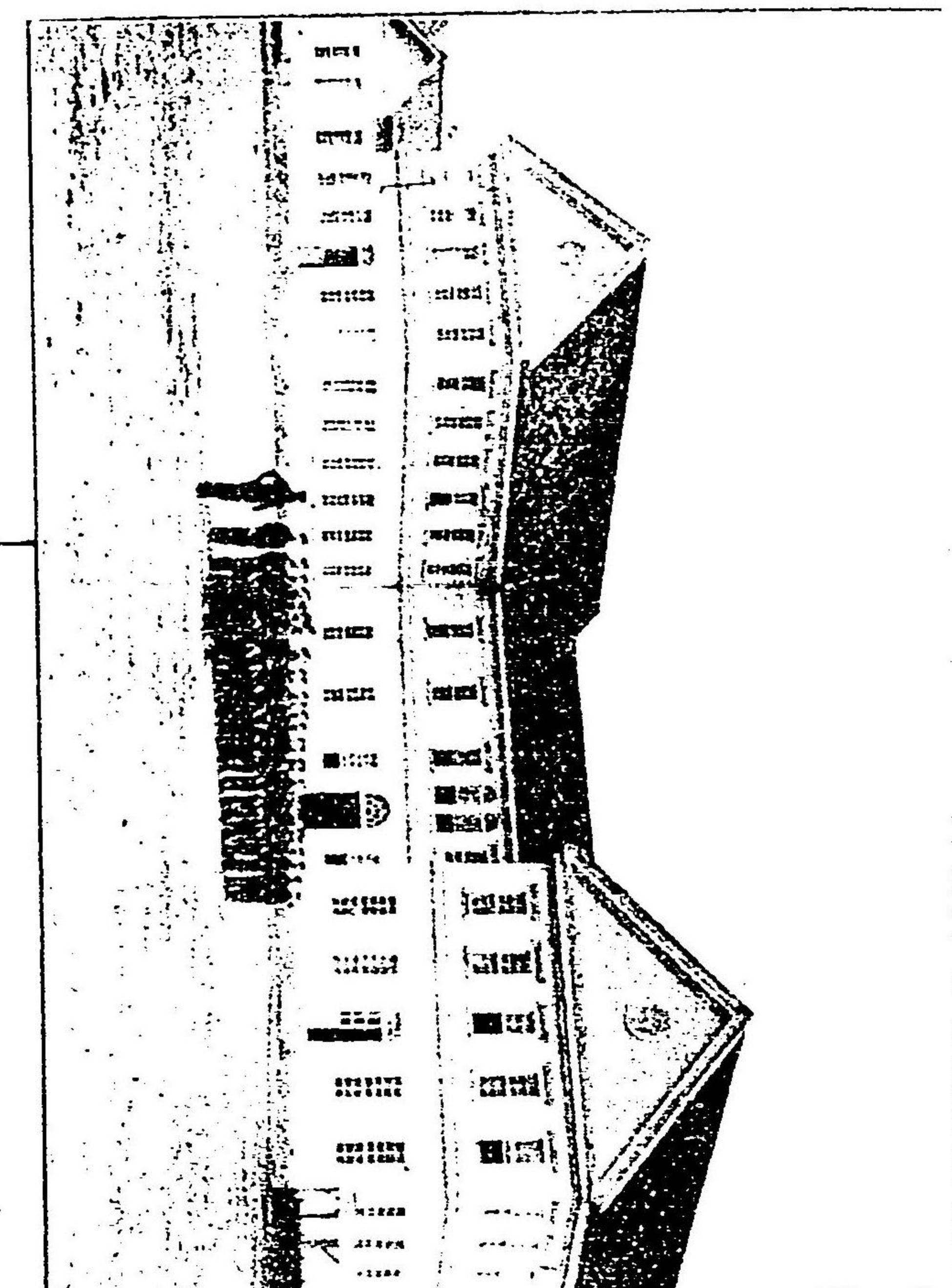
一度でよいが若し自分が人間に出會ふの機會を得たならば、已は人間を攻撃する事に付いて、敢へて躊躇すやうな振舞はしない
と申しました。
コリヤ面白い。貴公の口振によれば、左樣な節には一層の勇氣が出るやうぢや、それぢやー明朝早く已の家へやッて來玉へ、貴公に必と人間をわはせませう。
明けて愈々其の日となつた朝、狼は約に從つて、早くより出掛けて行きました。そこで狐は去る往來へ狼を案内しました。此の往來は毎朝狩人が通ふ道である。
最初にこゝへ通りかゝつたのは、一人の兵士であつて、其の人は已に久しき以前に除隊された老人であつた。
アレは人でないか
と狼が尋ねました。
彼れは前に人であつたが、今はさうぢやない。

と狐は答へました。
すると、こんどは一人の少年がヤッて來ました。
此の少年は今しも學校へ行く途中なのである。
アレは人でないか
と又狼が尋ねました。
イヤ、さうぢやない。彼れは他日人となるのである。
と再び狐は答へました。
偖て今度は愈々狩人が通りかゝりました。彼れは二本筒の銳を肩にしました上、腰にも短劍を佩て居りました。そこで狐は
これへ來るのは人である。貴公がヤルなら彼れを攻撃し玉へ。已はマー地下に行つて安全に我が身を防衛りませう。
と云つて去りました。
之れを聞いて、狼は直ちに狩人に向つて、躍りかゝりました。此の時狩人は狼を認めまして、
彈丸を一つも持たないで、こりや大に困つたわ

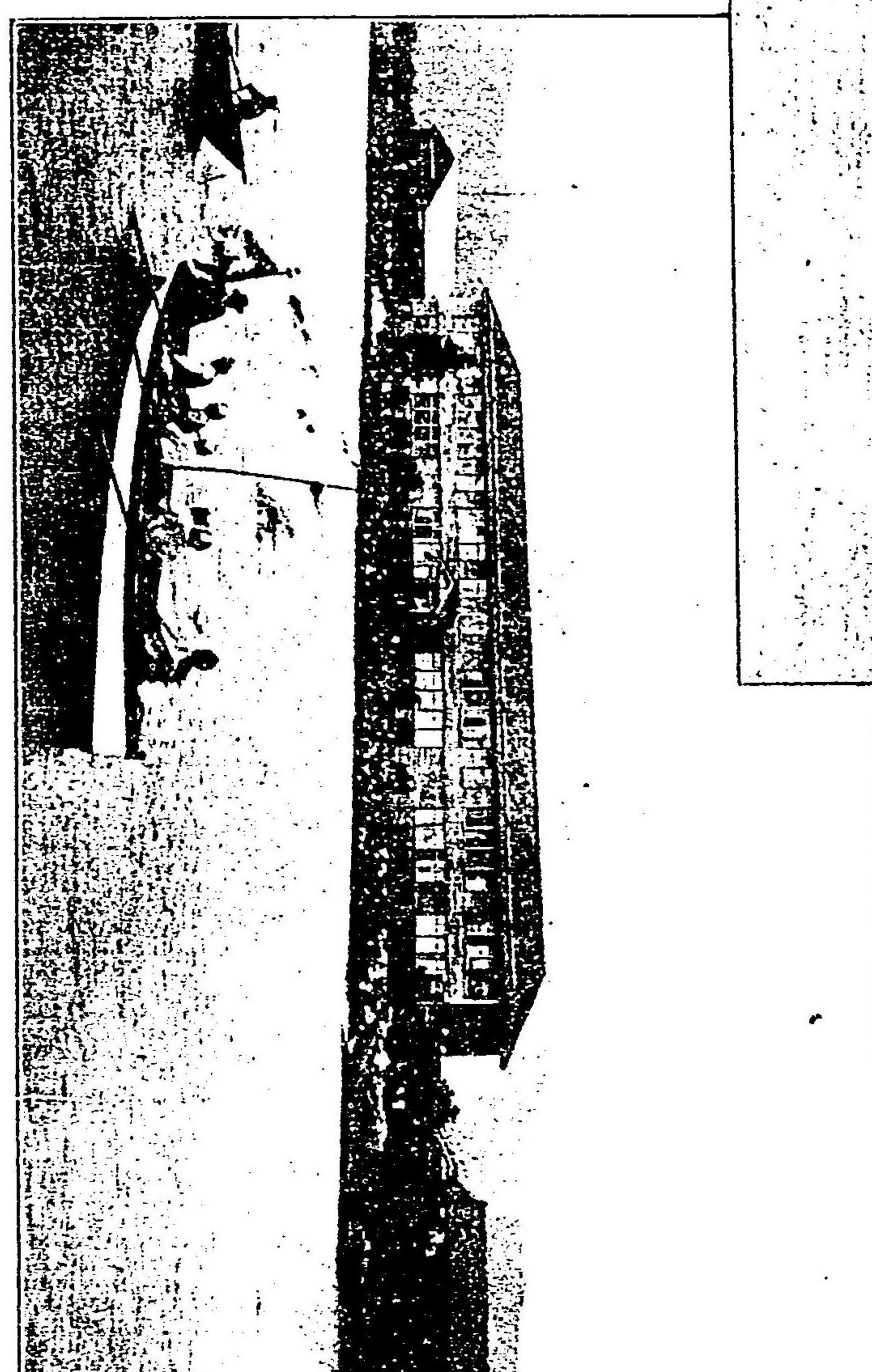
い。と云ひましたが、筒の中には裝置してあつたと見え、狼の顔を狙ひ付けまして、火蓋をきつて先づ一發放ちました。狼は誠に不愉快な接吻を受けて顔を歪めました。而し狼は攻撃を止めないで愈々逼つて來ました。そこで狩人は第二發を放射しました。
が、狼は猶だ倒れません、のみならず、苦痛の色を抑へ忍んで、遂に狩人へ嚙み付いた。狩人もうたまりませんから、直ちに腰の短劍を拔き放ちまして、前後左右、處をかまはず打ち振りました。こうなつてはさすがの狼も到底反抗しきるという譯には行かない、果ては大に傷を負ひ、剩へ出血を見るに到りまして、トウ〳〵哮へ出して、其の友なる狐の處へ逃げ返つた。
ヤア、兄弟分、ドウだい。人間に勝てたかい。
と狐が云ひましたれば、
アア、已は人にアンナに力があるものとは、決して思はれなかつた。最初に彼れは、肩から棒

を降ろして何か吹き込んだ。すると何んだか飛んで來て已の顔を焦いた。それから再度吹き込んだときには、霰のやうな電光のやうなものが我が眼に入つた。而して又、已が愈々彼れに近寄つたときには、ピカ〳〵光つた矛を取り出して、已をいたく打ちのめしたものだから、已はすんでの事で死んでしまふとした。
と狼は、一々事の次第を語つて、答へました。
ソレで貴公の高慢なことがわかつたであらふと狐は最後に一本やりこめてやりました。

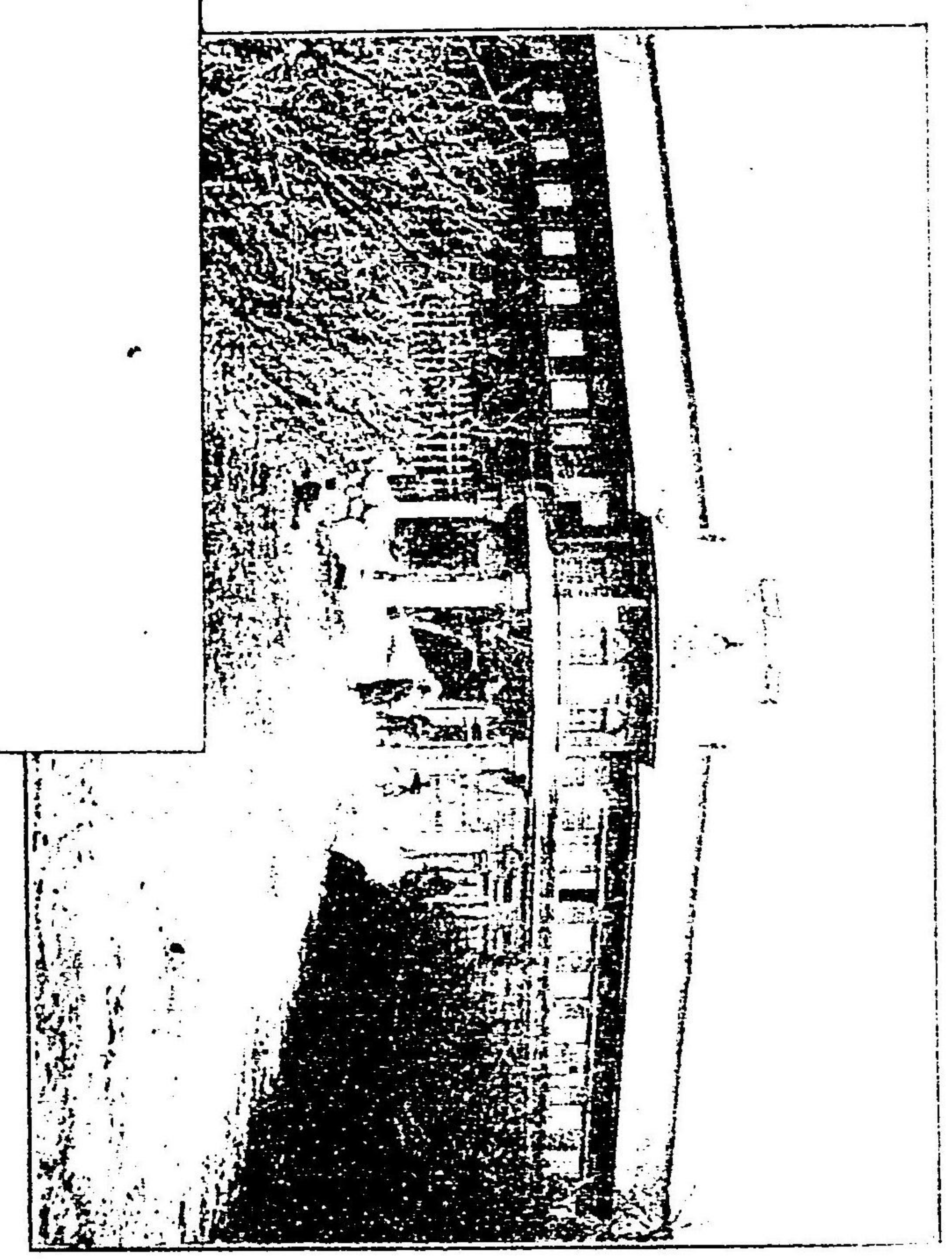
會員 赤石久太郎氏寄贈



會員 佐孝留吉氏寄贈



福井縣小濱中學校

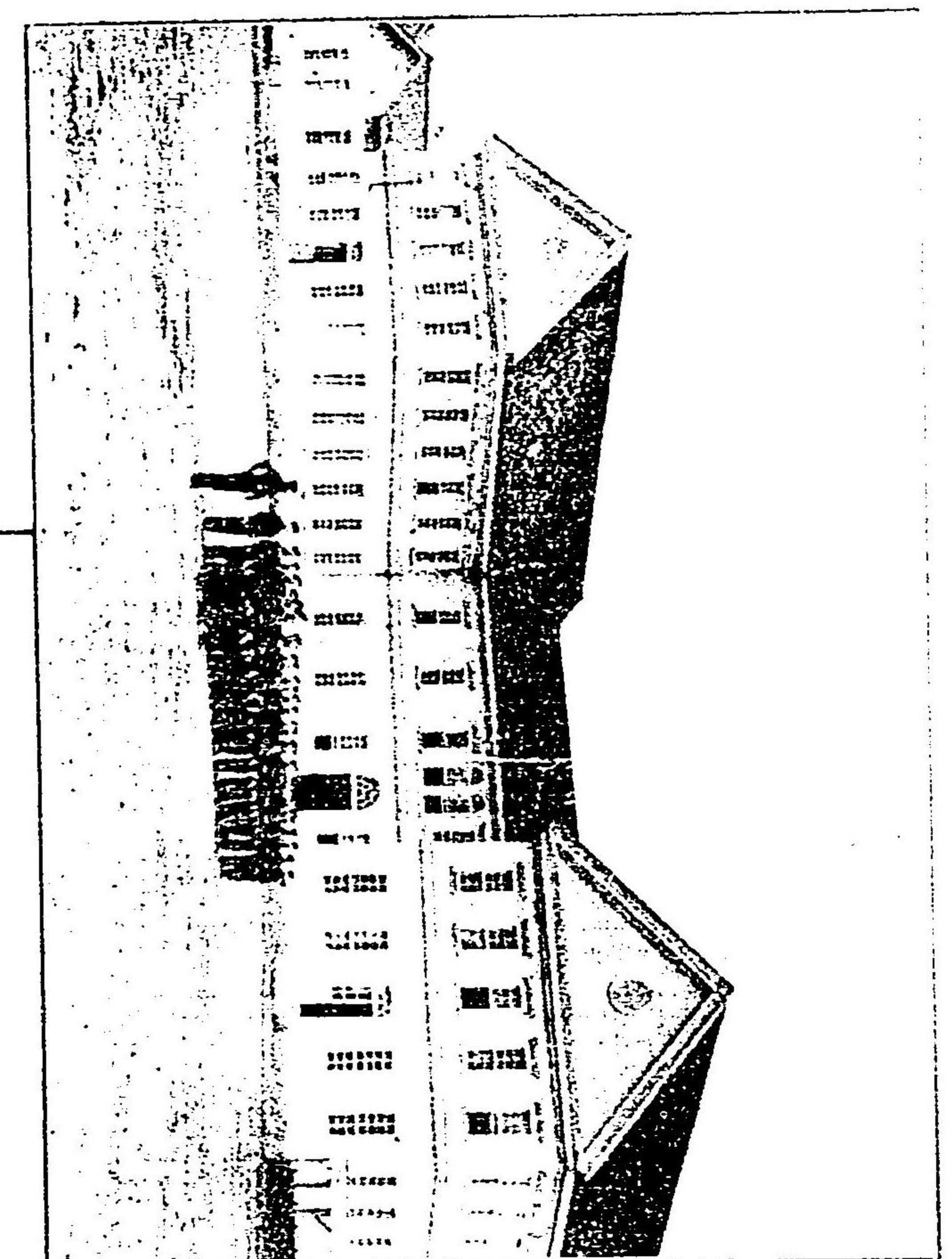


會員 鈴木光顯氏寄贈

寄贈書目

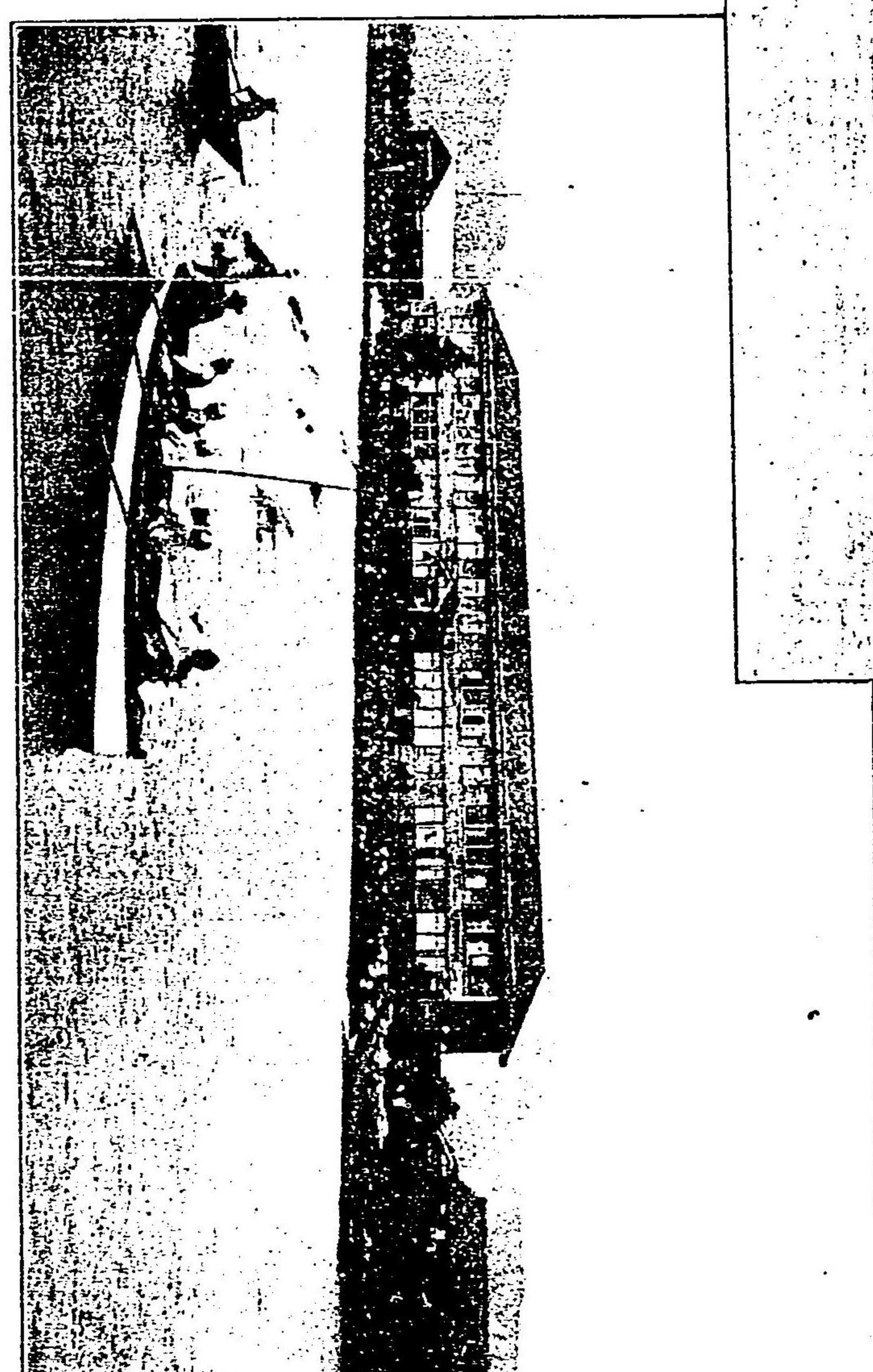
- ▲憲法要義　法學博士高田早苗氏講述　早稻田大學出版部
- ▲英文近江聖文　高柳龍吉氏譯　英學新報社
- ▲丁酉倫理會講演集　第九　大日本圖書株式會社
- ▲大力水兵　千葉紫草氏著　美育社
- ▲俳句大觀　星野麥人、小峯大羽兩氏編　同上
- ▲女の秘密　有本次郎氏作　同上
- ▲なんな　第二卷第九號　大日本女學會
- ▲愛國婦人　第十二號　同上
- ▲中外英字新聞　第九卷第十五號　國民英學會出版局
- ▲文藻　第一號　藻社
- ▲言語學雜誌　第三卷第三號　言語學會
- ▲夜の東京　金港堂書籍株式會社
- ▲はいから　第八號　美育社
- ▲日本一　第一號　同上
- ▲同胞　第三年第八號　布哇佛教青年會
- ▲新聲　第八編第三號　新聲社
- ▲新小說　第七年第九號　春陽堂
- ▲文藝界　第一卷第八卷　金港堂書籍株式會社
- ▲青年界　第一卷第三號　同上
- ▲中學世界　第五卷第十一號　博文館
- ▲中學英語　第一卷第六號　實文館
- ▲中學新聞　第十二號　秀國社

會員 赤石久太郎氏寄贈

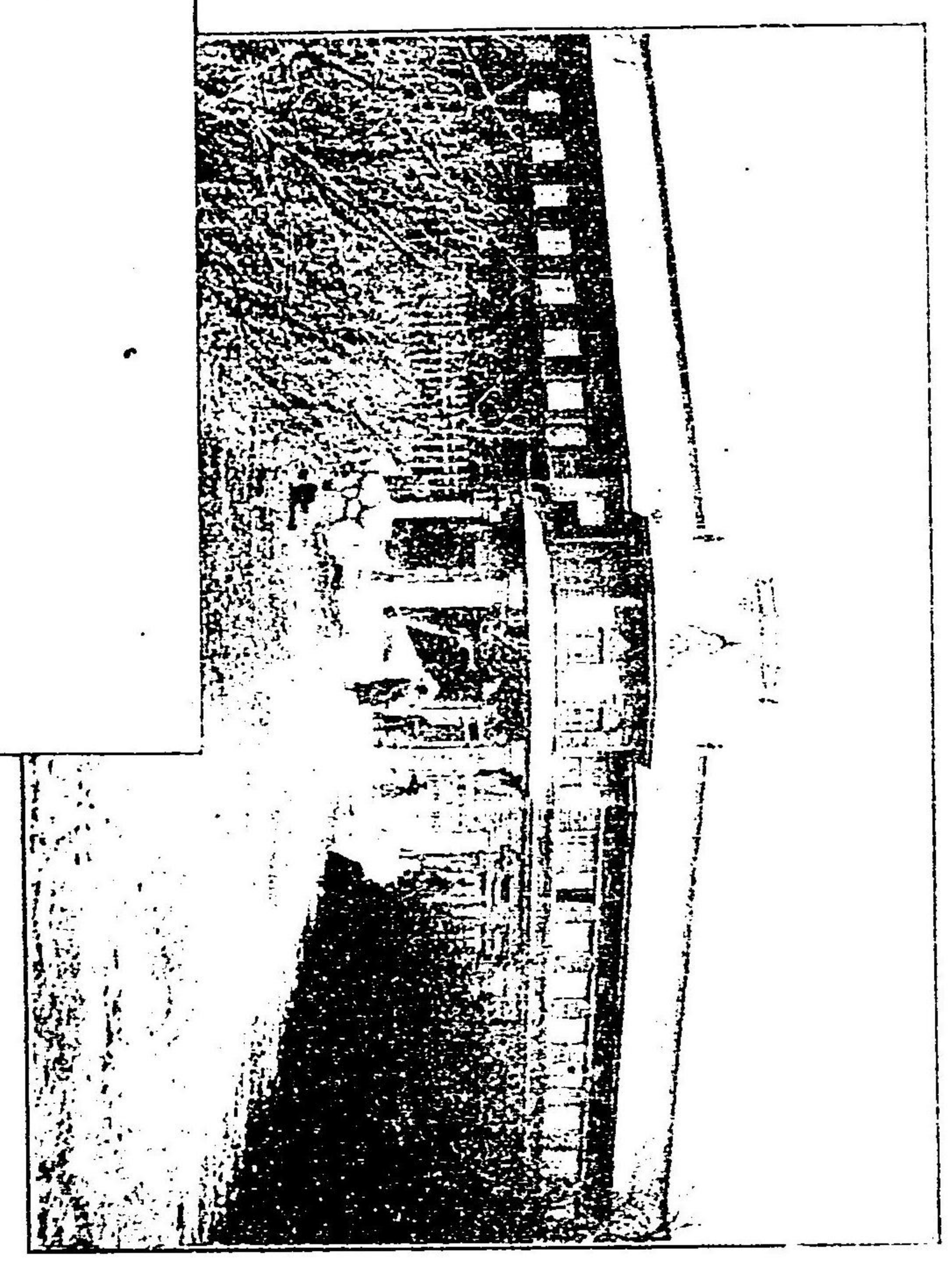


岩手縣盛岡中學校

會員 佐孝留吉氏寄贈



福井縣小濱中學校



山形縣山形中學校

會員 鈴木光瑞氏寄贈

寄贈書目

▲憲法要義 ▲英文近江聖文 ▲丁酉倫理會講演集 ▲大力水兵 ▲俳句大觀 ▲女の秘密 ▲なんな ▲愛國婦人 ▲中外英字新聞 ▲文藻 ▲言語學雜誌 ▲夜の東京 ▲はいから ▲日本一 ▲同胞 ▲新聲 ▲新小說 ▲文藝界 ▲青年界 ▲中學世界 ▲中學英語 ▲中學新聞

法學博士高田早苗氏講述
高柳龍吉氏譯
第九
千葉紫草氏著
星野參人、小峯大羽兩氏編
有本次郎氏作
第二卷第九號
第十二號
第九卷第十五號
第一號
第三卷第三號
第一八號
第三年第八號
第八編第三號
第七年第九號
第一卷第八卷
第一卷第三號
第五卷第十一號
第一號
第六號
第十二號

早稻田大學出版部
英學新報社
大日本圖書株式會社
美育社
同上
同上
大日本女學會
同上
國民英學會出版局
藻社
言語學會
金港堂書籍株式會社
美育社
同上
布哇佛教青年會
新聲社
春陽堂
金港堂書籍株式會社
同上
博文館
實文館
秀國社

讀叢

商界の明星

（故今村清之助氏）

そんよー生

▲光明の生涯

幼い時に自分わ蘆花白き大江の畔にたッて、水の様な秋の夜の大空に、きら〳〵〳〵ときらめく星お仰いて、いつも、人が死ぬときつとあのよーな星となるので、特に此世に在ッた時に、忠實に人たるの務おなし終えた人が、より大きく、より光ある星となッて現われるのであらうと信じて居た。今も時々自分かそう思う。紫に、碧に閃く星の影のいかに強く人の心の眼お射るかお見たまえ。更に世の偉人に呼ばれ、英傑と仰がるゝ人々の生涯の歴史お見たまえ。成程今や其人わ亡い、けれども已に亡い其人の默々の聲が、躍々として千載の下惰夫おして奮起せしめるでわないか。肉の朽ち、骨わ腐れても、一片不爛の魂わ光芒万丈の星となッて永く下界の暗を照らして居るのである。かくして其歴史に生命あり、其死に光明が伴うものでわあるまいか。

茲年九月廿六日、吾等わまた新しく閃く一つの星お天上に認めた。沼々たる吾實業界の濁流のうちに、卓たる一人の今村清之助氏わ、きえゆく朝の露と共に五十四才お一期として此世お逝いた。逝ける彼わ確かに閃く星となッて今わ下界のさゝめきに笑んで居るであらう。

願わくわ稚き宅に、彼の五十四年の生涯の風雲多き過去お偲ぶ事おゆるせ。

▲卿　卿

諺にいうが瓜の蔓にわ茄子が生らぬとや眞理である。一升入の瓶にわ二升の水がはいらない。大

人物の搖籃わ必ず大山峻岳の間に起るものである。吾信州の地、北樺山系と西支那山系と相うつの衝にあたッて居るので、地自ら高燥、境自ら幽邃、眞に別天地ゐなして居る。之ゐ北にして高妻山、岩寥山、鏡台山。南にしてわ御嶽、恵那、赤石、駒ヶ嶽。東 八雲たつ淺間、白根の峻嶺で上野と限り、西わ東筑、槍ヶ嶽の大岳、濃飛の境ゐ歷して居る。一帶の連丘綿々として國内ゐ南北に貫き、此間に和田、立科、駒ケの諸山が雲ゐ磨して聳えて居る。奔濤南してわ天龍川大平洋に注ぎ急湍北流してわ信濃川となる。實に天然の奇勝到底盆庭盆池の規する處でわない。天地正大の氣萃然としてこゐにあつり、凝つてわ天下の大人物ゐ生む。かくして旭將軍源義仲ゐ起こし、象山佐久間先生ゐ生んだのである。

嘉永二年三月、彼わ此地伊奈郡山吹村に其呱々の聲ゐあげた。

▲搖籃

彼の家わ代々里正ゐ務めて聲名一村に鳴つたものであつたが、四代以前から傍り驕侈に流れたので家道漸く衰え、父吉右衞門の代になつて全く疲弊起つべからざる有樣に立到つた。彼の幼き胸の中にわ已に〳〵『零落』の寂寞が深く刻まれたことであらう。昨日までわ市をなして集ッた村人わもう今日わ道路人の——甘きに集ッた蒼蠅わ影も形も見えない。彼わかくして朝わ野に耕し夕わ薪ゐ拾ッて辛らき生計ゐ扶けて居た。ある時山林に入つて落葉ゐ拾つて居た、そこえ一人の村人が通りかゝつて矢俄に彼ゐ攫え、散々に嘲笑し、毒罵し、輕蔑した。彼の遺憾知るべしである。是からわ家道再興の事ゐ片時も忘れた事がない。覺めてわ思い、思つてわ働き、骨身も惜まずに働いた。けれども如何せん少年の腕にわ限がある。一本の枇杷で大洋の水ゐ乾かそうとするのと全じ事で、全く不可能（インポシブル）の事である。成人ですら一年間で三兩位が關の山、まして十二や十三の小腕が何にならうぞ。

そこで彼わ到底此儘でわ目的ゐ達する事が出來ないから是わ一つ商業で身ゐ立てよーと決心して、之ゐ兄に相談すると、兄わ少年の客氣としてどうしても許してくれないので、此上わ時ゐあらば脫走して天晴れ此目的ゐ果して呉れよーと頻りに時機ゐ覗つて居た。

▲脫走

頃わ三月のはじめ、身ゐ切る樣な吹雪の中ゐ、小さい草鞋きつちりと蹈みしめて、音に聞ゆる信州和田峠の、切り立てた樣な嶮峻ゐ物ともせず、したゝ〳〵と登る一人の少年がある。四方の連山わ皆眞白な衣につゝまれて、寒風に叫く梢枯葉が、宛然（さながら）に身にしみこむよう。古綿ゐ捲いたよーな寒雲が空一面ゐ鎖ざして前途（ゆくて）わたゞ寞々たる有樣である。少年わ漸くにして巓に達（つ）いて過ぎ越し道ゐ默ッて眺めて居る。彼の心にわ色々な思が充ちみちたであらう。諏訪の湖わ渺茫の間からちら〳〵と鏡の樣な其面影ゐ現わして居る。点々たる村落わ下諏訪上諏訪の諸村でわないか——少年わ瞬きもせず見詰めて居た。折りしも來かゝッたのわ一人の旅僧。見れば年少の一人旅、仔細があらうと思ッたので、親切に尋ねると、少年の答にわ、田舍に居てもつまらないから兎に角江戸に出てゝ身ゐ立て潰れた家ゐ興さうという健氣な決心。旅僧わ感心して聽いて居たがやがていふにわ、ゐ前の決心わ成程よいが、併し江戸に出るには十數日もかゝる事でもあり、其上街道の要所〳〵にゐ關所があッて旅行券ゐ持ッて居ないものわ通過する事が出來ないのだから、今日のところは一先づ立戻ッて時機の來るのゐ俟つがよいだろう、ゐ母さんや兄さんかどんなに案じて居るだらうからと、懇ろにさとしたか、此少年の決心わ鐵石の如く、牢として動かすべくも見えないのみか、頻り同行ゐ願うので、僧もほと〳〵感嘆して、それでわというので遂に從僕の樣にこしらえ、十數日の后板橋まで連れて來てくれた。

此少年こそ今村清之助であッた。彼わかくしてはじめてお江戸の土おふんだのである。懐中にわたつた二朱金が一つ。

▲蹉跌

そこで彼わ板橋から彼の僧にわかれて、獨り廣ろいお江戸に足おふみこんだ。盲の杖お取られたとわこんな時おいうだらう。來て見れば案外なお江戸の有様、金銀が道に轉がつてる處か、紙屑も落ちてわ居ない始末。とう〳〵彼わ江戸お出て横濱に下り、或同郷人の周旋で南仲通の弗屋平野市五郎方に丁稚に住みこみ、やつと一と安神した處お折り悪しく親戚の者に見付かつて、色々に辨解したが無理やりに國許に連れかえられてしまつた。彼の心中の遺憾わどんなであつたらうか。

國に歸えつてからわ毎日鍬お取つて働いたが、一反大洋の大お知つた彼わ、どうして井戸の中に満足して居る事か出來よう。殊に天性の商的手腕わ、到底肥桶お擔うに適しないので、一兩の金を資本に、近村の間お、雞卵や屑糸の行商おやつたが、どうも思う様でないので、愈々決心の臍お堅めて金子僅かに一分ね懐にして再び家お脱走した。

慶應三年十二月二十八日。天下わ正に王政舊に復して旭日はやくも天の一方にきらぬきわたつた時！。

▲奇蹟

はじめわ名古屋に居る積りでおつたが、偶然の出來事から彼わ再び横濱にゆく事になつた。

名古屋に出てゝわ見たものの思う様な仕事がないので、せう事なしに熱田街道をぶら〳〵して居た時に破落戸風の男が三人ばかりうたいがけでやつて來たので自分も諸共にうかれだして歌い合わした。それが縁で、其うちの一人が何處えゆくとの問いに漫然横濱えと答えた。すると三人とも大層よろこんで是非道連れになれと勧めるので、彼が横濱行は遂に事實になつた。彼等わ何者でおつたか今でもわからんそうであるが、姿わやつして居るが其風貞にわ一種犯し難き威嚴お持つて居る其上に彼等の中の一人わ風采と言い、動作と言い他の二人の臣事して居るのお見ても、たしかに貴人の微行に相違なかつたとの事である。愈々程ケ谷で別れる時に丁寧に名お尋ねたが、たゝ笑つて『笠間だ〳〵』と答えたきりであつたそうな。

かくして彼わ自ら一厘も費やす所なくして再び横濱の人となつた。

▲蠑螺の壺燒賣

着くや否や早速舊主の平野屋に訪ねてゆくと、豈計らんや昨日の淵わ今日の瀬と、見るかげもなく零落れて、今わ其踪跡さへわからぬとの事。彼わ一時わ途方にくれたが、つい決心して、二朱の金お資本に大道て螺蠑の壺燒賣おはじめて、僅かに糊口お凌いで居た。處がある晩一人の客が彼の事情お聽いて非常に氣の毒に思つて自分の主人に紹介して呉れた。それがもととなつて彼わかの手代と共に信州上田にゆいて鷄卵紙の製造に取りかゝり、可なりの好結果お得て歸つた。其賞としてて主人わ彼に金二百圓お呉れた。生來はしめてかゝる大金お手にした彼の喜びわ實に天にものぼるよーでおつたらう。彼わ一且まづ鄉里に歸つて、五十圓お兄に與え、殘額百五十圓で再び上田で鷄卵紙お買い入れ横濱に送つた。處が不幸にも相場が暴落の時であつたので、利益どころか一進も二進も動かなくなつた。彼わ全然もとの一文なしとなつたのである。

で仕方なしに或人の周旋で烟草三斤お借り、之お小玉にして元町通で露店お張り、一時お凌いだ。當時横濱わ日の出の勢いであつたので、多少利益もついて來た。そこでそれお資本に、今度わ横濱の遊廓の入口に、

▲銘酒屋

お開店した。開店といえば大層だが、元より資本

も十分でないので、余所から明鏡お集めて來て、色々の色彩の水お充たし其れお飾つて景氣お添えた。是も大當りであつたが、ある時碇泊中の外國軍艦の水兵數十名がやつて來て、さお飲むわ〳〵、まるで長鯨の潮お汲うよーに、奇妙奇手烈な鼻歌お呻りながら飲み出したが、追々醉のまわるにつれて何の氣もなく、彼が慌てゝ制するのお耳にもいれず、例の色付鏡お取り出して飲んだからたまらない、くさいのなんのつて鼻むけもならない！、さお醉いだくれの水兵、怒ッたの怒らないのの騒ぎでない。怒鳴る、罵る、戸障子お破壊する、テーブルお蹴倒す、椅子おふみにじる。狼藉亂暴、まるで眼もあてられぬ始末、彼わ命からく〳〵でにげた位。あわれ數月の苦心の資本も、もう滅茶〳〵になつた。彼わぼかんとして荒れはてた店の前にたッて溜息おついたであッた。

▲貯蓄函

此樣な苦境にいく度か沼ッても、退がに彼わ彼の方お奔走したが、偶ま舊主平野屋と會つて之が爲

である。世路の艱難實に容易ならざるお思い、苦しい中にも露店の利益の一錢二錢の中から、一朱づゝお割いて一つの貯蓄函お設け貯蓄おはじめたのである。夫からというものわ、彼わ食うものお食わないまでも一日として之お怠ッた事がない。酩酒屋おはじめてからわ一層勵んで之おつとめた。塵もつもれば山となる譬の通り、かくして苦しい中から積んだ一朱の金こそ、今日府下に名高い今村銀行二十五万圓（后に五拾万圓に增資の地盤となッたのである。彼が后年、散々に失敗した時でさいも依然として其信用お墮さなかつたのわ偏えに此貯蓄函のおかげである。彼が晩年人に說くところわ一に勤儉貯蓄であつた、そして彼わ卒先して實踐躬行した人である。

▲一葉舟

酩酒屋で失敗した彼わ、再び大洋に漂う一葉舟のはかなさにかえつた。彼は遂に才取となッて四方お奔走したが、偶ま舊主平野屋と會つて之が爲

めに債主の間お調停し、主家お再興して自分も共に働くことになつた。が、間もなく彼わ平野屋と商業上の意見お異にする處あッて獨立したが、恰かも金穀相場會社が横濱に起ッたので、彼わ卒先して其仲買となり、選ばれて其委員となつた。

▲曙光

曙光現ず！

求めよ然らば與えられ、門お叩けよさらば開かるゝ事お得ん。天わ決して有爲の人物お無爲に殺さない。

資產漸く裕かに、機運は知らず〳〵の間に彼に好運お叫いた。彼の警眼、彼の機敏、いかで此好機お逸すべき、彼わはやくも洋銀本場に手おのべた。此事たる言わば朝露の夕お知らぬ投機事業で彼の如き愼重なる用意あつてこそ、はじめて好結果お見得べきものである。時恰も平野屋がまた〳〵一敗して再び起つべからざる時であつたので彼わ其地所家屋お買い入れ、盛んに此業お營むと共に、内外の形勢に顧みて、是わどうしても別に一つの堅固なる根據お定めて置くの必要お認めたので、即ち朗治十年東京堺町に、呉服屋兼兩換店お開き、精勵刻苦、毎日京濱間お往復して兩々の經營に當つた。

翌十一年にわ澁澤榮一、福池源一郎等と計つて株式取引所お創立し、一反重役となつたが、間もなく辭して仲買人となり、商店お南茅場町に移して愈々其抱員お實行する事になつた。

基礎已に定まる。來れ、大風奔濤。彼れわ大手お擴げて世波の狂瀾の前にはゝえんだのである。

▲歐米漫遊

霞の牖から天上お覗いて其小お笑うのわ特別としても、紅色の眼鏡おかけて雪お白いというのは誤りた、全く紅いものだという人があつたならば世の中の人わどんなに笑うだらうか。が、お俟ちなさい、諸君の手が口お蔽う前に銘々自分に就いて考えたならばどうであらうか。わゝ井中の蛙の

識　それわ果して人の身の上であらうか。

達人わ大觀す。いつまでも猫の額の様なちつぽけな島の中に、明日の百よりも今日の五十お追う連中わ決して大國民の行爲でわない。宜しく文明世界の大舞臺にたつて、宇内お席捲するの勇氣で事に當らなければならない。殊に前途多望なる實業界に立つの士わ、あまねく智識お世界に求め、天下の富お掌中に握るの抱負がわつてほしいものである。語に曰う、百聞わ一見に若かず、と、自分わ洽く吾國の實業家諸君に向つて特に世界の漫遊れ勸告するものである。

明治十七年、大に見る所あッて、彼わ當年政界の麒麟兒陸奥宗光と相携えて、鵬程万里の旅程にのぼッた。思うに彼が當年の意氣わ雲を衝くの慨がわッたであらう。更に宇内の形勢——文明社會の新潮流わ如何に激げしく彼の心眼お刺撃したか警醒したか。實に信州の山の中からお江戸の眞中に出てゝさえ小さい胆つ玉おつぶした彼わ、横濱の露店で煙艸の小玉で命おつないだ彼わ、今や一躍して世界の商人になッたのである。壯嚴に見えた煉瓦造り、段盛と思ッた日本の商業界お顧みて彼わどんなに心恥かしく思ッたであらうか。實に此行わ世の道學博士連が千萬遍の講義にもまして彼の大智識おましたことであらう。

まゴ米國にゆいて其鐵道事業お仔細に視察し、轉じて歐州にわたり、ロンドンや、ベルリンや、パリーや、至る所犀利の眼孔お開いて文明の源泉お極わめた。お土産にわ、それ例の鐵道事業！日本の鐵道事業が今日の様な隆盛に達したのわ、實に彼の力であるといつてよいのである。

▲滿帆の風

帆わあげられた。艘わ巳に〳〵まかれた。波洋々たる大洋の上おそよ〳〵と吹き來る風わ、はり切れる許りに帆お孕まして、船わ優然として万里の大洋の唯中お駛しッて居る。

東京株式取引所に、帝國ホテルに、仁壽生命保

險會社に、山陽鐵道に、京都鐵道に、北越鐵道に利根川運河會社に、重役として、相談役として、彼の聲望わ實に斯界に隆々たるものとなつた。公共事業について言えば東京市會議員として、同養育院委員として、日本橋區會議員として、全學務委員として、全衛生會幹事として、全教育會幹事として、所得稅調査委員として、其功勞わ決して尠くない。實に彼の晩年わ經濟界に於ける一方の雄鎭として光榮ある歷史であつた。

▲臨　終

わゝもしも天が彼れに憐おかす事今十年であつたならば、必ずや更に見るべきものわつたであらうが、遺憾にも、久しく惱まされた骨崙の爲めに名醫の治療も其効なく、遂に去る九月廿六日午後八時というに永久に覺めない眠についた。享年五十有四。葬送わ全三十日の午後芝の增上寺で執行されたが、朝野の名士の會送するもの夥しかつたとの事である。

商界の明星

船わ依然として駛しつてゐる。けれども之れ指揮し、左右した其人わ、今わもう亡い人である。

▲社交の彼

いでや、此世にわつた時の彼が當年の面影お偲ばん哉。

今のわが實業界に、腕お以つて鳴るもの、富お以つて鳴る者わ決して少くない。けれども、彼の如く俗中の俗に處して、而も高潔自ら持して、高く人の以つて仰ぐに足るの品性お保つて居るものは實に寥々たるものである。人わ彼れ稱して武人氣質という、たしかに之わ適評である。其風貌の如何にも質撲なる、御世辭いうでなし、ぺこぺこ頭れ下げるでなし。知つた事わどこまでも知ッたと言い、知らない事わどこまでも知らないという。出來もしない事お出來るふりおする様な事わ彼の斷々として敢てしない所である。事に處してわ果斷明快で一点の澁滯する所なく、日々引きもきらない訪問の客に接して即決即答。耻かも齟齬

する處がない。彼れしてもしも、算盤に換えるに現象でわわるまいか。人と會してわ酒なかるべからず、酒を飲めば醜業婦なかるべからず。本宅わりサーベルお以ッてし、肥馬に鞭つて三軍に指揮せらず。甚だしきは別墅なかるべからず、別莊わりて妾なかるべからず。高尚なる家庭の幸安なるわ、彼等の夢想だしめたならば、必ずや威風堂々たる一將軍お想見もしない所である。かゝる間にわりて、萬綠蒼中することであらう。

けれども彼わ決して拘撲一方の武弁氣質でわない。甘いも酸いも噛みわけた。極めて圓滿に近い人物である。人と接して城府お設けず、誰しも彼に對してわ一點猜疑の念を挟むの余地がない。從つて未だ曾つて一人の敵お有しない。其言う所必ず聽かれ、其說く所必ず容れられる。一朝經濟界に紛擾ある時にわ必ず彼が快刀亂麻の手腕に一任されたるのも決して所由ないでわない。

▲家庭の彼

家庭わ實に此世の天國である、パラダイスである。而も今日の日本の家庭位無趣味なものわあるだらうか。殊に上流社會——貴族とよばれ紳商とよばる、人々の家庭の、聞くに堪えない樣な醜聲の屢々漏れるのわ、實に吾國の爲めに悲しむべき事でわないか。

▲光風霽月

天高うして肥馬秋風に嘶う。遙かに牲旗堂々たる敵の大軍お控えて『霜滿軍營秋氣清、數行過雁

月三更』とうたつた不識庵の大胸わ千古の美談である。英雄の心緒わ常に余裕卓々たるものがなくてわならぬ。朝より夕にいたるまで徒らに几々として、生きる爲めに食うのやら、食う爲めに生きるのやらわからないよーな者わ、到底大人物の資でわない、斷じてない。

彼わ此點に就いてわたしかに常人に超越したものである。日夜牙籌お取ッて役々して居ながら、其胸中には光風霽月の如きものあるに至つてわ彼の人格に於て一層の高きお見るのである。

彼に沒すべからざる一美德がある。それわ社會の大人物に同情お表することである。一言に同情といえば何でもないよーわるが、然し身よく其境にある人に非ずんば到底這般の消息お解し得るものでわない。眞に人物たるの資格ある人にしてはじめて大人物に同情することが出來る。ものである。

彼わ故陸奥大伯の爲めにわ眞の知已であつた。

伯がまだまで主角お顯わさない頃から、伯の言動お聞いて、警々の眼よくよく其大才お見ぬいて、一面の識もないに拘らず陰ながら其人の上幸多かれと祈ッて居た。恰も明治十七年、不慮の事から捕われた陸奥が赦されて、暫く海外に遊んで銳氣お養いたい意あるお聞くや否や、彼わ直樣陸奥に會ッて費用の全部お自ら引受け、相携いて万里の航程にのぼッた。陸奥伯が生涯彼お德として骨肉も啻ならず親しんだという事であるが、當時の伯にしたならば、行きくれたる旅路に親切なる骨肉に會ッた樣な心持もしたことであッたらう。彼また且つて紅葉山人の小說お讀んで、其喚發の詩才お愛して措かず、俗務重疊の時間お割いて半夜お以ッて天下の賢才に盡さんずる至情から出た同情である。至情なる哉至情、かくして彼れが群俗の

斯界に特種の光明を放ち得た所以である。

▲蓋柩の彼

人物の眞の價値は、柩を蓋いて一はしめて定まるものである。故西郷侯の此世にあッた間は、或は伴食といい、愚物だといい、託物だと言い、隨分はげしい毀譽もあつたよーであるが、一たん幽明境を異にするに及んでや、萬口一致其大才に嘱望したでわないか。

以上自分が彼に就いて述べた所、或は過褒もあつたかも知れない、或は過貶もあつたかも知れない。元より彼は天下の大偉人というよーな人物でわない、たしかに欠點だらけな人には相違なかつたであらう。經世的智識——利殖の道に於て或は岩崎や、大倉に及ばなかつたかも知れぬ。其手腕に於て、或は雨敬や、古河に及ばなかつたかも知れぬ。而も彼の清廉なる品性と、超俗の俠骨とは所謂人才頻紛たるわが實業界に、一人の彼に比敵するものがある。聲望あり、識澤のわるい癖や、

大倉喜八郎の品行

大倉喜八郎の品行に於て人の指彈する所なるに比して、彼わたしかに實業界に於ける立派な、殆んど理想に近いゼントルマンである~斷言してもよいのである。

自わ最後に、日常彼が口にした一語お記して此稿れ了りたいと思ふ。

『獨立獨行と、約束お踏んで違わぬ事わ、言い易くして而も實行し難い事である。自分わどこまでも之れ實踐せんことれつとめて居るものである。』

其聲やわり……而も其人わもう~此世の人でわない——。

（十月十三日）

小英雄

孤島生

私がまだ十二三で、高等科へ通つて居た時分でした。たしか十一月の初めの日曜日だと記憶えて居ますが、今日はあの利根川で子供を助けた本田正雄が　御褒美を貰ふからといふので、先生に連れられて、正午頃から郡役所へ出掛けて行きました。

門のところまで來ると、日の丸の旗が交叉に立つて居て、町の人が大勢寄つてガヤ~して居ます。先生の後へ從いて、二階の大廣間へ入て見ると、正面には赤い布の掛かつた卓子が据つて、其の直ぐ背ろにはまだ誰れも居なかつたが、兩側の椅子には、もう洋服だの、袴羽織だので、髪を蓄やした人達が、整然と控えて居た。兩側の壁に「來賓席」と札が張られて、其の中には髪モジャの、髯の様だの、頭の禿げた中學の校長様だの、院長の佐藤様なぞも居て、紅い僧服を着た安忠寺の和尚様が洋服の間に來まつて、眼を閉つて居る。

私達は先生に從いて、通りへ向いた窓のところへ並びましたが、此處にはもう方々の先徒が陣取つて居て、待ち遠がつて、皆なして笑つたり、戯けたり、中には足を踏まれて泣き出す女生徒もあつた。

日がカン~中つて、下の通りの瓦屋根が美くしく輝やいて居る。

町の人は暫々昇つて來て、暫しの間に大廣間も一杯になる。看樓の上で風琴の音が起つて、女生徒の歌ふ唱歌の聲が室内に充ちた。

其の中に前の方から柏手の聲がして來ますから伸び上つて、卓子い方を見ると、今しも十三四の少年が、男の人と女の人の間へ入つて、正面の椅子に着く所でした。

あれがその正雄だらうと思つて、前の人の肩の間から見ると、石屋だといふ話しの父親は袴羽織

で、怯々右手の椅子に掛かつて、下を向いも居る。左の方のは母親だらう、色の白い、丸顔の、まだ三十五六の人で。眞中の少年は身躰の小さい、眼のパッチリした、母親其儘といふ容貌でした。

人々が喝采の聲を擧げるので、また伸び上ると何時の間にか郡長樣が卓子の前に立つて居て、背ろの壁際には立派な洋服を着た人が五六人並んで居た。

サア是れから知事樣のお話しがあるから靜かにして聞くやうにと述べて、郡長樣が後へ下ると壁際に立つて居た背の高い人が、喝采の聲に迎へられて、卓子の前へ立つた。

風琴の音はパッタリ止んで、室の中は全で水を打つたやうに靜かになる。三人の親子は一歩進んで卓子の右側に立ち並んだ。

知事樣は靜かに口を開いて何か言ひ出したが、其の中に一段聲を張り揚げて

『夫れで此の子が、岸の上から見ると、河へ落ちた子供は、もう死ぬばかりになつて、渡の間に〳〵苦しみ悶いて居たので、直ぐ衣服を脱いで跳び込む用意をしたのです。併し其の樣な大水だから側に居たものは皆な危險がつて、「れ前も溺れて了ふからお廢し！」と、留めたが、肯かない。一人が抑へやうとして居る中に、もう跳び込んで了つたです。河は矢のやうに流れて居て、大人でさへ危ない位なのを、此の子はたゞ友達を助け度いと思ふ一心で、浮いたり沈んだりして、やつと子供の側まで、泳ぎ付けたのです。岸ではたゞ見て居るばかりでワイ〳〵騒いで居たが、友達と二人で岸へ泳ぎ付くまでに、波を浴びて見えなくなつたことが、二度も三度もあつたといふことです。』

知事樣の聲は滿場に鳴り渡つて、誰一人聲一つ出すものもない。知事樣は一息吐いて、また言ひ初めた。

『皆樣、男子の一番の寶は男氣ではありませんか。

然かも少年には野心がない、利益のためにするといふ考へはない。其の野心のない利益といふ考へのない少年が、か弱い力で、大人も及ばぬ事をやつたといふのは、何んと恐ろしい勇氣ではあるまいか。無邪氣な子供心で、友達のために一身を捨てゝかゝらうといふ、其の考へだけでも最早立派な價値がある。まして恐ろしい勇氣で、夫れを仕遂げたといふに至つては殆んど賞するに言葉が無いといつてもよからうと思ふ。此のやうな勇氣は神の勇氣である、人間以上の勇氣である。

『皆樣、私は此の上何も申すまい。如何な言葉を持つて來ても、到底此の貴とい行ひを讃め盡くすことは出來ない。子供を持つた親達には、自分の子と思つて、此の子の幸運を祈つて貰ひたい。夫れからまた、此處に集まつた子供達は、皆なよく此の正雄の名と、姿を心の底へ彫り付けて置いて、決して忘れぬやうにしなくてはなりませんぞ。』

と言つたが、少年の方を向いて、

『サア、お前は此處へ來て、天皇陛下からの御褒美を頂くのだ。』

と、知事樣は小さな徽章を、其の少年の胸へ着けて、夫れに附いて居る賞狀を母親の手へ渡しました。

此の時喝采の聲は再たび室内に鳴り渡つた。母親は片手で兩方の眼を抑えて、嬉し涙に咽んで居る。父親も首を垂れてジーッと俯向いて居た。

知事樣はもう一度少年の方へ向き直つて、兩方の手を握りながら、

『今日の事をよく覺えて居るのですよ、お前のためにも、兩親のためにも、此の樣な名譽な、此の樣な幸福な日を決して忘れてはなりません。何よりも此の先き益々立派な人になるのが肝腎ですよ。可いかね。

と言ふと、手を離して、背ろへ退いた。

知事樣が退くと、唱歌の聲は風琴に連れて、喜びの曲を送つて來る。

と見ると、右手の椅子の背ろから、八九人の少年の一組、何れも正雄の同年輩の友達と見受けられるのが、卓子の側へ寄つて、『萬歳！』の聲と共に正雄の身躰を高く胴上げするのでした。

胴上げが濟むと、人々は一齋に喝采の聲を揚げる。八歳か九歳位と見える子供が、背ろから出て正雄の前へ立つと、兩手を高く打ち振るのが見えた。これは正雄に助けられた子供に違ひないと、話し合つて居る中に、其の子供は正雄の手に凭れて、群集を掻き分けながら、兩親の前へ立つて、楷子の方へ進み出した。

人々は細く路を開けたが、後ろの方では伸び上つては少年を見やうとして押し合つた。路の側に居たものは、爭つて少年の手へ指を觸れた。生徒の前へ來ると、生徒は一度に帽子を振つて、『萬歳！』と唱へた。

私は直ぎ前を通る正雄の顔を見たが、眼は美くしく輝やいて、口元には喜びの影が浮んで居ました。後から來る兩親も同しやうで、母親はニコ〳〵してさも嬉しさうに見えましたし、父親とても手をブル〳〵震はせて、生へても居ない鬚を撫で廻して行きました。

玄關を出る時に、人々は窓から顏を出して「萬歳！」を言つて居ますと、看板のところからは、華やかな風琴の音につれて、女生徒達が用意して置いた花束を、正雄親子の頭の上へ投掛けたので美くしい黄菊や、白菊が、バラ〳〵と降つて、雪のやうに地面へ散らばりました。もう降りて居た子供達は、降つて來る花を拾つては銘々に家へ持つて歸りました。

風琴の調べは一連り靜かに、徐やかに、正雄親子の後を遂つて、利根川の方へ消えて行つた。

ドラ物語

鳥　巡

歐米の詩人國振の散文に和げたるもの、やがては我學生諸君の詩趣を快うせんのみ、先づテニソン卿の此篇に筆を付けたり。

片山里に年老いたる農夫アランはウイリアムとドラと三人して住ひぬ。ウイリアムは其の息子ドラと云ふはその姪にして、二人の樣子年恰好を見るにつけ、アランは二人をめをとになさばやとの思深く、未た口には漏さぬ心を有繁女のドラは感付きて、早くも我人と思ひ定めてウイリアムに心の丈を事へたりしが、青年ウイリアムは思も寄らず、全じ家に住ふ身には全胞とこそ思へ父とドラとの心と願慮感應せで唯だ能く食ひ能く働きてぞ居たりける。アランは老の心焦立ちけん、某の日息子を傍に招きてさて謂へるやう、「我兒よ、我は年若からずして結婚したりしが、今となりては疾く孫の顏も見度く、死なぬ間に御身の子を我膝の上に掻抱きても見まく欲し、良き緣を急きて花

嫁の程宜きを日頃覓めて居たりけるが、思へは捜る迄もなし、ドラこそ殊に相當しからずや、年には夙慧て心利きる氣性麗はしかり。彼女は我弟なる人の娘にて、弟は我と志合はで別れし後、外國に歿りけるその遺筐の一子はドラなり、彼女と御身を婚せんは什麼、此れ我が此日頃の望なるを」。斯く語りて我子の可と答へん事を豫じめ關りたりしに、ウイリアムは素氣なくも「我はドラと婚禮せじ我は如何にしてもドラを我妻とはせざるべし」とぞ答へける。老人は思掛なさを憤りに變へて、矢庭に腕を拱き「我子よ什麼にしても我吩咐を聽かぬ心か、何日までも聽かずとならば聽かずも宜し昔は親の吩咐は其子の法律なりし、今時の事知らぬ我は依樣昔の如くに我言葉を御身の法律となさしめでは止まじ、暫時考へて見よ、返答に一月の猶豫を取らせん、その折我命に從はゞ可し、若し尙ほ肯はぬとならば我にも覺悟あり、我を創り玉ひし主なる神に掛けて、復び我家の門の引手を御

身の手に穢しはさせじ、腕据ゑて返答せい」ウイリアムその返答は暴く、云ひ了りて自ら唇頭を噛みて父の前を去りぬ、それよりは有繋にドラを注意せしが、見れは覩る程我意募りて好かぬ心を増し、自然彼女に對して粗くも當りぬ。その間にドラは温順に二人に事へて居たり。ウイリアムは父と約束の一月をも經ぬ間に心を定めて父の家を後にし、野に働く小作人となり、半は戀愛半は見よがしの當付に仲間の娘メリ、モリスンと云ふを娶りぬ。その結婚式の鐘の鳴る音を遙に聞きしアランは姪のドラを側近く招寄せ「我か娘子よ我は御身を愛護するに欠けざらんやう今迄も務め此よりも務めんとするなり、さり乍ら若し御身彼の我息子なりしウイリアムと以來立話にてもする事あらんには、又その妻と呼ぶ者と一語なりとも交はし合はんには、此の家の裡に寸時も御身を置かじと心得よ、我が意志は法律とこそ思へ」と申渡しぬ。柔順なるドラは唯々として命を受けしも心の裡に思ふやう、「永い間には御伯父上の氣も變る事あるべし。さて何時しかと日も經去り、ウイリアムは男の兒を儲くるに至りしが、初より貯蓄の財なき彼が身上は其頃極めて不如意を告げ、父の萬一の救助を心待に父の家の邊を日毎に歩みたりしが、一徹なる父は見て見ぬ顔に援助などかまへて爲す氣色無かりけり、然れど例のドラは己が身に出來得る限りを絞りて密にウイリアムの許に送り、此は誰の贈物ぞと訝らせつゝ已獨り喜び居たりしが人の生命の圖り難くウイリアムは病の床に打臥し親切なる慈善の主はドラなりと云ふさへ知らずに秋の收獲頃此世の人にわらずなりにき。其由を知りたるドラは急きて先つメレを訪ひぬ、メレは赤兒を涙の眼に見戍り深き思に沈み居たりしが、ドラは自身の嫉み苦も忘れて優しげに「我は今迄伯父の吩咐に從ひ此家を訪はざりき、されど思廻らせば斯る光景の根源はと云へば皆我にあり、ウイルアムの身の上に先づ淺間しき我身の罪の結果こ

そ現はれたるなれ、何ばう可怖しき我罪業悔むも詮方なし、今はメレ殿、何も私の身に適合しき事あらば殘りしウイリアムの爲にも、ウイリアムが選びし御身の爲にても將た此の赤兒の爲にても何にても良し爲さんとす。御身も知る如く今年は五年來の豐穰なれば、先づ此子と我伯父の家に連行き、麥の裡に在らしめて、豐饒を喜ぶ伯父の目に此子を映さば、あながちに無情くも當るまじ、ましてウイリアムの兒と聞きては、さこそ哀を增して此兒を恵みやせん」斯語ひて其兒を掻抱き、ドラは麥畠を横りて路を急ぎ、罌粟生ひし丘の邊に坐りぬ、此許は伯父の農夫に見出さるゝ憂なく、ドラ女が彼處に赤兒を抱きて居ると伯父に告知らすものもなかりさ、少焉して又立上り伯父に行かんとしたりしが、心の裡何となう安からず復び腰を卸しぬ、其間を收獲者は忙はしげに收獲れしつゝ、日は漸くに西に傾き山の端に舂き、終に沒したる後を夕榮して地は徐に暗の中に包まれ了りぬ

尚ほドラは家に歸らで其許に在り、赤兒の乳に叫ぶ聲森に響きぬ。兎角して夜は明放れし時ドラは又も赤兒を抱きて立上り、其所邊咲亂れたる秋草の花を手折りて花環を造り、そと赤兒の帽に結付けて、伯父なる人の目に少しにても麗はしう憂き人の忘片身を飾りつゝ居たり、時しも彼伯父は野に來り、姪を見るや、つと走り來りぬ。「御身は昨日一日を何處に暮しつるぞ、その稚兒は誰が兒ぞ、其許に何して居るや」謂はれてドラは今更に、身に曲事のありけんを悔むかのやうに、頓に應答もせで、唯地頭を見詰めて居たりしが、やをら靜に「それこそウイリアム主の兒なれ」と答へぬ。「偖は我が禁したりし事をぞ御身は犯しつる」アランは未だ死にもしたりしウイリアムに心解けざりしなりけり。「あはれ我に向ひては伯父君の思ふが儘になし玉ひね、唯願はくば此兒は逝きし人に面じて慈しみ玉ひてよ」ドラは心を勵まして謂ひたり。アラン答へけるは、「我はその汝とウイリアムの妻と